



はたらく魔王さま! 7

和ヶ原聡司

Satoshi, W. agahara
Illustration ■ Onikou
イラスト ■ 029
和ヶ原聡司

7



よく聞きなさい、魔王!

TVアニメ

2013年 TOKYO MXほかにて
4月から 放送開始予定よ!!

アニメ公式サイト <http://maousama.jp/>



電撃文庫

610

はたらく魔王さま! 7

「訪問販売」——^{てんいば}漆原が悪徳訪問販売業者に騙された! 代金を取り返すため事務所に乗り込んだ魔王の運命は!? 「捨て猫」——帰宅した魔王が懐に抱えていたのは、銀色の捨て猫だった。飼い主を捜す魔王たちだったが……? 「お布団」——アラス・ラムスの布団を買いに行くことになった魔王と恵美。仲良し家族といった雰囲気、恵美は頭を抱えることに。「はたらく女子高生」——千穂がマダロナルドでバイトを始めたきっかけとは? まだ普通の女子高生だった千穂と、新人時代の魔王のお話。

「電撃文庫 MAGAZINE」掲載の短編3本に、書き下ろし中編1本をプラス! 庶民派成分4倍増しの特別編!!

コミカライズその1

はたらく魔王さま!

作画 荻 明生 監修 和ヶ原曜司
キャラクターデザイン 029

電撃コミックス 1~3巻
好評発売中! 全巻 6,999円

原作本編シリーズのコミカライズ! 漫画イラストによって描かれる魔王と勇者の庶民派生活は必見!

★月刊コミック電撃大王
【毎月27日発売】にて好評連載中!

※巻末巻は別送(30%)です。





9784048914062

ISBN978-4-04-891406-2

C0193 ¥610E



1920193006100



ASCII
MEDIA
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 **610円**

※消費税が別に加算されます



魔王城は六畳一間!?

フリーター魔王さまの庶民派ファンタジー
2013年4月 約TOKYO MXほかにて
TVアニメ放送開始予定!!

STAFF

監督・総監理人: 伊藤智彦 / 脚本・演出: 伊藤智彦
キャラクターデザイン: 高橋和史 / 音楽: 渡辺 剛 / WHITE FOX

CAST

魔王さま(魔王さま) / 佐藤利奈
庶民派魔王(魔王さま) / 日笠陽子
魔王さま / 日笠陽子
魔王さま / 日笠陽子
魔王さま / 日笠陽子
魔王さま / 日笠陽子





お かげ ほんとう さん 和ヶ原聡司

「仕事サボりがバレて相棒に用心上げられる和ヶ原」

和「待って！ 置いてかないで！

ちゃんと仕事するから！

どこへ行こうというのかね!?」

相「しばらくそこで反省してから仕事しなさい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま!

はたらく魔王さま! 2

はたらく魔王さま! 3

はたらく魔王さま! 4

はたらく魔王さま! 5

はたらく魔王さま! 6



コミックエッセイ

はたらく魔王さま! ハイスクール!

作画 三嶋くろね 原作 和ヶ原聡司
キャラクターデザイン 029

豪華コミックスBOX! 全
7巻 14冊

魔王と勇者+αが高校生に転生!? 学園を舞台にしたスピンオフコミックは、サブユメ成分多めでお届けします!

★電撃マオウ
【毎月27日発売】にて好評連載中!

わ-6-7



はたらく魔王さま! 7

和ヶ原聡司

電撃文庫 ③
610

電撃文庫

Satoshi Miyagahara
Illustration © Oriku
イラスト 029
和ヶ原聡司

7



はたらく魔王さま! 7

「訪問販売」——^{てんぱん}添原が悪徳訪問販売業者に騙された! 代金を取り返すため事務所に乗り込んだ魔王の運命は!? 「捨て猫」——帰宅した魔王が懐に抱えていたのは、銀色の捨て猫だった。飼い主を捜す魔王たちだったが……? 「お布団」——アラス・ラムスの布団を買いに行くことになった魔王と^{とみ}惠美。仲良し家族といった雰囲気、^{とみ}惠美は頭を抱えることに。「はたらく女子高生」——千穂がマクドナルドでバイトを始めたきっかけとは? まだ普通の女子高生だった千穂と、新人時代の魔王のお話。

「電撃文庫 MAGAZINE」掲載の短編3本に、書き下ろし中編1本をプラス! 庶民派成分4倍増しの特別編!!



9784048914062

ISBN978-4-04-891406-2

C0193 ¥610E



1920193006100



ASCII
MEDIA
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 **610円**

※消費税が別に加算されます





おがはたらくと 和ヶ原聡司

「仕事サボりがバレて刑棒に吊り上げられる和ヶ原」

和「待って！ 置いてかないで！

ちゃんと仕事するから！

どこへ行こうというのかな？」

和「しばらくそこで反省してから仕事しなさい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま!

はたらく魔王さま! 2

はたらく魔王さま! 3

はたらく魔王さま! 4

はたらく魔王さま! 5

はたらく魔王さま! 6

はたらく魔王さま! 7

イラスト: おぐら
029

2013年も宜しくお楽しみします！ 随分、海外旅行雑誌を見て行った気分になるのが早稲のひと時。



はたらく魔王さま! 7

和ヶ原聡司

雷撃文庫 745号



DENGERKI FUNKSI

和食屋敷 029
Y&Y P&A ■ 029
Illustration © GUSTO



和食屋敷 029
Y&Y P&A ■ 029
Illustration © GUSTO



CONTENTS!

**魔王、妖異な商売を
改めて決意する**
P011

魔王、捨て猫を拾う
P079

魔王と勇者、お布団を買いに
P145

**はたらく女子高生
- a few days ago -**
P211



hataraku
maousama!



魔王と勇者、
お布団を買いに



Satoshi Wajuhara
Illustration Oniku

イラスト 029

和ヶ原聡司

7

魔王、臨美は臨売を改めて決意する



それは、言うなれば肉を斬らせて骨を断つ、彼にとって捨て身の技であつたかもしれない。

争いに敗れ落ち延びた地でも、戦況を覆すには至らず、寡兵で戦えども周囲は敵ばかり。

彼の心を安んじる味方は無く、今日も主は徐々に命を削られ、君側の奸は己を律することを知らない。

事ここに至り、彼は決断するべきと悟つた。

絶望的な天命を覆すには、自ら動かねはならないと。

「……魔王様」

彼は、敵に送られた壇をもそもそと食む主に向かつて、頭を垂れた。

「ん？ 何、若屋」

敵の責め善と力の払底で、モチベーションが下がっていると、明らかに胃に収まりきらない量の食事を食べさせられて死相が見える彼の主、真奥貞夫は、くすんだ瞳で顔を上げた。

「しばし暇を、いただきますたく存じます」

「……は？」

「えっ？」

「何っ？」

「はあ？」

「ふにや……」

築六十年の本造アパート「ヴィラ・ローザ荘」の二〇一号室、六畳一間の魔王城にひしめき合っていた者達は、それぞれの反応で彼、芦屋四郎の顔を凝視したのだった。

※

「何？ これって、魔王軍壊滅の兆しと思っ
ていいの？」

魔王軍第一の敵である勇者エミリアこと薄佐恵美は、きょんととして芦屋の顔を見る。

彼女は窓際のパソコンデスクの前で、墮天使ルシフェルが更に墮落した姿であるニート、漆原半蔵の胸ぐらを片手で掴み上げ、今しも窓から外に放り投げようとしていた。

だが注意が芦屋に逸れたことで、剥まれていた漆原は解放され、壁の上に落下する。

「うきゆう……」

窓息す前になっていた漆原は目を回して昏倒してしまった。

宿敵の勇者の靴に発信機を忍ばせたことが露見し、今まさに制裁を受けようとしていたところであつた。

命を取られなかったただけ良しとするしかない。

「お、おい、暇ってどういう……」

忠臣の突然の暇をいかに狼狽えたのは、もちろん主の魔王こと、真奥貞夫である。

魔界の悪魔を率いて異世界エンテ・イスラに覇を唱えんとしていたかつてに比べると、確かに最近、あまり魔王らしいことをしていない。

かといって魔王軍四天王悪魔大元帥の中でも一番の忠臣、アルシエルこと高屋四郎に離反されるようなことをした覚えも無い。

何か問題があるとするれば、先日の大天使サリエルとの戦いで折角取り戻した魔力を、破壊してしまった日本のインフラを修復するために消費し尽くしてしまったことだろうか。

だがそれも、貪味一時間にわたるお説教の末に、諸校の状況を鑑みやむを得ない措置であったということと納得していたはずではなかったか。

「あ、あの……もしかして私が差し出がましいことしたからですか？」

不安げに尋ねるのは、今魔王城の中にいる者達の中で唯一の普通の人間にして日本人である、女子高生の佐々木千穂だ。

真奥のアルバイト先、ファーストフード・マダロナルド幡々谷駅前店の後輩クルーであり、魔王城の住人の正体や、異世界エンテ・イスラについて知る唯一の人物であり、あろうことが真奥が魔王であると知って尚、好意を寄せて、こうして時折手料理を差し入れてくれるのだ。「わ、私や鈴乃さんがご飯作ってくるから当屋さんのお仕事取っちゃってるとか、そういうことだったら私……」

「あ、いえ、そういうことではないのです」

悲しげな顔をする千穂に、慌てたようにとりなす芦屋。

「私もお相伴に与らせていただきますので、それは、その、とても助かっております」

芦屋の魔王城における現在の仕事は、炊事洗濯掃除家計管理という家事全般である。

そして主夫業を長らくやっていると、どうしても自分の料理の味に飽きてしまうのだ。

その点、千穂が差し入れてくれる料理は芦屋の数少ない癒しとなっているのである。

「なら、一体どういう風の吹き回しだ。私もエミリアと同じで魔王軍壊滅の先しとあればどこへなりとも逐電すればいいと思っているが、理由も分からずいなくなるのは薄気味悪い」
 ヴィラ・ローザ筆塚二〇二号室の住人にして魔王城の隣人、かつ、エンテ・イスラ西大陸で一大勢力を誇る大法神教会の聖職者、クレストイア・ベルこと鎌月鈴乃は、持ち寄ったおかずのタッパーを片づけながら胡亂げに尋ねる。

同じ手料理の差し入れでも、鈴乃は恵美と同じく魔王城の敵であり、彼女の手料理は悪魔に食品添加物程度の害を与える聖別食材で作られている。そのため、家計が助かるという利点は認めているものの、芦屋はあまり歓迎していない。

息詰まるような沈黙の中、芦屋は一瞬だけ千穂と恵美を見てから、苦しげに首を振る。

「……申し上げられません……」

「ちょ、おい、マジなのか、おい……」

芦屋が本気であるらしいことが徐々に分かってきた真奥は、千穂と鈴乃の料理攻めで夥れき

った腹の苦しみを押さえながら立ち上がった。

畳に膝をついている芦屋に駆け寄ってその肩を掴む。

「な、何が不満なんだ？ こ、こないだ俺がバイト増りについてコンビニでフランクフルト買い食いたこと怒ってんのか？ そ、それとも、頼まれてた買い物のレシート無くしたことが？ こないだトイレットペーパーのロールをダブルで買っちゃったのはわざとじゃないんだって！」「そんなことが不満で離反する大元帥ならさっさと更迭した方がいいんじゃないかしら……」
真奥の取り乱しように、彼が思い当たる事柄のあまりの小ささに、恵美は真奥の背中に憐れみにすら似た視線を投げかける。

「いえ、決して魔王様や戦場環境に不満があるとか、そういうことではないのです」

「ないんだ」

買い食いが露見して取り乱すような魔王や、魔王軍四天王の悪魔大元帥なのに六畳一間で延々主夫業を強いられているのが不満でないというのも、それはそれで問題な気がする。

「ただ……このままでは、遠からず魔王軍は再び滅亡の憂き目にあうやもしれません、私が下野すること、その滅びを少しでも食い止められればと……」

「言ってることが分かんねえよー はっきり言ってくれー」

真剣な眼差しで芦屋を見つめる真奥。

しばし二人の主従は思いつめたような表情で見合ってから、

「では……魔王様、少し外へ……」

芦屋は観念したようにうつむくと、真奥と二人で部屋から出ていく。

気絶している漆原を除く女性三人は訳が分からず顔を見合わせているが、やがて戻ってきた真奥は、酷く神秘的な顔をしていた。

「おい恵美、それとちーちゃん」

「……何よ」

「は、はい……」

「悪いが今日は帰ってくれねえか。事情は後で話す。今は……俺達だけにしてくれ」

深刻な面持ちの真奥の顔には、普段の余裕が感じられない。

どこか、悲しげな雰囲気さえあるその顔を見て、恵美は鼻を鳴らした。

「……はいはい、分かったわよ。行きますよ、千穂ちゃん」

「え、ゆ、遊佐さんでも……」

「ちーちゃん」

状況が見えずに混乱する千穂に、真奥は真摯に声をかけた。

心配はいらない。そんな声が、聞こえた気がした。

「……わ、分かりました……でも……」

それでも千穂は、帰ねずにはいられなかった。

「芦屋さん……どこかに行っちゃったりしませんよね？」

「……大丈夫だよ」

芦屋は黙して語りたがらず、代わって真奥が答える。

「本当でしょうか？ 一人で遊覧車にでもなつてたら斬るわよ」

「お前はとつとと帰れ！」

千穂には「元気づけるようにしつかりと頷き、恵美のことは邪険に遠い私う真奥。

二人が玄関を出ると、廊下で芦屋が無言のまま立っていた。

恵美は一顧だにせず、千穂は小さく一礼してアパートを後にする。

その二人の背を目で追いながら、芦屋は深くため息をついた。

「……なんだか、妙なことになつたな」

ヴィラ・ローザ笹塚の住人である鈴乃は一人取り残されたわけだが、さすがに居心地が悪そうにしている。

「では、私も……」

そう言つてそそくさと立ち上るろうとするのを、急に外から戻ってきた芦屋が止める。

「待て、クレスティア・ベル、貴様は残れ」

「……なんだと？」

見ると、真奥も何やら真剣な目で睨みつけてきている。

真奥と千穂が帰る前とは打って変わって、鋭利な空気を発する二人に、鈴乃は思わず身構え、自分の髪に刺さった簪をさっと抜き放つ。

利那の光が閃き、彼女の髪を纏めていた小さな簪が、小柄な鈴乃に似つかわしくない巨大な大槌へと変化するではないか。

鈴乃の簪は、十字型の道具を武器として進化させる法術、武身鉄光の媒介である。

そのパワーは新宿駅の変電施設を一撃の下に破壊する程で、いざとなれば魔力を失った貧乏悪魔三人を屠ることなど造作もないが、こうして囲まれるとやはり緊張の色は隠せない。

「下手なマホはよせ。貴様らが東になっても、私に敵うと思うのか？」

そう言って牽制する鈴乃だが、真奥も声屋も堪えない。

「黙れベル。貴様には我々に協力してもらおう。拒否権は無い」

「お笑いだな、拒否権が無いだと？ 貴様らの今の力で、どう私を従わせるつもりだ？」

「なんてこたないさ。お前は、俺達に協力するしかない」

真奥は腕組みすると、窓際で昏倒しっぱなしの漆原を横目で見た。

「漆原が家計から勝手に使い込んだ発信機の購入費用四万円。それを補填するためにはない」
アパートの外の道を、割れたスピードカーでがなる廃品回収業者の軽トラが通過していった。

「……………よんまんえん？」

臨戦態勢だった鈴乃の目が点になる。

「漆原が、サリエルとお前にさらわれた東奥とちーちゃんの居場所を特定するために使った、機械の値段だよ」

「い、居場所を特定する機械、たとう？」

鈴乃は驚いて漆原を見た。

確かにサリエルに従わされて都庁の屋上にいたとき、真奥がどうやって自分達の居場所を掴んだのかはずっと気になってはいた。

「そ、そんなことが可能なのか……」

「とにかくだ、分かっただろうべル。貴様が私達の要求を拒否できない理由が」

「芦屋は明日から、ちーちゃんを助けるために使った機械の代金四万円を補填するために出稼きに出るんだよ。暇乞いはそのためだ。今から俺がいくらバイトのシフト増やしたって、四万なんて天文学的な数字は補填不可能だからな」

芦屋と真奥の続けざまの言葉に、

「……………」

鈴乃の顔が悔しそうに歪む。

「半分とは言わないが、三分の一くらいは、お前にも責任はあるだろ。特にちーちゃんを巻き

込んだあたりなんかな」

「そ、それは……その……」

鈴乃は反論しようとするが、すぐに氣勢がそがれ、大槌が力なく壁の上に下ろされる。

数日前、恵美の持つ聖剣、進化聖剣・片翼、を狙って大天使サリエルがエンテ・イスラの天界より現れ、その争いに巻き込まれた千穂は、あわや異世界に連れ去られそうになった。

そのとき鈴乃は、立场上、天使の命令に抗うことができず、千穂の誘拐に加担してしまっている。

その後、真奥の活躍で間一髪、東京都庁の屋上で危機に陥っていた千穂と恵美は助け出され、鈴乃もエンテ・イスラの因習から解放されたのだが、そのとき彼女達の居場所を知る由もなかった真奥が迷わずその場に到達できたのは、漆原が恵美の鞆に仕掛けた発信機の信号を追ったからだだったのだ。

「結果だけ見れば一方的に漆原の使い込みを責めるわけにもいかねーんだこれが。実のところ、発信機が無きや俺はあてもなくあっちこっちぐるぐるして、ちーちゃんも恵美もとっくに連れ去られてたかしんねーんだからな」

「とはいえ、四万円も使う必要があったかと言えば、そこは微妙ですがね」

「それも結果論たる。もちろん漆原の使い込み癖は直す必要があるだろうが、この件に関してだけは……」

真奥の視線の先には、すっかり消沈してしまっている鈴乃がいた。

「だから、エミリアと千穂殿を雇わせたのか」

「そうだ。特に佐々木さんなど、そんな話をすればあの性格だ、自分が悪い自分が弁償するな」と言い出しかねない」

芦屋は頷く。

「かといって、エミリアから施しを受けるわけにはいかない。あくまであの機械は、エミリアではなく佐々木さんを救うために利用されたのだ。しかし、佐々木さんに責を負わせるのは間違いだろう。エンテ・イスラの事情に巻き込んだのは我々なのだから」

先ほど千穂が、芦屋が書いた家計簿の「カード引き落とし……」とある円「使用者・ウルシバカ」の項目を見たときに、芦屋が殊更に漆原の無駄遣いぶりだけを強調したのも、千穂にいらぬ気を遣わせないためだ。

千穂にも恵美にも、漆原がさしたる理由も無く敵である恵美の動向を探るために要らぬ物を無駄に買った、と思わせておいた方が、余計な気を遣わせずに済む。

その結果、女性のプライバシーを全力侵害したという事実が残り、漆原は恵美に半殺しにされかけたわけだが……。

「……魔王軍のくせに、なんだその行き届いた気配りは」

鈴乃は忌々しげに呟くが、真奥達の耳には届かなかった。

「……で、私は何をすればいいんだ。弁償か？ 何割か負担すればいいのか？」

一番考えられるところはそれだろう。

だが、真奥も芦屋も、鈴乃をバカにするように鼻を鳴らした。

「見くびるな、我ら誇り高き魔王軍、天敵と言うべき大法神教会から不浄な金を巻き上げようなどとは断じて思わん」

「いや、芦屋、それは何かおかしい」

「たかが漆原の使い込みごとき、この私一人で補填してみせる！ だが、そのために私は数日間魔王城を留守にせねばならん！ クレスティア・ベル！ その間の魔王城の食事、全て貴様の金で賄え！」

「え？ なんで!?」

不満の声を上げたのは鈴乃でなく真奥だった。

「なんですか魔王様」

「いや……無理に鈴乃に作らせなくても、お前が作り置きとかしてつてくれりゃいいんじゃないの？」

「何を仰います。ベルの料理は素材が聖別されていることを除けば栄養も味も家庭料理として是一流です。食費も浮きますし」

「む、ま、まあ、それほどでもない」

「疲めるな！ 照れるな！ いや、でも、それ金もうより情けな……」

「それに、ベルが食事を作り続ければ、心配で様子を見に来られた佐々木さんの目をごまかすこともできます。一石二鳥！」

真奥の反論をビシリと制する芦原だが、その論法だと、魔王城に差し入れる者同士、鈴乃に対抗意識を燃やしている千穂の気持ちを利用していることにならないだろうか。

「そ、そおかあ？」

默然としない様子の真奥だが、芦原はダメ押しの一言。

「それに、そうでもなければ魔王様ですら、買い食いの誘惑に負けてしまい、余計な食費がかかってしまいそうですし」

「う」

取り乱して買い食いの告白をしてしまった真奥は、言葉に詰まる。

「それに、漆原など私の留守をいいことにデリバリーだのインスタントだの、栄養や健康は二の次のコストパフォーマンスの悪い食事をとることは目に見えております。保存料や化学調味料にまみれた冷凍輸送の外食と、フレッシュな生鮮食材料理であれば、どちらを取るかは自明の理！」

「いや、まあ、夏だし、実は生の食材はもうあまり残ってはいないのだが……」
頬を掻く鈴乃の呟きは無視された。

「とにかく、そう長くはかかりません！ 私がいけない数日間だけ、佐々木さんやエミリアに事情を憐れられず、魔王様やルシフェルが清貧に過ごしてくだされば、魔王城の家計は黒字に復し、魔王軍崩壊の危機は回避できる！ それで良いのです！」

「それで良いのか……」

「それでいいのか」

鈴乃と真央は異口同音に言う。

「……ああ、もう分かった！ そんなことでいいなら協力してやる！ 千穂殿に申し訳ないと思っていたのは私も一錯だ！」

「なんだ、『協力してやる』とはまた随分上から自慢だなクレスティア・ベル！」

「……協力させてもらう」

居丈高な芹屋に、顔を真っ赤にして体を震わせながらも大人しく従う鈴乃。

「……うるさいなあ、一体なんなの？」

そのとき、図々しくも昏倒から普通睡眠へとシフトしていた漆原がむくりと起き上って、目をこすりながら三人を見る。

「まあ、あれだ、漆原」

「へ？」

真央はしみじみと呟く。

「飯と金と人情は大切にしろってこった」

「……なんの話？」

（うしろ向き）

漆原の疑問に、答えられる者はいなかった。

※

「いいか、調味料はそこ、米はもうすぐ無くなるが、買い置きがシンクの下、戸棚の奥にある。米櫃はきちんと水拭きして乾かしてから入れ替えろよ」

「……ああ」

「一応包丁は砥いであるが、物足りないようなら砥石もシンクの下だ。布巾類は使ったらこの小型洗濯ビンチに纏めて干してここにひっかければいい」

「分かった……」

「それから、炊飯器の釜と蓋は一回毎に念入りに洗え。漆原が使った後は必ずどこかに乾いた米粒が残っている。裏蓋も忘れるなよ」

「もういいからさっさと出てけ」

翌早朝、魔王城に呼び出された鈴乃は、芦屋の細かい指示にうんざりしていた。

彼女が目撃すばらというのではなく、芦屋が予想以上にキツチン周りを整えているのがなん

となく痛^{いた}だったのだ。

出発直前、芦屋のキッチン回りへの注意は多岐^{たき}に及んだ。

米以外の食材は用意も調理も全て鈴乃持ち、ということまで話がついた。

しかし鈴乃は、昨日まで喜々として聖別食材を調理して持ってきていたくせに、いざ求められると途端に「デリバリーを嫌^{きら}がるようになった。

まだ魔域で作るだけ作る方が、「わざわざ持っていてやってやっている感」が無くなっているのだそうだった。

「あ、なんだ、芦屋もう出んのか」

鈴乃の叫^こび声で、まだタオルケットにくるまって眠っていた真奥^{まおく}が目を覚ます。

「ふわあ……なんか涼^{すず}しいな。朝だからか？　って、五時半!?　お前こんな時間から出かけるのか」

「集合が六時半新宿西口^{しんじゅくせいこう}のバルスビル前^{まえ}ですの、早めに出なければと思いますて」

「……どこ行くんだか知らねエが、まあ気をつけて行けよ」

「了解致しました」

芦屋が仕事に出ることは了解した真奥だが、どこに、何をしに行くのか、芦屋本人がなぜか話しながらなかったたので結局分らないまままだ。

違法な仕事や身の危険があるような仕事ではない、とのことなので深くは聞いた覚えなかつ

たが、週末の金曜日の早朝から新宿に集合して、一体どこに行くのだろう。

タオルケットを斜いで立ち上がった真奥は、半袖の腕を抱えて少し身震いする。

「……朝食ならもうできている。寒いなら、味噌汁でも飲めばいい」

そんな真奥を見て、鈴乃が嫌そうに言う。

見ると、ガスコンロの上には、涼しい気温の中で湯気を上げている電気鍋が鎮座していた。

「おお、早速か、いただくわ」

いそいそと鍋に駆け寄る真奥を見て、鈴乃は更に不機嫌そうに顔を歪め、声屋は満足げに頷く。

「それでは行って参ります魔王様。くれぐれも、ルシフェルの動向にはご注意願いますよう」

「ああ、まあ大丈夫だろ。更奥に殺されかけてるんだし、これ以上使ひ込むようなことはないだろ。……今月は」

「そ、そうですね……今月は」

当の漆原は、タオルケットにミノムシのようにくるまったまま、穏やかな寝息を立てているのだった。

「……………にしても、本当に寒いな」

「うむ、夏場だというに、これは確かに寒い。雨でも降るのではないか？」

芦屋を送り出してから一時間ほどして、太陽はもう昇りきって町は目覚めているのに、気温が一向に上がってこない。

テレビもラジオも無く、ニュース配信が行われる携帯電話も持っていない真奥と鈴乃には知りようもないことだが、この日は太平洋高気圧の勢力が弱く、大陸から近づく低気圧の影響で関東地方全域の気温が低下傾向にあった。

前日の最高気温は三十度近かったのに、今日は十九度と予報されていた。

漆原も目覚めはしないものの、寒いのかタオルケットを抱え込んで小さく丸まっている。

「ちよつと、今日は長袖着るか……」

真奥は押入れを開け放ち、冬物がしまわれている簡易衣装ケースを引っ張り出すが、「でもいくら寒いからつつたつて、さすがにセーターとかコートは暑いよな……」

しまわれていたのは、本格的な冬服ばかりだった。

真奥と芦屋は、日本に来て初めての冬を、着ぶくれることで過ごしていた。

満足な暖房器具どころか布団すら無かった魔王城で凍死するのを防ぐべく、安価で厚手の衣類ばかりを購入した記憶が甦ってくる。

「おつかしいなあ……去年ヒートチャックのシャツ、買ったはずなんだがなあ」

ユニシロが近年発売している、熱を生んで閉じ込めるアンダーウェアを、真奥も芦屋も一着

ずっただけ購入していたはずだ。

だが、探せど探せど、衣袋ケースの中からヒートチックは出てこなかった。

「アルシエルがいないと、しまった冬物の場所も分らないのか」

冷めた目で見てくる鈴乃。真央は目をそらす。

「貴様、靴下に穴が空いたら買い置きの新品の場所が分からないタイプだな」

「バカ、買い置きの新品なんかあるか。穴が空いた部分を産屋が繕うに決まってるんだろ」

二人の後ろで、漆原が寝返りを打つ。

「……魔王、貴様ら、そんなに貧しいのか」

「お前、上級聖職者だからって貧民をバカにすんのか。使えるものはとことんまで使い倒すのが節約生活ってもんだろうが」

憤慨した様子の真央は、産屋の隅のカラーボックスを漁り何かを取り出した。

「……電球？ 手洗い場の予備か？」

20Wと書かれたボール紙から、電球を取り出して鈴乃に手渡す真央。

「探ってみ」

「ん？ ……なんだ、切れてるんじゃないか。ゴミの目に出し忘れたのか」

「ンなわけないだろ。靴下の指先繕うとき、これを破れた靴下の中に入れると縫いやすくなるんだよ。機会があったら今度やってみろ」

また、漆原が寝返りを打つ。

「ちなみに青屋のソーイングセットの中身は全て百均で……」

「もういい」

鈴乃は悲しくなってきた。

「……出勤は昼前だったな。昼食はいるのか」

「おう、頼むわ」

切れた電球を後生大事にしまい込む真奥。

「……仕込みはしてあるから、食べたくなったら言いに来い。ルシフェルを起こしておけよ」

「おう、悪いな」

必要なことを言い置いて、鈴乃は自室に戻った。玄関に入った正面に置いてある鏡台に自分の姿が映った瞬間、

「悪魔大元帥が、靴下を、切れた電球で……」

草履も脱がず、その場で膝をついて頭蓋れてしまった。

先日の騒動で鈴乃に自転車を壊されてしまったせいで、真奥はしばらく徒歩通勤を余儀なくされている。

昼ごろには、歩いて出勤したおかげで涼しいとはいえ汗ばむほどになったが、夜になればまた少し冷えてくるかもしれない。

夕方、学校を終えた千穂が出勤してきて、少しだけ心配そうに尋ねた。

「あの……結局、芦屋さんは……」

「あ？ ああ……」

昨日、うやむやのまま千穂と東真を帰宅させた後、結局芦屋がその後どうなったかを二人には話していない。

だが、千穂に限って言えば、本当のことを言うと言責任を感じてしまう恐れがあるので、適当にごまかそうと、魔王軍と鈴乃の間で取り決めがなされていた。

「あー、その、大したことじゃねえの。ワリのいいバイトが入ったってだけの話」

「ワリのいいアルバイト……ですか？」

「おう。でもほら、サリエルとか鈴乃とかの騒ぎの後たる？ そんなときに家留守にすんのが心配だったってことらしいぜ？」

一切嘘は言っていない。

ただ、それが黒字の強化ではなく、赤字の補填をするためだということを黙っているだけだ。

「そ、そうだったんですか。じゃ、じゃあ、夜には帰ってくるんですね？」

「あー……その、何日か、泊まり……ばい」

「泊まりのお仕事なんてあるんですか？」

「さあ……」

真奥の返答の歯切れが悪いのは、何も隠し事をしていただけでなく、実際に芦屋がどこに行ってしまったか分からないからである。

真奥がマドロナルドで働くようになってからも、芦屋がちょくちょく車発でアルバイトに出ていることは知っていたが、全ての仕事の内容を把握しているわけではなかった。

「ただ、よく分からないんだけど、魔王軍の将としては手を出すまいと思っていたバイト、とは言ってた」

これは、真奥が一人廊下呼び出されたときに交わされた会話である。

「な、なんですかそれ？ な、何か危ない仕事とか……」

「違法だったり身の危険があるような仕事じゃないらしいけどな。ま、芦屋のやることだから心配はしちやいないがな」

「そうですか……」

真奥のあやふやな回答に、表情を曇らせる千穂。それを見た真奥は、カンのいい千穂が気づく前に慌てて話題を変える。

「いやむしろ、芦屋がいないことで今魔王城には凄惨な一人でのいるわけだからな、どっちかっついたらそっちの方がずっと心配。また無駄な買い物したりとか、ガスの元栓開きっぱなし

とかなきやいいな—なんて……」

「ああ……」

殊更明るく茶化してみるが、千穂の表情はあまり変わらなかった。

「……ま、あれだ」

真奥は複雑な顔で、千穂の肩を叩いた。

「深く気にしないでくれ、どうしても気になるっつ—んなら、芦屋が帰ってくる頃に、また料理食わしてくれよ。そしたらあいつも、何か話さだろうからさ」

「……はい、じゃあ、何かおもしろいもの作っていきますね」

ようやく少したけ千穂の笑顔が戻ってきて、その頃合いから夜の客足が増えはじめ、真奥も千穂も仕事の喧噪へと戻っていく。

夜の九時、高校生の千穂はシフトから上がり、帰宅した。

こまかしされたという気はしなかったが、芦屋が帰って四万円を補填できれば、最悪バレたとしても、無用な責任を負わせないで済む。

自分の不始末の責を女子高生に負わせるなど、悪魔の王の名折れである。

今はただ、芦屋がいない留守を、漆原と共に守るだけだ。

「……それが、一番不安なんだけどな」

ひとりこちながらも、金曜の夜の勤務を滞りなく終えた真奥は、暗い夜道を歩き帰路に就く。

やはり夜も多少気温が低く、少し肌寒くすらあった。

今日の夕食は、鈴乃が煮込みうどんを作ると言っていた。

夏の最中に食べるものではないが、今日くらいの気温ならそれもありだろうと少し楽しみにすら思いながら帰宅した真奥を襲ったのは、衝撃的な事実だった。

「おい……おい、これは、どういうことだ」

帰宅した真奥は、魔王城の玄関を一步入った瞬間、目の前が真っ白になる。

部屋の中には、難しい顔で座っている鈴乃と、絶望に打ちひしがれた様子の漆原。そして。

彼らの前に、真奥が見たことのないものがたくさん置いてあった。

生の果物、無数の洗剤、今日付けの新聞紙、そして……。

「新品の消火器、羽毛布団五組、シンクには浄水器がある」

「なっ……なっ……なっ……」

「しめて、四万五千円だそうだ」

鈴乃の声が、まるで遠いあの世からの死神の呼び声のように聞こえた。

千穂は家の自室のベッドの上で、ハートのクッションを抱えながら、電話をしていた。

「……あ、もしもし、千穂です、遅い時間にすいません。はい、やっぱりお仕事に出たみたいです。……ええ、泊まりだって言っていましたから、すぐには帰れないんじゃないかって……やっぱりそうですよね」

決して明るいとは言えない表情で会話をする千穂。

「明日土曜日ですから、また何かご飯のおかず作っていきます。それくらいしかできないです。はい、はい、それじゃ」

電話を切ってベッドの上に放り投げると、千穂は身を横にして深くため息をついた。

「漆原さんに、悪いこと言っちゃったな」

※

「う、漆原、お前これまさか……」

今までパソコン周りの品やお菓子や清涼飲料くらいしか使い込むことのなかった漆原が、真奥や当屋の留守をいいことに好き勝手に買い物をしたのかという予想が一瞬間をよぎった真奥だが、

「ち、違ふよ！ 僕が好き好んでこんな生活感あるもの買うわけないだろ！」

珍しく漆原が狼狽えた様子で反論する。

「じゃあなんだこりゃ？ ええ？ 俺が昼間出かけるまでこの中のどれ一つとしてこの部屋には無かったぞ？」

「落ち着け、魔土」

一人暮らしの顔で座っていた鈴乃は、真奥の目の前に領取書のようなものを突き出す。

「なんだこりゃ、領取書……じゃなくて、買い取り証だ？ 二千円、外付けハードディスクドライブ？」

「……僕だって、芦屋がなんで働きに出たか、分かってるつもりだよ」

うつむいた漆原がぼつりと言う。

「一人で取り返すのは無理にしても、少しくらいは返そうかと思って……」

「話を総合するに、ルシフェルはどうやら、買い取り詐欺に引っかけたらしい」

「買い取り、詐欺？」

聞き慣れない言葉に、真奥は首を傾げる。

「貴金属の買い取りをする、と声をかけてきて家に上がり込み、不当に低い査定でその家の品を強引に買い取る手法のことだ」

「……ああ、なんか思い出してきた」

地域清掃の合間に近所のお年寄りと会話をしたとき、そんな話が出たような気がする。

主に高齢者や専業主婦を狙ってそのような業者が出没すると噂になっていて、同鑑板などで注意が促されていることを、店の常連でもある渡辺老人から聞いたことがあった。

「じゃあお前、四万円補填するためにこのパソコン部品を売ろうとしたのか」

「……だったんだけど……」

「どうやら、かなり悪質な業者に引つかかってしまったようだな」

鈴乃は珍しく、漆原に同情するような目つきだった。

「買い取りに偽装した、押し売りだったようだ。私が異常を察して出てきたときには、既にこの有様だった」

「で、でも、新聞や果物までそうなのか？ 消火器からフルーツまでって、どんな規模の押し売りだよ」

「ごめん、果物と新聞は別口。純粋に押し切られた」

「おい」

真奥はがっくりと腰をつく。

「世間知らずか！ いらねえって言って追い返せよ！」

「だって試しだなんだって言って、取ってくれるまで帰らないとか脅しかけてくるんだより？ 玄関のドアがっちゃんがっちゃん鳴らすし、壊されたらそれこそまた出費の危機たる」

「だからってそれで取っちゃったら向こうの思うツボだろうが！」

「そりやそうだけど、何言ってもものらりくらり寝て帰ろうとしないんだもん。口が上手いというか、小ずるいというか……」

墮天使で悪魔のルシフェルにそこまで言わせる勧誘とはどのようなものだったのだろうか。そのような手合いと出会ったことのない真奥には想像もつかない。

「魔王、今ここでルシフェルを責めても始まらん。悪魔大元帥のくせに新聞の強引な勧誘に押し切られる墮天使を責めても始まらん」

「べル、お前、それ傷口に塩。塩だから」

「新聞とフルーツはいい方だ。新聞は営業所に抗議して引き取ってもらえばいいし、フルーツはそう高額ではない。スーパーで同じものを見て、私なら半額でも避ける品質だが」

鈴乃は置かれた梨を手にとって言う。

「だから、傷口に塩……」

「それよりも、問題は残りの三つだろう。ルシフェル」

「あ、ああ……真奥、これ」

漆原はつまっぱなしのパソコンを指し示す。

「なんだ、ホームページ？ デラックスライフ・インターナショナル・ホールディ……なんだこの長くて意味の無い会社名は……横文字にすりゃいいってもんじゃねえぞ」

「その賈い取り会社のホームページだよ。一応代表番号があって、電話かけてみたんだ。スカ

イフォンで」

「で？」

「全く出る気配が無い。調べてみたら、本社は都内の雑居ビルだった。ハッキングしてIPアドレス調べようとしたけど、そもそもホームページがレンタルサーバーにあって、会社のパソコン自体はネットに繋がってない」

「……つまり？」

「消火器と羽毛布団と浄水器……引き取ってもらえないかもしれない。絶対、良くない会社」

「おい、おい、ちょっと待て、さっきこれしめて四万五千円って言ったな……」

漆原と鈴乃は、ふっと顔を青ける。

漆原自身は財布を持っていないので、銀行に預金してある以外の現金は、全て芦屋が真奥が持っている。

ということとは、クレジット払いが引き落としの、銀行口座に記録の残る取り引きをしてしまったということだ。

「芦屋は、四万円補填するために働きに出てんだぞ。それなのに……」

全く意味の無い支出が四万五千円、出てしまっていたら。

真奥と漆原は、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「芦屋が帰ってくる前になんとかしねえと」

「うん、多分、悪魔みたいに怒ると思う」

「元々悪魔だろうが……」

鈴乃の突っ込みは無視された。

「芦屋は確か、日曜の夜に帰ってくるつつつてたから……」

「それまでになんとかしないと、僕たち、月曜の朝陽を拝めないと思う」

「お、俺は何も悪くねえじゃん!!」

「いや、アルシエルが、そんな言い訳を聞くとは思えない。監督不行き届きと言うやつだな」

「やっぱり?」

鈴乃の冷静な分析に、真奥の悲痛な叫びがアパートを揺らしたのだった。

※

「ここか……」

真奥はビルに入居しているテナントブレイトを確認する。

デラックスライフ何某社の入る雑居ビルは、意外にも魔王城の徒歩圏内にあった。

てつきり都心の繁華街や歓楽街にあるのかと思いきや、甲州街道と交差する幹線道路沿い

にひっそり立っている古いビルだ。

「ま……荒事にはならなそうだな」

漆原に、良くない会社だと言われた真奥はそれなりの展開を覚悟していたが、意を決して階段を上れば、堂々と会社の表札を掲げ、透明の強化ガラスドアの向こうはそこそこ整えられたビジネススペース。女性従業員の姿も見える。

漆原が事実上押し売りされてしまった品を引き取ってもらうためにやってきた真奥は、ほっと胸を撫で下ろした。

ドアを引いて中に入ると、外から見えた女性従業員がこちらに気づいて立ち上がる。

「いらっしやいませ、今日はどのような用件でしょうか？」

「あの……昨日、実はこちらの会社の訪問販売を受けたのですが……」

真奥は事情を説明する。

あくまで禮便に話を進めるため、昨日訪問販売を受けたこと、家にいたのは自分ではないこと、購入したものは全て未使用なので引き取ってほしい旨だけを伝える。

「かしこまりました。昨日の憶振で……担当の者をお調べいたしますので、少々お待ちください」

すると思いのほか、あっさり担当者を探してくれる女性従業員。分厚いファイルを、受付スヘースから見えるキヤビネットから取り出してしばらくページを繰り、おもむろに内線電話を取り出す。



「受付です……返品のお客様が……はい、分かりました」

女性従業員は受話器を置くと、受付スペースの脇にある小さな椅子を指し示した。

「ただいま返品担当の者が参りますので、あちらにかけてお待ちください」

「あ、はい」

予想外に順調だ。

もしかしたら昨日漆原の電話に出なかったのは、小さな会社だから回線が塞がっていたとかその程度の理由だったのかもしれない。

真奥が椅子に腰かけていると、奥からスーツ姿の男が現れた。先ほどの女性従業員と少し会話をしてからこちらにやってくる。

細身で真奥とそれほど変わらない体型の眼鏡の男だ。

「お待ちせいたしました。私返品担当の九流と申します。真奥さんでいらしゃいますね」

「どうも……」

「ええと、お客様が返品なさりたいというのは……これですね、消火器と羽毛布団、それと簡

易浄水器」

「あ、はい、それですそれ……」

ふと、真奥は違和感を覚えた。

自分はまだ、名前を名乗っていない。

購入した（させられた）品目を伝えた覚えも無い。

もしかしたら、昨日のこの会社の販売実績は、魔王城だけだったのだろうか。

「ええとですねえ……大変申し上げにくいのですが、基本返品というのは不可能なんですよ」

「……はい？」

最初にぶつけられた一言で、その違和感は一気に膨れ上がる。

「特に浄水器はですね、未使用と言っても、取り付けの際に試して水を流しておりまして、純粋に未使用とは言いがたくて……」

「ちょ、ちょっと待ってください。で、でもそれだけですって!?」

これは本当のことだった。

漆原が押し売りに押し切られたことを知った鈴乃が、水道をあえて使わなかったのである。

「おっしゃりたいことはよく分かりますが、取り付けの際にお客様に立ち会っていただいていますし、こちらの約款にも浄水器についてはそう規定されているのです」

「約款で……」

九流が毒舌した紙は、真奥が見たことのないものだった。

「こんなの、昨日は受け取っていません」

「お渡ししたはずですよ。その後の管理はおお客様の責任ですので、私どもではちょっと……」

「一日で無くすわけじゃないですか」

「そうおっしやられましたも……」

九流くりゅうはのらりくらりと線しんす。

困惑くわんごつする真奥まおくをよそに、九流は史に言う。

「消火器しょうかきに関しましても、正直お引き取りはいたしかねます」

「はあ!」

「消火器の設置基準、ご存知ですか？」

「設置基準？」

「はい、集合住宅の場合、各部屋や階段から20m以内の場所に標識を掲げて、専用の設置台の上に消火器を置かなければなりません」

「いや、普通に廊下に一本、共同のが置いてありますし」

「たととしても、あのアパートですと、各階に二本ずつなければいけない計算になります。設置義務は20mごととなっていますが、これは建物の面積によって変わってくるのです。一度設置したものを撤去してしまうと、私どもが法律違反を犯すことになってしまいますので……」

例えばそれが本当だとしても、それを店子とんこである真奥が実費で負担しなければならない義務は生じないはずである。

ここまで来ると、真奥も段々分かってきた。

「じゃあ、羽毛布団は」

「それは、封を切らず、完全未使用でしたらお引き取りいたします。羽毛掛け布団七組セットですね」

「……五組の、はずですけど」

「いえ、七組です、こちらに、明細が」

九流が手にした紙は、転写シートで書かれた納品明細だった。漆原の汚い平仮名文字も転写されていて、体裁が魔王城に残されていた領収書に似ている。

ただ印字された納品内容の、羽毛布団の点数が「七組」となっていることだけが違っていた。転写シートに、小細工がされているのだ。

「……五組となると、数が足りていません、そうしますとその五組が未使用としても、満額での返金と言うより、中古買い取りという形になってしまいます」

要するに、最初から返品に應じる気などさらさらないので、

あくまで低姿勢を装い、確かな説弁と小細工で客から金を巻き上げる。

商品そのものに目立った欠点が無いから、不用品を押し売りされた客は返品できずに泣き寝入りする、という構図だろう。

「あくまで、シラ切り通すのか」

さすがの真奥も顔を曇らせて、言葉が荒くなる。

「シラってなんですか。これはお客様との合意の上に成り立った取引引きですよ。このように

明細も残っています。不良品を販売した覚えもございません」

「何が合意の上に成り立った商売だ。人謀るようなマネしやがって、この真夏に好き好んで掛け布団だけの羽毛布団買うバカがどこにいる」

「……あのね、そのバカはおたくの部屋にいたんですよ」

突然、九流の口調が変わった。

穏やかそうに見えた顔が、一瞬にして張む。

「そもそもおたくが買うって言ったわけでしょ？　うちは商品を持ち込んだだけ。買えって脅したわけでもない。それなのに難癖つけられちゃ、こっちが困るんだよ。おたく、いわゆるクレーマーってやつですよ」

「何っ？」

真夏はいきり立つが、九流は全く平然としている。

「いいですよ別にこっちは。約款も、おたくの身内が書いた受け取りサインも、契約書もある。商品だって一切不良品は無い。それでもうちがおたくを謀ったって言うなら、裁判でもなんでも起こせばいいじゃないですか。まあ、その場合まず間違いない書類持ってるこっちが勝ちますし、その後は買クレマーとして逆控訴させていただきますけど。その場合、うちが間違いない勝つんで、裁判費用は全部おたく持ちになりますよ？　いいんですかそれでも」

「……………」

突然こんな態度に出てくる相手が、まっとうな商売を営んでいるはずがない。

冷静に考えれば真奥にだって、九流の論法が筋が通っているようで全く通っていないことは分かったはずだ。

だが、真奥には時間が無い。

現実には裁判のシステムなど全く分からないし、そんな時間をかけている間に芦屋が帰ってきてしまう。

だが、怒りに任せて行動すれば、どうしたって状況は打開できない。

相手は、商売をやっているのではない。人を欺く詐欺師。

こいつらは人間の皮を被った悪魔なのだ。

自分達のことを全力で棚上げして憎々しげに相手を睨みつけるが、サリエルとの戦いで魔力が完全私蔵している真奥がいくら販んだところで、相手は屁ほども思わない。

「あのね、分かったらお引き取りいただけますか？ あんまりしつこいと警察呼びますよ」
わざとらしく膝を払って立ち上がる九流。人のよきそうだった女性従業員も、毒刺さるよう

に受話器を手にもちらを見ていた。

これ以上、話を続けても相手が折れるとは思えない。だが、ここで引き返したりすれば間違

いなくこちらの負けだ。
だが粘りすぎると、警察ではなくもつと悲憤な連中を呼び出すかもしれない。

今の真奥は戦いの果てに魔力が底をついた、ただの人間の若者なのである。

「呼べるものなら呼んでみればいいじゃない」

そのときだった。

ドアを開けて入ってきた声に、真奥も九流も、女性従業員も振り返る。

入ってきた人物の姿を見て真奥は声を上げそうになった。

「……え」

「どうぞ！ 呼んでいただいて結構よー」

真奥の呼び声を遮るようにして堂々と九流に相對しているのは、偶然でもこんな所に現れるはすのない人物。

惠美だった。

「な、なんなんですかあんたは」

「私？ 正義の味方」

「はあ？」

惠美の、寸分間違っていない自己紹介を、鼻で笑う九流。

「で、どうするの、呼ぶの、呼ばないの？」

「……」

動かない九流と女性従業員を、今度は惠美が鼻で笑い返す。

「全く、本当に呼ぶ度胸も無ければ探られて痛い腹だらけのくせに、よくもまあ警察とか言えたものね」

「……あのな、誰だか知らないが、おたくあんまりナメたこと言ってるよ、警察どころの騒ぎじゃなくなんぞ？ ああ？」

真奥に対していたときより更に低い声を出しはじめた九流。だが、その程度で揺らぐ恵美ではない。

「警察どころじゃない」というのがどんな蓮中を指して言っているのか知らないが、ただの日本人が来るだけなら、自衛隊を駐屯地丸々動員するくらいの戦力を持っていなければ、恵美と渡り合うこともできないだろう。

「……と、この会社、訪ねてきた客にいきなり脅しをかけてきました。ちゃんと操れた？」
ポケットから取り出したスリムフォンは、動画撮影機能がオンになっていた。

そして、スピーカーからは、

「はい、ばっちりです」

なんと千穂の声が流れてくるではないか。

「なっ……」

「で？ 警察呼ぶの、呼ばないの？」

恵美はにやりと笑って九流に尋ねる。

「呼ぶ場合は、その男がここに来てからの録音全部、警察に提出することになるけど」

「……」

「い、いつの間に……」

まさか恵美に尾けられているとは思ひもしなかった真奥が、この場の全員の気持ちを代弁していた。

しばらく恵美とデラックスライフ何某との睨み合いが続き、やがて、先に矛を収めたのは恵美だった。

「……さて、帰るわよ」

「は!?」

真奥は目を斜く。

「これ以上ここにいたって、こいつらがまともに取り合うわけないでしょ。向こうのお嬢み通り、出る所に行くわよ」

「お、おい恵美!」

さつさと会社を出ていってしまう恵美を、真奥は慌てて追いかける。

その背に、デラックスライフ何某達の、暗く湿った視線を感じたような気がした。

「す、鈴乃!?」

ビルの表に出ると、そこには鈴乃まで待ち構えていた。

恵美は知っていたようで、鈴乃に向けて、

「お願いね」

それだけ言う。

「うむ」

鈴乃は真風運と入れ替わりにビルに入っていってしまふ。

そして、一分もしないうちに戻ってきた。

「おっけー？」

「大丈夫だ」

何がなんだか分からない真奥は鈴乃を見る。

「……まあ、一言で言えばだ」

「あ？」

「エミリアも千穂殿も、貴様らの浅知恵などお見通しだったということだ」

「何？」

思わず恵美の顔を見ると、恵美は非常に気まずそうな顔で、腕を組んで横を向いてしまふ。

「最初は……その、何も考えずに怒っちゃったけど……」

「へ？」

「あとでよくよく考えたら、その……あのとき、あなたがどうして迷わず都庁に来たのかって、

その……」

「な、なんだよ、よく聞こえねえよ」

「た、だから！ 嫌だけど、本当に嫌だけど、最初からそのために使ってたとはとても思えないけど、結果的に助かったわけだから、ルシフェルに謝りに来ただけよ！ そしたら何か、変なことになってるから……」

「ああ、そういう……」

「お、恩を着せられればなしでも気分悪いのに、その上仇で返したなんてことになったら、勇者の名が壊るわ！ これを取り返したら、その四万円を上回る経済効果になるんだから、今度こそそれでチャラよ！ いいわね？」

「け、経済効果ってほど大したことは思えねえが……ま、助けてくれるつつんなら、恩に着る。すまん」

「わ、分かれば結構」

「あ、そうだ、おせっかいついでに一つ頼まれてくれ」

「おせっかいじゃない！ 借りを返すだけ！ で、何？」

顔を真っ赤にする恵美に、真奥は心の底から、顔を下げた。

「全部丸く収まったら……高屋にだけは黙っておいてくれ、鈴乃も頼む」 金の話になるとあいつマジ怖いから！

偽りなき本音の懇願。とても悪魔の王が出してくる要求とは思えない。

それを聞いて、恵美も鈴乃も、心算呆れ果てた様子でため息をついたのだった。

※

「あ、お帰りなさい……真奥さん、大丈夫でしたか？」

アパートに戻ると、パソコンの前にいたのは千穂だった。

「あ、ああ、うんでも、ちーちゃんどうして」

「それよりこれ、見てください」

「え？」

千穂が何やらパソコンを操作すると、

『消火器の設置基準は、ご存知ですか……』

「こ、この声？」

パソコンから流れてくるのは、あの忌々しい九流の声ではないか。

それだけではなく、あの会社のガラスドア越しに、明らかに真奥と九流の顔が分かる鮮明な画像まで付いているではないか。

「うん、綺麗に録れてるじゃない」

「恵美……お前これ……」

「その、自宅も警備できない自宅警備員に、大体の話は聞いたわ」

「……」

漆原は、部屋の隅で隠辱に耐えるかのようにじっとしている。

「時間無いんでしょ？　ちよつと強硬な手段だけど、必要な資料を揃える必要があったから」

「でも、これ映像までどうやって」

「IT技術の進歩に感謝しなさい。私のスリフォのスカイフォンアプリを使って、送信した映像と音声をこのパソコンで記録したのよ」

「スカイフォンで……漆原がパソコンに入れたる電話機能か？」

「そ、パソコンが古いから少し不安だったけど、さすが毎日張りついてるだけあって、いい整備してるじゃない」

スカイフォンとは、インターネット回線を利用した電話のようなもので、昨今の先端情報端末スリムフォン、略してスリフォの中には、スカイフォンをアプリケーションとして搭載しているものもある。

使用環境にもよるが、カメラ機能さえあれば、テレビ電話のようなこともできる。

「哀められてる気がしないよ」

自宅警備ができていない自宅警備員が不貞腐れると、

「あら、珍しく褒めてあげてたのに」

恵美は片眉を上げて、千穂の肩越しにパソコン画面を見る。

「それに、こんなのもありました」

千穂がパソコンを操作して、真奥には全く意味の分からないアイコンをクリックする。

「漆原さんがきちんと片付けしない人で助かりました。オートログ機能がオンになってたんで、昨日のアパートの前の映像、残ってます」

「だから褒められてる気がしないっての！」

「いや、今のは褒めていないだろう」

真奥と同じくパソコンが分からない鈴乃は、部屋の真ん中に座ってそう呟く。

「アパート前の画像……これ、そのカメラの？」

真奥が指差したのは、漆原が以前勝手に買って勝手に窓に設置した、外を見張るためだけの役に立たないウェブカメラだ。

モノクロの荒い画面だが、確かにその映像は魔王城の窓から見下ろせる外の道だ。

業務用のパンのようなものが停められており、助手席からスーツの男が降りてくる。

「あ！ 九流じやねえか！」

車を降りて、トランクから見覚えのある羽毛布団やら浄水器らしき箱を降ろすその姿は、間違いない返品担当のはずの九流だった。

「要するに、初めから押し売りする気で来たのよ。買い取りだけとか言ってるね。来訪目的を偽った戸別訪問の商取り引きは、規制の対象よ」

「そ、そうなのか？」

「勧誘なら勧誘、販売なら販売、買い取りなら買い取りって明示する義務があるの。この場合、買い取り以外の商取り引きを事前に明示していないのに、初めから売る気満々で来てることになるいい証拠よ……車のナンバーが映ってればもっと良かったんだけどね。ま、これだけハッキリ顔が映ってれば大丈夫でしょ」

「で、でもなんでお前、そんなこと知ってるんだよ」

恵美は、常識を語る澄ました顔で言った。

「電話での商売は、あれで色々規制が厳しいのよ。うちは受信専門で販売や勧誘するわけじゃないけど、そういうことは一通り研修受けてるから」

恵美が真真と違い、日本の情報通信技術の知識に長けているのは、彼女の日本での職業が、携帯電話会社ドコモのテレフォンアポインターであることに拠るところが大きい。

「日本はいいな。個人でそこまで明確な証拠を残すことができるとは。西大陸でも地方司祭や商会の汚職などの証拠を、そのように残せればどれだけ楽か……」

真真と恵美の会話を聞いてしみじみ言う鈴乃だが、その言葉に反応したのは漆原だった。

「あれ、でも澄佐、お前さつき出る所に出るとか言ってたけど、確か盗撮した映像や写真は、

証拠にならないんじゃないやなかったわけ？ 逆にそれでこっちが怒られたりとかしないわけ？」

「それは裁判だと証拠として扱われないってだけのことです」

千穂がパソコンの画面を見ながら答える。

「それに、これは隠し撮りですけど、自衛のための撮影で、不法行為やプライバシー侵害が目的じゃないから盗撮には当たりません。それにこの会社が本当に良くない商売をしてるなら、

『証拠』じゃなくて証拠で『捜査資料』として活用されることもあります」

「さすがは警官のお父さんがいるだけあるわね」

女子高生には不似合いな知識に、恵美は感嘆の声を漏らす。

「た、大したことじゃないです……あと……前々から気になってたんですけど」

千穂は照れながら、漆原を振り向いた。

「漆原さんで、何歳なんですか？」

「は？」

「あの、悪魔とか堕天使とかそういうことじゃなくて、日本でってことですけど……」

「ああ……何歳にしたんだっけ？」

漆原は、魔王城の代表者を見上げる。

漆原半蔵、という名は、彼が笹塚の魔王城に住まうようになってから真実が考えて与えた名であつた。

「お前がキつぱいから、確か戸籍上は十八にした気がする」

真奥も漆原も、もちろん菅屋も、日本でまっとうに生活するために、戸籍を作り、住民登録をしている。

日本で生活することが決まってから催魔魔術で作ったものだが、戸籍が無ければ日本では、生活の基盤を作ることすらできないのだ。

「実際子供よね」

「子供だな。千穂殿の方が何倍も大人だ」

恵美と鈴乃の突っ込みに漆原は顔を曇めるが、千穂は顔を明るくした。

「じゃ、漆原さん未成年じゃないですか！」

笑顔で手を打つ千穂に、恵美が何かに気づいて顔紅した。

「そっか、クリーニング・オフね？」

「はい！」

「なんだ？ クリーニング、何？」

首を傾げる真奥に、恵美が解説する。

「クリーニング・オフ。簡単に言うと一度行った売買契約や申し込みなんかを、期間限定で無条件に解除できる制度よ。特に訪問販売なんかでは、意思がはっきりしないうちに売買契約を結ばされることが多いから、消費者の救済措置みたいなものね。その中でも未成年者の契約によ

るクーリング・オフは最強よ。期間内に保護者が「同意していない！」って言えば、どんな契約でも一発解除だもの。実は携帯電話の新規契約案件の中で、かなり高い割合でこれが原因で契約放棄になることがあるんだけど……」

恵美曰く、携帯電話が欲しい高校生などが、時に親の承諾を得たと偽って購入申し込みをすることがあるのだそうだ。

「真奥さん、履歴書の下の方とかで見たことありませんか？ 未成年は保護者の同意署名が必要、みたいな」

「ああ、そういえばあったような……」

最後に履歴書を書いたのはもう随分前のことだが、確かに何も書かなかった欄に、そんなものがあつた気がする。

「アルバイトは立派な労働契約ですからね。この場合とはちよつと違うけど、とにかく未成年が自分が処分を許された財産以上の契約行為をするのは、常に保護者の同意がいるのよ」

「でも、俺は別に漆原の保護者じゃないぞ？ 戸籍も別だし、それで適用すんのか？」

「僕は真奥を親に持った覚えはないよ」

「俺だってお前みたいなのが欲しくねえよ」

不毛なやり取りをする二人。

「この駄天使は、あなたが働いて養つてるんでしょ？ なら、あなたが保護者相当の法定代理

人として認められるわ」

「ねえエミリア、今発音おかしくなかった？」

漆原の抗議を恵美は無視する。

「今回の全部の代金が四万五千円？　まさか貧乏なあなた達がルシフェルにそれだけお小遣いをあげてるとも思えないし、明らかにルシフェルが独断で処分できる限度を超えてるから、クーリング・オフが適用されると思うわ」

先ほどまで怒りで真っ暗だった真奥の視界が、恵美の言葉で急に明るくなり始めた。

これで声屋に怒られなくて済むとなれば、千穂と恵美を女神と呼んでもいいかもしれない。

「じゃ、じゃあそもそも漆原が買った発信機もそのグリーンオンとやらで……」

「クーリング・オフ！　通販は基本ダメよ。カードは成人年齢のあなたの名前で引き落とされてるだろうし、通販はきちんと吟味してから購入を決めるでしょ？　完全未使用か不良品でもない限り、無条件返品は難しいわ」

「そ、そうか……」

少し落胆する真奥。

「でも、その機械がきちんと動いたから、私も遠佐さんも助かったんですね」
すると、千穂がパソコンデスクから立ち上がって、漆原の前に立つ。

「漆原さん、この前はごめんなさい。漆原さんのおかげで助かったのに、酷いこと言っちゃっ

て」

「……僕は別に……實際助けたの真奥だろ」

正面から顔を下げられた漆原は、なぜか決まり悪そうにそっぽを向く。

「でも、漆原さんの力が無さや真奥さんも来てくれなかったかもしれないんです。本当は遊佐さんと二人で、機械のお金を何割か出そうかって言ってたんですけど……」

「あ？ そ、そうなのか？」

千穂の言葉があまりに意外で、真奥も漆原も恵美を見ると、恵美は不機嫌そうにその視線を受け止めた。

「ケチなアルシエルが、何も言っでこなかったでしょ。きつとお金を出すって言っても素直には受け取らなかつたでしょうし、それに……」

先ほどと違い、恵美は毅然として漆原を見た。

「結果的には助けられたことは事実だけど、ルシフェルも、最初からそのために私の靴に発信機を付けたわけじゃない。だから私はその分は帳消しにさせてもらったわ。この前ルシフェルを懲らしめたことで手打ち。その代わり、千穂ちゃんを巻き込んだ件はこっちにも責任があるから、私もあなた達の損失を取り戻すために協力は惜しまない……千穂ちゃんも懲返しでそれに協力する。それでいいでしょ」

何かとごちやごちやと理屈をつけているが、恵美も千穂も真奥と漆原の力になってくれる。

それで、今は十分だった。

「俺達が色々有利なことは分かった。で、具体的に出るトコってどこだ？ 警察か？」

真奥は話題を変えることで、二人の意思を了承したことを示した。

その真奥の問いに、忠実も千穂も揃って首を横に振る。

「契約単体で見ると、不法行為が行われてるわけじゃない。警察を介しても、向こうがよほど悪質な業者じゃない限り、アルシエルが帰ってくるまでに解決するのは不可能よ」

「じゃあどうすんだよ」

「ここです」

千穂がパソコンに戻ってあるホームページを検索して表示する。

そこには、真奥の見慣れない組織の名が表示されていた。

「東京都消費生活総合センター？」

※

新宿区の飯田橋にある東京都消費生活総合センターは、土曜日も営業している独立行政法人の東京本部のような施設だ。

真奥がドラッグスライフ何某社の件で相談に赴くと、即座に消費生活相談員の資格を有する

担当者がつき、色々と説明を行ってくれた。

田村と名乗った温厚そうな男性の相談員曰く、デラックスライフ何某社に関する相談は既に何件も寄せられていたが、ここまで明確な資料を即時持参したのは真奥達が初めてだということだった。

「それじゃ、早速その会社に関わり合わせてみましょう。もう心配はいりません」

大変心強い言葉と共に、田村相談員は真奥の目の前で電話を手に取り、複数の相手に電話をかける。そして……。

「危なかったですね、逃げられる直前でした」

「え？」

「真奥さんの案件の契約内容なら、普通にクーリング・オフで、契約を解除するだけで良かったのですが、念の為に渋谷区の休日担当相談員を提携している司法書士と一緒に現地に向かわせたんです。そうしたら事務所を畳んで逃げようとしてました。引っ越し業者のトラックが来てたみたいです」

「じ、事務所を畳んでって……」

予想外の言葉に田村はなんでもないように言う。

「常套手段ですよ。パソコンや書類など記録だけとにかく最初に持ち出して、机やロッカーなんかはリサイクル業者に処分させてドロンです。親居ビルのワンフロアくらい、休載を整え

るだけなら、半日で事務所作ること、撤去することも簡単ですから。きつと真奥さんの案件以外に、相当色々やっていたんでしようね」

そう言つてのけるが、真奥にはとても想像がつかない。

デラックスライフ何某社の内装は、真奥の目には立派な事務所に見えた。

魔力を持たない日本人が事務所の設置や撤去を短時間で行うには、相当人手がいると予想できるが、そんな商売をする会社にそれだけの人間が関わっているというのが信じられないのだ。「要請業者」というには少々手際が悪いので、背後に暴力団がいるようなこともないでしょう。いたとしても、こんなお粗末な末端は切り捨てられるでしょうね。真奥さん……というが、漆原さんの契約書類も見つかったそうです。カードで決済したとのことでしたが、こんな業者ですから決済端末は持たず、書類控えたったようです。また銀行に提出されていなかったそうですから、そもそも引き落とされることはありません、良かったですね」

恵美や千穂が女神なら、この瞬間の真奥には、田村が日本に降り立った救いの神に見えた。「でも、何か変なこと言つたな。逃げようとしたけど、会社のドアも窓も開かなかったらしいんですよ。相談員が現場に駆け付けたときには、引越業者がドアのガラスを叩き割ろうとしていたらしいです」

「ドアが、開かなかった？」

そう言えば、真奥があのビルから出たときに、鈴乃が入れ替わりで中に入つていった。恵美

と示し合わせて何かしたようだが、もしかしたら逃亡されるのを防ぐために、封印術でも施したのかもしれない。

「この会社は事業停止の行政処分が下るでしょう……まあ、適当なところで倒産させて、また懲りずにどこかでやるのでしょうが……」

田村は厳しい目で、真奥をひたと見る。

「今回は真奥さんの被害は取り返せましたし、この業者が悪質性があつたことは事実です。でも、最近の振り込め詐欺の事件を見ても分かるように、被害者側に油断があるうちはこういう手合いはいずれまた現れます。今までこの業者に關する相談はお年寄りがとても多かったですが、真奥さんはまだ若い。次も無事とは限りませんから、今後は気をつけてくださいね」

今度ばかりは、本当の年齢が三百を超える真奥も、若い、という言葉に反感は覚えなかった。恵美や鈴乃のような聖なる力を持ったエンテ・イスラ人や、千穂やアルバイト先の上司、木崎のような真つ当な人格の人間ばかりと触れ合ってきた真奥にとって、これほど悪意と欺瞞に満ちた人間が日本にいる、ということが驚きだったのだ。

まだまだ、魔王たる自分にも知らないことが沢山ある。

「心します。本当にありがとうございます」

真奥は頭を下げて礼を述べた。

「ところで……」

そして、消費者センターに来てからずっと不安だったことを口にする。

「この、解決料というか相談料みたいなので、発生するんですか？」

田村は微笑んで、首を横に振った。

「弁護士や司法書士を紹介した場合、案件によっては紹介先でお金がかかることはありますが、今回は相手が勝手に動いてスピード解決してしまいましたから大丈夫ですよ。ここは税金で動いていますから。また何かありましたら、私が真奥さんの担当に登録されますので、抱え込まずにいつでもお気軽にご相談ください」

日頃は住民税の引き落としで鬱々とした気分になる真奥だが、このとき初めて、きちんと税金を納めていて良かったと心から思ったのだった。

潮

「あの田村って相談員の人を、将来魔王軍に迎えたい」

「バカじゃないの」

すっかり片付いた魔王城の中。

真奥の言葉に惠美が辛辣な一言を吐く。

真奥が帰宅してすぐに、渋谷区の相談員に付き添われた九流が、羽毛布団と消火器と浄水器

を引き取りにやっってきた。

一応部屋に入れる前に、先ほどの田村相談員に連絡を取ってみたところ、

「大丈夫です。事前に確認するのはいい心がけです。その用心深さを忘れないでください」と褒められた。

九流は、昼間あれだけ攻撃的なやり取りをしたくせに、相談員の前ではまるでそのことなど無かったかのように愛想がいいのが逆に不気味ではあった。

書類も真奥通に確認の末破棄されて、新聞も強引な勧誘を抗議したところ事業所長という人物が謝罪に訪れ、ようやく魔王城未曾有の危機と、真奥と漆原が戸屋に殺される危機は去ったことになる。

「本当に助かった！ 恵美、ちーちゃん、鈴乃、礼を言う！ おい、漆原！」

「ああ、うん、その、助かったうわっ！」

「ちゃんと頭下げろバカ！」

適当に済ませようとする漆原の頭を押さえて下げさせる真奥。

「そ、そこまでしなくても……でも、役に立てて良かったです」

千穂は慌てつつも笑顔で頷いた。

「ま、フルーツだけはどうしようもないけど、それは勉強料だと思っしかないわね」

「ああ、全くだ」

フルーツは総額が千円程度だったので、勉強料として戒めのためにも残すことに決めた真奥。

「食うか？」

「いらないわよ、おいしそうじゃないし」

「わ、私もいいです」

二人に勧めてみるが、すげなく断られる。

「だから言つたろう。値段と品質が合っていないと。怒られなくてはならぬ。アルシエルが帰ってくる前に食べきってしまったほうがいいぞ」

鈴乃のアドバイスに従い、仕方なく、銘柄不明の梨の皮を剥いて齧る真奥。

「にしても、なんでこんなことすんだろうなあ」

鈴乃の言う通り、あまりみずみずしくない梨を頬張りながらふと呟く真奥。

「何よ、悪魔の親王のくせに、人間の悪事がそんなに珍しい？」

「悪魔はこんなジメジメしたことしねえよ。そもそも商売の概念が一般的じゃないし、悪魔の悪事はもつと分かり易くて直観的だ。あんな……」

真奥は九流の顔を思い浮かべる。

「同じ人間の首を真綿で締めながら金を取って、平然と笑つてるような奴がいるなんてな」

「人間は必ずしも善ではない。聖職者をやっていけば、嫌でも分かることだ」

鈴乃が言う。

「それでも、我らは立場上、命を平等に扱わなければならない。あの九流という男が、もしエ
ンテ・イスラを侵攻した悪魔に殺されたら……九流は、救われるべき哀れな被害者、というこ
とになる。やりきれん」

そう呟いてから、何かに気づいてはつと顔を上げた。

「だ、だからといって、貴様らに理や正義があると認めたわけではないからな！　勘違いする
なよ！」

「わあつてるよ」

真奥は苦笑する。

「最初はみんな子供で赤ちゃんなのに……どこで間違っちゃうんでしようね……」

千穂が寂しげに言った。

「……それは、わかんねえ。でも、間違えない奴だって沢山いる。あの会社を一時でまっさら
にする人間がいれば、田村さんやさっきの渋谷の担当さんみたいに、人のために暗い世界を見
続ける人もいる。不思議だな、人間の世界ってのは。魔界の方が、なんばか単純だった」

「うん、それは同意する」

漆原が真奥の言葉に、珍しく真顔で頷いた。

その夜の食事は、一応危機を脱した祝いと称して、鈴乃の払いで、近所の肉屋が充る評判の
トンカツがついた。

日曜は真奥は朝からバイトに出勤し、漆原には堅くドアを施錠し、露骨でいいから居留守
を使えと厳命する。

同じく出勤してきた千穂に改めて礼を言い、夕方六時、また手料理を持ってきてくれたとい
う千穂と共にシフトを上がり魔王城に戻ると、

「お！ 芦屋、帰ってたのか！」

「芦屋さん！ お帰りなさい！」

「芦屋が既に帰宅していたのだ。」

「さ、佐々木さん？」

千穂がいることが予想外だったらしい芦屋は狼狽えるが、その肩を鈴乃が叩いた。

「貴様が四万円のために働きに出ていることはもう千穂殿にはバレている。諦めろ」

「な、何？ そうなのか？」

「芦屋さん、すいませんでした。私を助けるためのお金を……」

「あ、いえ、ですからそれは……」

「大丈夫です、真奥さんからきちんと聞きましたから。だからせめて、芦屋さんと漆原さんに
も、お礼だけはさせてください」

千穂の持ってきた弁当箱の中には、なんと鰻の蒲焼が三本、入っているではないか。まさか千穂が川から鰻を取ってくるわけがないので、当然どこかで購入したのだろう。決して安くはないものと見受けられたが、

「これくらいはさせてもらわないと！」

と、千穂は頑として譲らなかつた。

根負けしてありがたくその鰻をいただく悪魔三人。

「そうだ、結局芦屋さん、なんのお仕事に行ってたんですか？」

千穂のその問いに、芦屋は少しだけ暗い表情を作る。

「……恥ずかしながら……」

芦屋はうつむきがちになって、告白を始めた。

「ある進学塾の……」

「し、進学塾？」

予想外の単語に、真奥も漆原も鈴乃も驚いた。

「勉強合宿に、付き添っておいりました」

「芦屋さんが、ですか？」

「はい、講師として……」

「講師っ!？」

今度こそ、全員が度肝を抜かれる。

「といつても、黒板の前で、勉強を教えたわけではありません。英語の聴解と発音を訓練する、オーラルコミニケーションスタッフとしてですが……」

「あ、ああ、そういう……」

真奥はなんとか納得して頷く。

恵美はどうだか知らないが、真奥と芦屋は日本に来て数日で魔力に頼らない日本語をマスターした。

その後も、語学の知識は正社員登用に役立つと考え一時真剣に勉強した時期があったが、芦屋はそれを教育現場で求められるレベルにまで高めたらしい。

「悪魔大元帥の身でありながら、自らの力を、敵対する人間の育成などに使うことは耐え難いことでしたか……背に腹は代えられず……」

「ま、まあ言い方を変えればそういうことになるか？」

鈴乃は首を傾げてしまっている。

「おい芦屋」

「は……」

「いいじゃねえか、別に」

「……は？」

芦屋は、真奥の予想外の言葉に顔を上げる。

「お前が指導したら、きっとそのガキ共は間違った方向には行かない気がする。またその仕事行く機会があったら、行つてこいよ」

「は？ はあ……まあ、滅多にないとは思いますが……」

芦屋はきよとんとしなから、惨^{あはれ}らの漆原^{うしはら}にこつそり尋^{たず}ねる。

「ルシフェル。魔王様は何かあったのか？」

「さあ？ いつもの気まぐれじゃないの？」

もちろん漆原は取り合わない。目も上げずに、無^むに没頭する。

今回の騒動^{さわどう}の元凶^{もとこう}のくせに、このふてぶてしさはいつも通りの漆原だが、ふとこ飯粒^{いひつぶ}を顔に付けたまま顔を上げて、芦屋を見た。

「あ、でも」

「ん？」

「芦屋、お前、いつも物凄^{ものすご}い敵と戦つてたんだな」

「は？」

訳が分からず首を傾げる芦屋。

そんな様子を見ながら、

「な、ちーちゃん。俺達は変わらず、まっとうな商売に精を出そうな！」

「はいっ！」

真奥の言葉に、千穂は元気いっぱいの笑顔で頷き、

「魔王のくせに何を偉そうに……」

という鈴乃の呟きは、例によって誰の耳に届くこともなく虚空に消え、魔と聖と人の夕食は、穏やかに続いたのだった。

※

日曜出勤から水稲町のマンションに帰宅した惠美は、時計を見ながら、そろそろアルシエルが魔王城に戻る頃だろうかと思像する。

こうして考えると、今ヴィラ・ローザ地区にいる者の中で、電話番号を知っているのが魔王だけ、というのは非常に面倒くさい。

もし鈴乃が長くこちらにいるつもりなら、近いうちに携帯電話を買うよう促してみようかと、この数日忘れていた魔王討伐の観点を無理やり思い出して考えたとき、

「あら？」

マンションのインターフォンが鳴った。

「はい？」

何気なく取ると、映像つきインターフォンが映し出したのはマンションのロビーだ。穏やかな笑顔を浮かべた西洋人の男性が立っていた。

そして手には、なぜか革で表装された書籍。

恵美は嫌な予感がした。

そしてその予感に違わず、画面の中の西洋人は息を吸った。

「アナタハカミワシンジマスカー？」

「間に合ってます！」

恵美は絶叫して、インターフォンの受話器を叩きつけた。

全く、魔王城に押し売りが訪れたり、聖剣の勇者の下に平然と宗教勧誘が訪れたり、この国は本当に、予測がつかない。

恵美は憤怒として、

「シャワー浴びよ」

会社勤めの疲れとイライラを洗い流すべく、バスルームへと向かったのだった。

魔王、捨て猫を拾う



その日は盛夏の中、気まぐれのような曇り空が東京を覆い、熱せられた東京の暑気を冷ましていた。

窓を薄めに関ければ心地よい風が飛び込んできて、室内を涼感に染めてゆく。

実は窓など開けなくても壁に開いた大穴を塞ぐシートの隙間から絶え間なく外気が侵入しているのだが、それは敢えて見ない。

そんな静寂の夜。

悪魔大元帥アルシエルこと芦屋四郎の耳は、主の帰還を敏感に察知した。

主の通勤用自転車であるデュラハン式号のブレーキをかける音。その自転車にカバーをかける音。共用階段で足を滑らせぬよう慎重に上がってくる音。

芦屋は居住まいを正して帰宅した主を迎え入れるべく、歩いて二歩の玄関へ向かう。

そしてドアが開かれ、そこには……。

「……魔王様」

そこには異世界エンテ・イストラを征服し悪魔の王道楽土を築くために魔界の軍を率いた彼の主、魔王サタンこと真奥貞夫の姿があった。

どこからどう見ても二十歳そこそこの人間の青年で、微塵も魔王の威厳など感じない。

だがその身は、ひとたび魔力が戻れば生きとし生ける者を潰え上がらせずにはおれない、恐怖の魔王なのだ。

そしてその魔王は、着古したユニシロのパーカーの懐に、有り得ない。モノ。を抱え込んでいた。

「……にー」

ソレは弱々しい声で、そう囁いた。

真奥がパーカーの前を開いて見せたそれは、銀色の毛並みをした、子猫だった。

「……」

「……」

主と従者はしばし、玄関先で見つめ合う。

なぜか主の方が従者の顔を窺うような様子で、恐る恐る口を開いた。

「こ、ゴミ捨て場で震えてたから」

「元いた所に返してきてください」

真奥の一言を、声屋は言下に切って捨てた。

真奥は暗い夜を振り返ってから、柳眉を逆立てて抗議した。

「お前悪魔だ！」

「悪魔ですが、何か」

「は、は、はーくしょんー」

もう一人の同居人、堕天使ルシフェルこと漆原半蔵の大きなくしゃみで、真奥が抱える子猫

はびくりと震えた。

※

翌朝、魔王城の隣室。ヴィラ・ローザ住塚二〇二号室に起居するエンテ・イスラの大法神教会訂教審議官クレストイア・ベルこと鎌月鈴乃は、普段は聞くことのない音を耳にして、違和感と共に目を開けた。

「……………なんだ？」

動物の鳴き声、恐らく猫の声が、ごく近い距離から聞こえてくるのだ。

ヴィラ・ローザ住塚は、昨今では珍しくブロック塀に囲まれた裏庭スペースを持つアパートであり、野良猫の通り道になっている。

だが、鈴乃がここで生活するようになってから今まで、猫の喧嘩がアパートのすぐそばで起こったことはないし、庭の雑草が猫と相性が悪いものなのか野良猫の糞尿で踏みされるようなこともない。

「……………」

鈴乃が布団から出て普段着の浴衣に着替え、布団を上げて朝食の準備をする頃になっても猫の声はひっきりなしに聞こえる。

窓から顔を出してみても、目につく範囲に猫の姿は見当たらない。

どこか死角になっている所で、野良猫が時期外れの子猫でも産んでしまったのだろうか。

「ベル？ 朝からごめん、私だけど」

玄関のドアがノックされて、馴染んだ声が聞こえた。

「エミリアか？ どうした」

鈴乃は前掛けで濡れた手を拭いながら表に出る。

「ごめんね、朝早くに。届け物があつて」

「届け物？」

そこには紙袋を抱えたエンテ・イスラの勇者、エミリア・ユステイーナこと遊佐恵美が立っていた。

「エメから、少しだけ新しい聖法気ドリンクの追加が送られてきたから、ちよつとおすそ分けしようと思つて」

「これはかたじけない」

法術を操りこれまで多くのトラブルを乗り切ってきた恵美と鈴乃だが、日本では法術のエネルギー源である聖法気（せいぽうき）の自然回復ができない。

恵美の旅の仲間であるエメラダ・エトワールが時折送ってくる聖法気補充ドリンク「ホー

リービタン^{リビタン}」があることで、二人は十全の活動ができていたのだ。

「これから出勤か？」

「ううん……」

恵美は憂鬱な顔で、隣部屋のドアを見る。

「今日は、アラス・ラムスが『ばば』と遊ぶ約束の日なの」

「……」

その言葉に鈴乃は言葉を失うが、同時に、肝心の人物が見当たらないことに気づく。

「その、アラス・ラムスは」

「……楽しみにして過ぎて、朝早起きしちゃって、結局今眠っちゃってるわ」

そう言いながら恵美は自分の頭を指差す。

勇者エミリアの聖剣には、エンテ・イスラの天界にあるという世界組成の宝珠^{マーズ}セフィロトの

中の一つが欠片^{カキ}となって赤子の姿に具現化した存在、アラス・ラムスが融合しているのだ。

アラス・ラムスはどういうわけか勇者と魔王を「まま」と「ばば」だと思い込んでいる。

恵美と融合して一定距離以上離れられなくなったアラス・ラムスが「ばば」を恋しがると、

仕方なく恵美は時折「娘」のために魔王城を訪れざるを得ないのである。

何せ融合していれば、頭の中でぐすりだしてしまい、恵美は自分にだけ聞こえる泣き声に延々悩まされるのである。

融合状態は確かに便利ではあるが、極力融合を解除している方が子育ては楽なのではないか
と思いはじめている恵美である。

鈴乃は、離婚調停後のシングルマザーのようなことを魔王相手にしなければならぬ恵美に
同情したが、

「はーつくしーい!!」

「!?」

突然大きなくしゃみが聞こえてきて、鈴乃と恵美は身を凍ませた。

「……今の、ルシフェルよね」

朝のさわやかな空気を一掃するくしゃみに恵美は大いに顔を曇らせた。

「随分下駄バタしてるけど、何かあったの？」

件のアラス・ラムスを巡る騒動で、ヴィラ・ローザ筆塚の二〇一号室の壁には大穴が空いて
しまっており、穴を塞ぐシート越しにもかなり音が外に漏れているのだが、今日は日頃に輪を
かけて騒がしい。

「分らん。早朝からずっとだ。昨夜の涼しさで風邪でも引いたのではないかと」

勇者と聖職者の魔王城の様子を評しての会話とも思えないが、次に聞こえてきた音に、今度
こそ二人は目を見開いた。

「にー!!」

「え？」

それは、鈴乃が目覚めたときからずっと聞こえていた猫の声だった。二人が状況を摸めないでいる間に、魔王城の中の騒ぎは加速の様相を呈しているようだ。

「あー 逃げた！ 漆原！ 捕まえろ！」

「無理！ お、おいこっち近づけんなよ！ は、は、はくしよいつ！」

「こ、この、小動物の分際で逆らいおつて！ 大人しくしろっ！」

と、隣の魔王と悪魔大元帥と墮天使が大騒ぎする声がいよいよダダ漏れになっている。

「にー、にー、にー!!」

「い、一体なんの騒ぎ？」

どのような理由で魔王城に猫がいるのか分からないが、漏れ聞こえる声を聞く限り、真裏達は謎の猫に振り回されているらしい。

やがて、

「ふ、ふーう！ よ、ようやく捕まえたぞー！ 観念しやがれ」

「て、手こずらせおつてからに……」

「なんでもいいから早くそいつどうにかしてよー は、は、はくしよいつ!!」

と、剣呑な声が聞こえはじめる。

「ま、まさかっ！」

悪魔達の声色に、惠美と鈴乃はある想像を過らせて顔を見合わせる。

鈴乃の故郷、エンテ・イスラ全土を支配しかけたほどの魔王軍とは思えないほど、今の真奥達は経済的に困窮している。

それでもなんとかこの日本のルールに従って労働で金銭を稼ぎ開口を凌いでいたようだが、それでも彼らの暮らしぶりは決して余裕があるものではなかった。

よもや、遂に真奥達は禁じ手に出たのではないだろうか。

すなわち、野生動物を捕獲して食糧とすることで飢えを凌ぐ。ある意味とても悪魔のイメージに近い映像が鈴乃の頭に湧き上がる。

魔王城の経済状況でベツトを飼うなどという暴挙はまず有り得ないし、大体昨日までそんな気配は微塵も感じられなかった。

惠美と鈴乃の脳裏に、悪魔に戻った真奥が子猫を頭からばりばり齧るスプラッタな映像が去来し、次の瞬間二人は行動を始めていた。

「魔王っ!!」

隣の二〇一号室の扉の前で大音声を張り上げると共に、簪を抜き放って法術・武身缺光を展開する。

その瞬間、鈴乃のガラスの簪は、ヴァイラ・ローザ彼塚など塵台骨の基礎から粉々にできそこなほどの巨大な大槌に変化する。

「す、鈴乃っ？」

鈴乃の呼び声に、真奥が気づいた気配。

「この扉を開ける魔王！ 貴様らの行い、断じて許すわけにはいかん！ 野良猫をかどわして食糧にするなど、それでも魔王か!!」

「な、なんの話！ て、てか声が大き……」

「ここを開けろ！ 猫を解放しろ！」

鈴乃は真奥の言い訳を聞かずドアノブを握るが、当たり前のように鍵がかかっている。

「ベル！ 部屋、上がるわよ！」

対する恵美は、鈴乃の部屋に上り込むと、開いている窓から身を乗り出した。

なんと外から窓伝いに魔王城に乗り込むようにしているのだ。

道行く人に見られたら、昨今の世情では通報されても文句は言えない姿である。

「天誅!!」

物騒な掛け声を上げて、見事、外の窓から魔王城へと飛び込む恵美。

「わっ!? え、恵美!? お前どっから入ってくるんだよ!?」

目の前には、子猫を抱えている真奥・真夫の姿。

「うるさい！ 野良猫を捕まえて食べようなんて、それでも魔王なの!? 情けない！」

恵美は正義の剣を振り上げて、真奥達の暴挙を止めるべく息を吸い、そして気づいた。

「お前らがフザけた勘違いをしてるのは分かった！　だが、やっと大人しくなったんだ！　ちょっと静かにしろ!!」

てつきり猫を三枚おろしにでもする準備が整えられているのかと思いきや。

惠美の目に映ったのは、スポイト片手に子猫の口をこじ開けようとしている真美と、床に零れた甘い匂いのする白い粉末を必死で掃除している声屋と、部屋の間で鼻の頭を真っ赤にしながら涙目になっている漆原の姿だった。

「……な……にを……」

状況が掴めない惠美の言葉に、

「見て分らんか!!」

白い粉末をぬれぞうきんで拭っている声屋が苛立たしげに叫ぶ。

「えーと、その」

惠美は聖剣を振り上げた姿で固まったまま、

「子猫にミルクをあげようとして、子猫が暴れて粉ミルクをひっくり返して逃げ回って、それを取り押さえて無理やり飲ませようとしているように……見える、わね」

惠美は目の前の光景を分析し、その推測は間違っていないだろうことを確信する。

「分かっているなら爆れー！　今の我々には、貴様に構っている余裕などないのだ!!」

「声屋、デカい声出すなよ。またパニックになんだろが……お、なんとか飲んだぞ」

真奥の手に抱かれた、銀色の毛並みの子猫が観念したようにスポイトをしやぶりはじめた。
「そうだよ、初めっから大人しく飲めば怖いことねえつてのによ！　ったく……」
真奥は悪戯をつきながらも、子猫が口の端からミルクを零さないように気をつけてスポイトをつまんでいる。

「よっしゃ、飲んだな、んじや戻れ！」

そう言うとき真奥は、子猫を部屋の隅にある大きな段ボールに戻す。

「そ、その子猫は、一体何？　本当に、あなた達の食糧じゃないの？」

「お前……俺達をなんだと思ってる」

「悪魔でしょ」

「悪魔だな」

「はーつくしよいよあー！」

悪魔の一人は、またびっくりするほど大きなくしゃみ。

「エミリアー！　エミリアどうした！　何があった！　おい！」

「……………」

玄関側では、外から鈴乃がドアを叩いて呼びかけてきていて、放っておくとドアをブチ破りかねない勢いだ。

「……………」朝から、ったくよお」

真奥は「ボヤきながら玄関を開けようとして、

「ま、魔王様まだそこは………っ!!」

声屋の警告もむなし、拭き取りきれしていない粉ミルクの上に思い切り足を乗せてしまったのだった。

真奥は、疑いの眼差しを害越す鈴乃を説得するためにも、昨晩の事情を説明する。

「昨日みたいな涼しい夜中に、こんなちっこいのが外にいたら死んじゃうかもしれないだろ。他に人もいなかったし、拾っちゃうのは人情ってもんだ。なあ、アラス・ラムス」

「みやーみやー」

真奥は、恵美の膝の上に座るアラス・ラムスに視線を合わせる。

恵美が聖剣を振るったせいでアラス・ラムスは目が覚めてしまったのだが、子猫の姿を見た途端、睡眼を妨害された不機嫌はどこかに吹っ飛んでしまったらしい。

「みやーみやー! にやー? みるのー」

恵美はアラス・ラムスが興味津々で猫を見たがるのを膝の上で押さえている。

手加減を知らない赤ん坊がこんな子猫に突撃したら怪我をさせてしまうかもしれないし、逆に反撃を食らって怪我をしてしまうかもしれないからだ。

「魔王が人情を誦らないでよ」

あの手この手で恵美の膝の上から疵に近寄ろうとするアラス・ラムスをいなしながら、恵美は露骨に顔を皺める。

「しかし……まあ、そうだな。仕方ないやもしれんな」

大抵を善に反して手早く髪を纏めた鈴乃は、段ボール箱の中を覗き込む。

古いタオルが敷き詰められている簡単な寝床の中で、銀色の毛玉が短い脚をちょこちょこ動かし、箱の中を覗きまわっている。

何が気になるのか、思い切り鼻を角に突っ込んでみたり、そうかと思えば突然何も無い空中を凝視してじっとしたり、全く予習のつかない動きをしているが、その一つ一つはたまたま可愛らしい。

「鈴乃、口開いてる」

「はっ」

つい見入ってしまった鈴乃は我に返って顔を上げた。

「ふん、聖戦者とも思えぬ間抜け面を晒しておつて。アラス・ラムスと同レベルか」

零した粉ミルタを片付け終えたらしい芭厘の嫌味を赤面しつつも無視して、鈴乃は殊更に低い声で威嚇するように真真に言った。

「貴様らがいたいけな小動物を無残にも食おうとしているのでないことだけは分かった」

「おい」

「ばば、みゃーみゃたべちゃめっ！」

アラス・ラムスの厳しい顔に、真奥はげんなりとして項垂れる。

「ほら、アラス・ラムスが妙な誤解すんだろ」

「……すまない。だがな」

鈴乃は一呼吸置くと、自分の部屋と変わらぬ間取りの魔王城の中を見回す。

「今後どうするつもりだ。ヴィラ・ローザ笹塚はベット不可の物件だろう」

「……それなんだよなあ」

鈴乃の指摘に、真奥は苦虫を噛み潰したような顔で頭を掻いた。

何を確認そう、昨夜、猫を元いた所に返すべきと主張した芦屋と真奥が一番採めたポイントがそこなのだ。

敷金礼金無し、管理費無し、新規設備費も事実上無料、大家は常に不在というフリーダムに過ぎるヴィラ・ローザ笹塚だが、賃貸の集合住宅らしく、居住に於ける契約約款の中には「ベット不可」の項目があるのだ。

通常「ベット不可」は物件のオーナーの裁量に拠るところが大きく、小鳥や虫などなら許されている場合もあるが、基本的に音や臭いなどで他の入居者の生活に支障をきたす生き物や、建物の現状を損なう可能性のある生き物はまず許されない。

そして猫に柱で爪を研ぐ癖があることは、巷間周知の事実である。

「でも、大家さん、今はどこにいるか分からないんでしょ？　しばらくの間だったら……」

恵美が勇者とは思えぬことをそそのかすが、真奥は苦い顔で、壁の穴に顔をしゃくする。

「あれのことで、ここんとこ何度か不動産屋に行ってるんだ」

「ああ……」

店子に貸した部屋が大きく破損したとなれば、確かに管理会社や大家がいつやってきておかしくはない。

そしてそういうこと以前に、今の魔王城の生活は大家の恩義によって成り立っているとろが大きく、それを裏切らない意味でも約款に背くわけにはいかない。

「それに、あっちの間題もあってな」

「あっちって？」

真奥の指差す先は、魔王城の押入れだ。

そこで恵美と鈴乃は、先ほどまでそこにいた漆原の姿が見えなくなっていることに気づく。

「そう、うちにはただでさえるさい無駄飯食らいがいるのだ。そいつが二重三重にうるさくなつてはかなわん」

吾屋が苦り切った顔をするのと同時に、

「……くしゅっ」

すると押入れの中から、押し殺したようなくしゃみが聞こえてきた。

「漆原が猫アレルギーだったらしくてよ」

「はあ？」

そういえばやたらとくしゃみをしていたような気がするが、まさかアレルギーだとは思わなかった。

「悪魔にもアレルギーがあるのか」

鈴乃が興味深そうな口調で尋ねる。

「お前、アレルギー分かるのか」

「ナメるな。疫学的に教会病院の研究が進んでいる。蜂によるアナフィラキシーショックはエント・イスラでもよく起こることだ」

とそこまで言って、

「つてことは、今後はルシフェルが何か不届きなことをやらかしたときには、猫を連れてくればいいのね」

「やめろよそういうの！」

恵美の残酷な発案に、漆原は精一杯抗議する。

「やめろつて、本当にしんどいらしいから」

猫を驚かさないように猫を押入れに近づけようとする恵美を、真央はやんわりと止めた。

「まあ、とにかくだ、そういうことでうちで飼うわけにはいかない。でも方が一見つかつても大家も鬼じやねえから、飼い主を探す間だけ預かつてゐて休なら許してくれるんじやねえかつて思つてな」

「姿の見えない大家の機械取るより、僕の体調のこと考えてくんないかなー げほげほ」
押入れからの抗議を、真奥も華麗に無視する。

「という訳で、お前、誰か飼つてくれそうな奴に心当たりねえ？」

「……あるわけないだろう」

いきなり振られて、鈴乃は渋い顔をする。

そして今度は、恵美に視線を投げる真奥。しかし恵美も眉根を寄せて首を傾げる。

「分かつてるとは思うけど、私もマンション住まいでベツトは飼えないわよ」

真奥達の住む笹塚から三駅離れた永福町のマンションに住んでいる。

「そりや分かつてるけどよ、お前だって〇しの端くれだろうが、戦場の仲間とか友達とか、誰かいねえか？」

〇し以前に勇者なのだが、とにかく恵美の表情は変わらなかった。

「期待はしない方がいいわよ」

「だよなー。……バイト行つたら、誰かに聞いてみるかー」

真奥がぶつぶつ呟くのを聞きながら恵美は嘆息する。

「でもこんなに綺麗な銀色の毛並み、そこそこ育ってるのに……ここまで来て捨てるなんて、酷いことするわね」

「ああ」

真奥は頷いて、言う。

「一匹ぼっちでガタガタ震えてたからよ、どうも他人事に思えなくてな」

「え？」

「あ、いや、なんでもない」

聞き返した恵美に、真奥はなぜか慌てたように首を振った。

そしてそれをこまかすように、鈴乃に向かって両手を合わせる。

「そういうことで、しばらくちつとばかり騒がしいけど、勘弁してくれ」

「騒がしいのは今に始まったことではあるまい」

「みゃーみゃるわるのー」

そのとき、いよいよ我慢ならなくなったらしいアラス・ラムスが足をばたつかせはじめる。

「おい、ちょっとくらい触らせてやれよ」

「はいはい。でもこれじゃ、今日はきつと一日この子猫に張りつきっぱなしでしょうね」

真奥と恵美は子猫に対して過激な行動に出ないよう注意深く見守りながら、アラス・ラムスを解放する。

そんな三人の様子を後ろから見ている菅屋と鈴乃は、

「……何も言うなよ」

「どこからどう見ても平和な家族だ」

「だから言うなと言っただろう」

悪魔と人間同士、詮ないことを言い合うしかなかった。

※

翌日。

「酷いことしますね、子猫を捨てるなんて」

真奥のアルバイト先であるマダロナルド轄々谷駅前店の後輩、女子高生の佐々木千穂は、自転車を押す真奥の隣で憤慨していた。

日本人の中でただ一人、真奥や恵美やエンテ・イスラの真実を知る千穂は、シフトを上げる
と真奥と一緒に魔王城に向かっていった。

純粹に子猫を見たかったのと、何か手伝えることはないか模索するためだ。

「俺もいきなりなこと焦ったけどな」

真奥は深くため息をつく。

「あんな状態で捨て置拾う俺もどうかしてるとは思うが、まあゴミ捨て場にいるよりやマシだと思つてさ」

「あはは……」

アパートに到着して、真奥は深いため息。

シートで無理やり塞いでいる穴を見上げた千穂は乾いた笑いを浮かべる。

階段を上がって魔土城の玄関を開け、

「おーう。帰っ……あれ？」

部屋の中を見ると、室内が静まり返っていることに気づき、真奥は首を傾げる。

「あれ？ 誰もいないですね」

真奥の肩越しに、千穂も静まり返った魔土城に気づく。

「……芦屋なら買物に出かけだよ」

「きやつ！」

誰もいないのに声が聞こえて、千穂が飛び上がる。もちろん押入れにいる漆原の声だ。

「買物？ じゃあ猫は」

「知らない。ベルとなんかはなじでだけど」

「う、漆原さん、風邪でも引いたんですか？」

酷い鼻声の漆原を心配する千穂。

と、丁度そこに、

「魔王様、あ、佐々木さんも」

件の芦屋が、スーパ―の袋を手に戻ってきた。

「芦屋さん、こんにちは」

「もしかして猫を見にいらしたのですか？」

芦屋の調いに千穂は鎮く。

「学校の友達とか欲しい子がいるかもしれませんが」

「そうでしたか。……魔王様、申し訳ありません、買い物に出る必要があつて、猫はベルに預けています」

「なんだ、そういうことか」

猫アレルギーの漆原は猫に近づきたがらないし、だからといって猫一匹残して芦屋が家を出たら、怪我をしたり部屋を傷つけたりすることがないとも願わない。

「じゃあ早いとこ引き取ろうぜ。毎日飯の場所借りてんだから、これ以上借り作りたくねえ」

「御意に」

芦屋は買い物袋を部屋に置いてから、鈴乃の二〇二号室のドアを叩く。

「ベル、私だ。猫を引き取りに来た」

「……？」

だが、待てど暮らせど返事が無い。

「どうした？」

「鈴乃さん、お昼寝しちゃったのかな」

「いえ、三十分程度しか経っていないのでそれはないと思いますが……ん？」

見ると、不用心なことに魔が聞いている。

鈴乃の身などどうでもいいが、猫が逃げ出したらどうすると言うのだ。

「べル、入るぞ。猫を……」

当屋は改めてノックをしてからドアを開ける。

と、

「……」

「にー、にー、にー、むにゅ」

そこには、

「……」

「にににに」

真剣な眼差しで猫のお腹や肉球をふにふにと触りながら、鼻息を荒くしている鈴乃の姿があった。

「す、鈴乃さん？」

「あっ」

猫を抱え上げて喉をあやそうとした瞬間千穂の声に我に返った鈴乃は、千穂と真奥と燕屋の存在に気づき、夕陽の加減とは無関係に顔を一気に紅潮させた。

「あ、そ、ち、ちがっ!! わ、私は……」

「にっ?」

置いて猫を箱に戻して、わざとらしく浴衣の裾を巻いてソツポを向こうとする鈴乃だが、
「鈴乃、浴衣の袖、毛だらけになってんぞ」

「ななななななな」

真奥が指差す鈴乃の袖は、明らかに猫のものである銀色の毛が相当量張りついていてた。

「ちちちちちちがうこ、ここここ、これはっ! そのっ!」

「お前、そんなに猫好きだっ……」

「確かに返したっ!!」

轟音と共にドアが閉じられ、真奥は箱入り猫を抱え、共用廊下に締め出されたのだった。

「わあ! かわいい!!」

段ボールの中で鼻をひくひくさせながら眠る銀色の子猫を見て、千穂は押し殺した声で歓声



を上げた。

「本当に銀色なんですわ、綺麗な毛並み」

真奥は千穂以外にも、バイト先であるマダロナルド幡ヶ谷駅前店の全スタッフに、猫の引き取り手がいないかどうかを相談した。

すぐに引き取り手が見つかるとは思っていなかった真奥だが、店長の木崎や後輩の千穂を含めて、誰もが引き取りには難色を示した。

幡ヶ谷店のクルーはその大半が一人暮らしの集合住宅住まいだったのだ。

「はあ……お父さんが猫アレルギーじゃなかったらなあ……」

ひとしきり千穂を眺めた千穂は残念そうに嘆息する。

千穂の家は一軒家で猫と相性の悪いベクトもないのだが、千穂の父である佐々木千一が凄原と同じく重度の猫アレルギーだと言うのだ。

「元の飼い主のことは分からないんですけど」

「分かったとしても、こんな小さな子猫捨てるような家に帰したくねえよ」

「ですよねえ……はあ、かわいいなあ」

終始頬が緩みっぱなしの千穂。

夕暮れの魔土城に差し込む陽の光で、銀色の子猫の毛並みが金色に揺らめいた。

「ん？」

そのとき、キツチンにいた芦屋がノックの音に気づく。

「アルシエル」

「どうした、霜好き」

鈴乃の声がして、芦屋は珍しくからかうようなことを言う。

「今日から貴様ら、食事はこっちで作るということだな」

外の鈴乃の押し殺したような返事。

「……エミリアとアラス・ラムスが来た」

「……待て、今開ける」

共用廊下から鈴乃の声が聞こえ、芦屋は扉を撃めながらも玄関の鍵を開ける。

悪魔なのに勇者と聖職者が尋ねてきて当たり前のように家に上げてしまうのも、既におなじみの光景となりつつあった。

「にやんにやー!!」

そこには、仕事帰りらしい出で立ちの恵美と、恵美に抱えられたアラス・ラムスがいた。

「もう仕事中でも、子猫のことが気になるらしくてずっとにやんにやん言いつばなしで……」

日頃と違い覇気のない言い訳のようなことを言って、恵美は魔王城に上がる。

「おう。アラス・ラムス、大人しくさせとけよ。今寝するところだから」

そんな、ある意味普通の、彼らの間では普通でない注意を飛ばす。

だが恵美も特に逆らいはせず、

「しー、ね？」

アラス・ラムスに静かにするよう言うと、聞き分け良く恵美の真似をして口の前で人差し指を立てて見せる。つられて中指も立っている。

「みやーみや、おねんねしてるんだって。静かに見ましょうね」

「あい！ しー、ね？」

とここまで分かっているかは疑問だが、とにかくアラス・ラムスに猫を見せてあげるために、千穂は恵美に場所を譲る。

「みやーみや、おねんね？」

アラス・ラムスは箱の中を覗き込んでから恵美を見上げて尋ねる。

「そうね。起こしちゃだめよ？」

アラス・ラムスに改めてしーを指示した恵美に、真奥は尋ねる。

「お前の職場の仲間で、誰か猫好きの女とかいそうか？」

「一応聞いてはみたけど、みんな大体アパート・マンション住まいで、飼いたくても飼えない人ばかりよ。まだ全員に聞いたわけじゃないけど」

恵美の勤め先は携帯電話会社ドコモのお客相談センターのテレアポである。

「そうか」

真奥はがっくり項垂れてから、魔王城の六畳一間に集まった面々を見渡す。

「はあ、やつば身内頼りは限界あるよなあ」

「……ちよっと、誰が身内よ」

真奥の言う「身内」に自分も含まれていると知って、恵美は思わず陰のこもった声を出す。

「いいじゃねえか細かいことは」

「細かいことって……」

恵美は抗議を続けようとするが、アラス・ラムスと寝ている子猫のことを考えて、自制心を働かせて怒りを腹に収める。

「……で、どうするの。引き取り手がいなければ、このまま飼うの？」

「そういう訳にいかねえから困ってんだろ」

真奥は拘えた声で唸る。

思案に暮れてしまった真奥を見て、恵美は小さくため息をついた。

「『身内』がダメなら、他人に頼めばいいじゃない」

「あ？」

「古典的な方法だと思うけど？ エンテ・イスラの故郷の村でも、よく村の教会や村長さんの

お宅でそういう貼り紙見たわよ」

真奥ははっとして顔を上げる。

「貼り紙……か」

「なるほど……目立つ所に貼れば、通行人の目に留まるかもしれませんね」

芦屋が珍しく、恵美の案に同意する。

「そう思つて、作つてみた」

「きやつ！」

恵美は、突然押入れの中からぬつと手が出てきて驚いて声を上げてしまう。

すぐにそれが漆原の手だと気づいたものの、夕陽差し込む古いアパートの一室で、押し入れの隙間から紙切れを持った手だけが出ているという光景はなかなかホラーなものがある。

「る、ルシフェル!? 脅かさないでよ!」

漆原は手に持っていた紙を放り投げると、押入れの襖をびしゃりと閉じてしまった。

千穂がその紙を拾い上げると、それはワープロソフトにデジカメで撮影した猫の写真を貼りつけた、ごく簡単な作りのチラシだった。

「いつの間に、デジカメとプリンターなんか買ったの」

恵美は冷たい目で真央を見る。

「おう、アラス・ラムスの写真を色々な形で残そうと思つてな。めっちゃ安売りしてたから」

「こんな旧型安売りじゃなきゃ詐欺だよ」

鼻を膨らます真央に、押入れの中の漆原は手厳しい。

それ以上に、惠美はそんな金があるなら何故アラス・ラムスが魔土城にいる間に布団の一组も買わなかったのかと文句を言いたくなる。

だが惠美が口を開くより早く、

「あの……」

千穂が困惑したように真奥に尋ねた。

「この『銀シヤリ』ってなんですか？」

「へ？」

真奥は千穂から渡されたチラシを見ると、どういう訳か写真の脇に「名前…銀シヤリ」と書かれていた。

「今日、漆原と二人で考えました」

「……もうちょつと考えろよ。猫だぞ？」

芦屋の突然のカミングアウトに真奥もげんなりするが、芦屋はいたって真面目だ。

「いつまで預かることになるかわかりませんが、万が一にも子猫飼育の事実が大家さんや不動産屋に漏れないよう、扱いには慎重を期す必要があります。言うなればそれは、名前というよりその子猫を表す符丁のようなものです」

「つまり名前じゃない」

惠美は小声で突っ込む。

これだけ全員で外部の人間に引き取りを頼んでいるのに符丁もタソも無い気もするが、確かに「箱」では微妙に不便と真奥も思いはじめていた頃だった。

「ま、まあ銀シヤリはともかくだ。でも、いいんじゃないか？ 写真あと一枚くらい増やして、俺の電話番号載せて、引き取り手探しますとか書けば……」

チラシのレイアウト自体は簡素なPCとプリンターを使った割りには分かり易い出来で、なかなか捨てたものではなかった。

恵美と漆原のアイデア、というのが少し痛だが、この懸賞は言っていられない。
だが、

「でも……どこに貼ります？」

その場の全員が、暗黙の内に想定していたであろう場所に、異を唱えたのは、複雑な顔でチラシと真奥の顔を見比べる千穂だった。

「どこって……電柱とかじゃだめなのか？」

「私もそう思ってたんだけど……ちよつと違うかもしれないけど、逃げちゃったベントの搜索願いとかがよく見るじゃない」

恵美もまさか、千穂からNGが出るとは思わずそう言うが、

「あれ、本当はいけないんです」

千穂は申し訳なさそうに言う。

「極端なこと言うと、電柱にああいふ貼り紙すると、器物損壊になっちゃうんです。特に東京都は電柱に貼り紙するにも色々規制があって、生活安全課でも結構厳しく取り締まりしてるらしくて……」

「き、器物損壊で……たかがベツト探しのチラシくらいで？」

予想外の事実には、真奥も恵美も声屋も驚きを隠せない。

「もちろんベツト探しの貼り紙くらいなら警察が勝手に剥がすか、厳しくても口頭注意くらいで済むんですけど……お父さんの話だと、貼ることの違法性よりも、電話番号載せちゃったせいで、色々なトラブルが起こるケースが後を絶たないらしくて」

「……あー……そういう」

イタズラ電話程度ならまだ可愛いもので、中にはベツトロスに付け込んだ詐欺、ストーカー事件、空き巣事件などに発展してしまったケースもあるのだと言う。

「載せるとなると、どうしても真奥さんの電話番号しかないですよね？ 前あったみたいに変な業者に目を付けられちゃうかもしれないし、私はやめておいた方がいいと思います」

「前？ 業者？ なんの話ですか？」

「わ、分かった！ うん、ちーちゃんの言う通りだな！ 貼り紙中止！ うん、やめよう！」
鈴乃が来たばかりの頃、声屋の不在時に漆原が訪問販売業者に騙されて要らぬ買い物をしてしまったことがあった。

書屋には秘密裏に処理されたその事件が明るみに出そうになり、真央は慌てて大声を張り上げた。

「あ、あの、折角チラシ作ったのに、水差しちやつてすいません……漆原さんも」

千穂は自分の優等生的発言を悔いるような顔になるが、

「いいっていいって。これはちーちゃんが正しい。ほいほい電話番号晒しちまおうとした俺の脇が甘いんだ」

真央は苦笑してチラシを折りたたんでくずかごに捨てる。

「ちょー……折角ネットのベクト関係のBBSとか開いてたのになー……わっ！」

押入れの中でばやく声は、書屋が機を叩いて黙らせた。

「そうね……私の故郷みたいな田舎じゃないもんね。こっちに来て以来、自分の身の周り、い人ばかりだったから忘れてたわ。世の中色々な人がいるもんね」

恵美も千穂の言うことには納得したようだが、その言葉に、傍らで鈴乃は驚いたように目を見張った。

「エミリア？」

「ん？ 何？」

「……あ、いや、なんでもない」

恵美が自然に返事をしたので、鈴乃はそれ以上尋ねることはできなかった。

「となると、地道に引き取り手を探すしかないわね」

恵美はそう言うのと、飽きることなく「銀シャリ」を眺めているアラス・ラムスを抱え上げた。

「あん、みゃーみゃ、もっとみる！」

「帰んのか？」

「明日も仕事ですからね。一応職場の人たちには聞いてみるけど、期待はしないで頂戴」

「……おう、まあ、助かるわ」

「じゃ、千穂ちゃんまたね」

「みゃーみゃばいばい！ ばいばい！」

「あ、はい、お疲れ様です」

「……それと、魔王」

「なんだよ」

恵美は真裏と「銀シャリ」を交互に見てから、小さく言った。

「預かって一日二日ご飯食べさせただけでも、情って移るものらしいわよ。名前まで付けちゃ

つて、いざ引き取り手が現れたときに、円（だ）んだって知らないわよ」

「……ああ？」

「それじゃあね」

恵美はアラス・ラムスを連れてきつくと出ていってしまった。

「なんだそりや」

真奥は首を捻るが、恵美が言うことに思い当たることでもあるのか、千穂が心配そうな目で見つめてくる。

千穂は、世話している子箱がいなくなることで、真奥がアラス・ラムスが恵美と融合したことを知らなかった間のような抜け殻状態にならないか心配なのだ。

「真奥さん、もし新しい飼い主が現れても、落ち込まないでくださいね」

「ち、ちーちゃんまでなんだよ？」

「にー」

箱の中から真奥のボヤキに合いの手を打つかのようなタイミングで子箱が鳴いた。

「なんなんだろうな。分かるか、銀シャリ？」

この瞬間、拾われた子箱の名は、『銀シャリ』に確定したのだった。

※

三日が過ぎた。

そして、万策も尽きた。

恵美も千穂も、なんだかんだで知己に声をかけてくれたようだが、色良い返事は得られな

ったという。

「町内の知り合いもダメだったし……どうすりやいいんだ……」

最後の手段として、真裏が懇意にし、愛騎・シテイサイタル・デュラハン式号を売ってくれた自転車屋の広瀬や、アルバイト先のマダロナルドの常連客で同じ町内に住む渡辺老人らにも声をかけたのだが、やはり結果は同じであった。

このままでは本当に、大家に隠れて延々銀シャリを飼わなければならないかもしれない。

「勘弁してくれよ!」

押入れの中からの漆原の悲鳴も、最早限界に達していた。

漆原の症状は日を追うごとに悪化している。

最初の頃はくしゃみだけだったが、昨日には咳と鼻づまり、肌荒れまで起こすようになり、さすがに冗談では済まなくなっている。

「に……」

心なしか、銀シャリの鳴き声にも元気が無い。

真裏は箱の中の銀シャリを見る。

あのとき、芦屋の言う通り元いた場所に返した方が良かったのだろうか、ふと思ってしまう。

知らぬこととはいえ、家人が猫アレルギーで、そもそも猫を飼える住環境ではなかった。

銀シャリの珍しい毛並みなら、本当に猫を飼える人間なら迷わず連れ帰ったことだろう。

だが一方で、あの日は気温が極端に低かった。

発見したときは夜中で人通りも無く、弱々しく鳴く声は、真奥の目には今にも死んでしまいそうに聞こえたのだ。

悪魔の王である真奥が、たかが捨て猫一匹の行く末を案じるなど、自分でもおかしいと分かっている。

通りがかったのが芦屋や漆原だったら見捨てていたかもしれないし、真奥もそれを責めはしなかっただろう。

だが、

「甘かったかなあ……これしきのこととで、あいつに近づけると思っただけ」

真奥は銀シャリの姿に、かつての自分を重ねてしまったのだ。

何も分からぬまま霧攫のように打ち捨てられ、ただ死を待つばかりだったあのときの自分に。

「魔王様？ 何か仰いましたか？」

丁度、鈴乃の部屋で沸かした湯で銀シャリのミルクを作っていた芦屋が戻ってきて、真奥は首を横に振る。

芦屋はすっかり銀シャリのミルクやりに慣れてしまい、ひょいといつまみ上げると銀シャリが自然に口を開く抱き方で、

「そろ銀シャリ、食事だ」

声をかけて銀シャリの口にスポイトを近づけようとするが、

「……銀シャリ？」

「なんだ、どうした？」

声屋がいぶかるような声を出すので真奥が尋ねる。

「いえ、妙に飲みが悪いもので……銀シャリ、冷めてしまうだろう。早く飲……」

「お、おい声屋！」

声屋の授乳の様子を見ていた真奥は、銀シャリの異変に気づいて声屋の肩を揺る。

「な、何か震えてねえか？」

「た、確かに……一度箱に戻しますか」

声屋は授乳を中断して箱の中に銀シャリを戻すが、

「ぎ、銀シャリっ！」

銀シャリは箱の中で二、三步よろよろと歩くと、その場所で力なくうずくまってしまった。

「にー……」

「げっ」

真奥はうめく。

うずくまったままで、銀シャリは賣をした。

だが、その裏が明らかに水っぽく、昨日までしていた図形の形ではなくなってしまうていた。

「おおおい芦屋、こ、これヤバくねえか？」

「げ、下痢げでしょうか？ で、でもミルタは間違はなく人間温度で適量与えていたはず……」

「……けえっ……」

「わ……」

今度こそ真奥と芦屋は肝を潰した。

銀シャリが、口から得体の知れない小さな塊を吐き出したのだ。

「なななな、吐いた？」

「お、おかしなものは与えていないはずなのにっ？」

下痢の上に謎の物体の嘔吐である。

「どどど、どうすりゃいいんだ？ や、やっぱダメだったのか？ 拾った日に風邪かぜかなんか引

いてたのか？」

初めて見る銀シャリの状態に、魔王と悪魔大元帥は完全にパニックに陥っていた。

「へーっつくしよいい!!」

「……やっ!!」

そのとき聞こえた盛大なくしゃみに、真奥と芦屋は飛び上がった。

発信源を辿ると、押入れの奥が少しだけ空いている。

「う、漆原!?」

「脅かすな馬鹿!」

「……あどだあ（あのなあ）……」

鼻づまりで言葉が言葉になっていない漆原の声と、何かが印刷された紙だけが、押入れの隙間から突き出される。

「おばえらがそこであばででだってしようがだいだろ。ぶろにばかせろよ」
そう言って紙を部屋にひらりと投げると、すぐにびしやりと襖を閉める。

真奥が拾った紙には、

「……オーロラ動物クリニック?」

最寄りの獣医までの、地図が印刷されていたのだった。

※

「はい、じやちよつと検査するんで、お待ちくださいねー」

真奥は、銀シャリの入った箱を受付の看護婦に預けると、憔悴（しうたい）しきった顔で待合室のベンチに崩れ落ちた。

今まで動物病院などまるで意識していなかったが、漆原が印刷した地図を見ると、魔王城の

近くには結構な数の動物病院があったのだ。

その中の一つに電話して銀シャリの容態を説明すると、すぐ診るから即刻連れてこいということなので、真奥は細心の注意を払ってデユラハン武号に銀シャリの箱を載せ、オーロラ動物クリニックに走ったのだった。

受付から見える範囲にも、様々な種類の動物がいた。

猫はもちろん犬や小鳥、珍しいものではカメレオンの姿まであった。

待合室は暖色系のポップな雰囲気調度で、あまり病院、というイメージではない。

来院者用の本棚には、当然のようにペット雑誌が沢山入っていた。

真奥は何気なく猫の雑誌を手取るが、ばらばらページをめくっても内容がまるで頭に入っていない。

ちらちらと診察室の中を窺うが、待合室から診察の様子は見えなかった。

掲示板には犬の狂犬病予防接種の呼びかけや、新しい薬の広報に加え、最新ペットグッズの広告なども貼ってあり、真奥が今まで接したことのない独特の空間になっていた。

そんな中で、真奥の目を引いたのが、とある犬の写真だった。

「素敵な里親、見つかりました……？」

それは、来院者の家で産まれた子犬達の里親が見つかった、というお知らせだった。

写真には大型犬に授乳される数匹の子犬が映っており、それぞれの名前と「おうちが決まり

ました！」という手描きのPOPが貼りつけられている。

真奥がその貼り紙をまじまじと眺めていると、

「真奥さん、どうぞー」

診察室の中から、眼鏡をかけたずんぐりとした体型の男性が顔をのぞかせ、真奥を招き入れた。

真奥ははっと顔を上げて、押し込むように診察室に飛び込む。

「銀シヤリっ！……って、あれ？」

そこには、来院した患者を載せる台の上で、元気にベットフードらしきものをむさぼる銀シヤリの姿があった。

「えー……？」

「まあ、この通り、元気ですよ」

診察室に入ってから二十分も経っていないが、銀シヤリはすっかり自分の足でベットの皿の前に構えている。

「獣医師……吉村」というネームプレートを付けた男は、真奥に着座を促す。

「まあおかけください。それでも実際、いらっしゃったのは正解かと思えます」

「そ、そうですか……」

吉村獣医師はカルテを見ながら真奥に尋ねた。

「つかぬことお伺いしますがこの子、えーと」

「銀シャリです」

「……えっと、銀シャリちゃん、真奥さんのお宅で育った子ですか？」

「え？」

「人からもらったか、もしくは捨てられていたのを拾ったんじゃないですか？」

言い当てられて真奥は驚く。

「ど、どうして分かったんですか？」

吉村は、真奥の質問にすぐに答えずカルテに目を落とす。

「電話でお伺いした様子だと、子猫用のミルクを与えていらつしやつたとのことですが……それ以外のものは？ 例えば今食べている子猫用フレークとか……」

「いえ……まだ小さく見えたので」

「今回の不調の原因はそれですね。銀シャリちゃん、もう離乳食を食べはじめなきやいけない時期なんです。年齢でいうと生後六十日を過ぎた頃です。子猫を育てる方なら誰もがご存知のことですが、真奥さんはご存知なかったようなので、多分どこかで拾われたのかなと……」

愛好家や専門家には、当然のことらしい。

吉村は続ける。

「ミルクだけじゃ栄養が足りなくなってきたんでしょう。分かり易く言えば、水っぱいもの

ばかり食べて、お腹空き過ぎて下痢しちゃったんです」

「そ、そうなんですか……」

真奥は、未だもくもくと餌を食べる銀シャリを呆然と見る。

「これほど鮮やかな銀色は珍しいですが、暗が緑色のところを見ても、銀シャリちゃんは恐らくロシアンブルーという種類の猫です。この種類の猫は人間に懐くまでの警戒心がとても強いんです。この年齢になるまでは親元にいたんでしょうが、そこからいきなり捨てられてしまったとしたら、慣れない環境に置かれたストレスもあつたんじゃないかと思います」

「猫のストレス……ですか」

真奥にはピンとこないが、吉村は至極真面目だ。

「バカにしたもんじゃありませんよ？ 人間だってストレスで胃に穴開いちやうでしょ。体の弱い動物の子供なんかあつという間ですよ」

すると、満足したのか銀シャリは皿から離れて体を舐めはじめた。

「ちなみに、吐いたのはこういう毛づくろいで飲み込んだ体毛が固まった毛玉です」

「け、毛玉？」

「はい。多い子なら一週間で二、三回くらい吐きますよ、毛玉。猫には当たり前の現象です」

「……………」

真奥は、自分が地球の猫について、あまりにも無知であつたことを痛感する。

毛づくろいが終わったらしい銀シャリが診察台の上を歩き回ろうとしたので、吉村は真奥が担き込んだ箱に、慣れた手つきで銀シャリを戻した。

だが満腹になって体調も回復したらしい銀シャリは、箱をガタガタ揺らしながら中で飛び跳ねるので、吉村は箱の縁を掴んだままだ。

「……本当はこんな元気な子だったんですね」

真奥は力なく言う。

「うちに來てから、ちよつとは回復したとは思ってたんですけど、こんな飛び跳ねたことはありませんでした」

「そんなに弱っていたのですか？」

吉村に促され、真奥は銀シャリを拾ってから今日までのことをかいつまんで話す。

「やっぱり無責任でしたかね」

「何がでしょう？」

真奥の言葉に、吉村は首を傾げる。

「いや、飼育できる環境が無いのに、拾っちゃったことが……。おかげでこんな目に遭わせちゃって、折角拾ったのにそれで飢えさせたら世話ないなと思って……」

一度自分の傘下に入ったからには、必ず生き延びられるよう世話をする、という心構えは、魔界で療傷げた当初から心に誓っていたことだ。

だが、魔力を失い人間に身をやつした自分は、道端の子^こ第一^{だいいち}匹^{ひつ}満足^{まんじつ}に世話してやれない。百数十年ぶりの無力感を覚えた真奥に、吉村はきっぱりと言った。

「無責任なことは、全くありませんよ」

吉村は、箱をガタガタと揺らして、中敷きのタオルにかじりついて転がりまわっている銀シヤリを見て言った。

「まあ、お住まいのアパートの大家さんは良い顔はされないでしょうけど……手探^{てさぐ}りでもこうしてご飯をあげて、飼^かい主^{しゅ}を探^{さが}して、異常を見つけて病院に連れてきた。真奥さんに拾^{ひろ}われなければ、この子は銀シヤリと呼ばれることもうちに抱^{かか}き込まれることもなく、死んじやつてたかもしれないんです。真奥さんが気に病^やむことは、何一つありません。誰^{たれ}が無責任かと言えは、最初に銀シヤリちゃんを捨てた元の飼^かい主^{しゅ}が最も無責任でしょう」

吉村の力強い言葉に、真奥は情けなくも救われた気になってしまふ。

人間の獣^{けつ}医師^{いし}に、魔王^{まおう}が助^{たす}まされていてはそれこそ世話がない。

「……でも、結局きちんと飼^かってくれる人は、見つからないままですし……」

今さら真奥も銀シヤリを捨てることなどできはしない。

だが、少ない人脈をフルに使っても、銀シヤリの引き取り手を見つけることはできなかったのだ。

吉村はしばし何かを考えていたが、

「真奥さん、待合室の掲示板、ご覧になりました？」

「え？ 犬の予防注射とかの……あ」

真奥は待合室の掲示板に、様々なお知らせと一緒に、どこかの子犬が里親に引き取られたというニュースが載っていたのを思い出す。

「すぐに見つかる保証はありませんが、うちの待合室で里親を募集してみませんか？ 銀シャリちゃん、器量良しだしこれだけ綺麗な銀色はなかなかいません。うちの患者さんの中でも、欲しい人はきつと思います。銀シャリちゃんをうちでお預かりすることはできないのもう少しだけ真奥さんのお宅で飼うことになるとは思いますが、もし里親候補が現れたら、きちんとした方をご紹介しますことだけは約束できます」

「にー!!」

吉村の望外の話に真奥が頷く前に、銀シャリが快活な声で返事をした。

「これでもう、赤ん坊ではないのですか」

箱の中で暴れる銀シャリに苦勞しながら魔王城に帰還した真奥。

真奥は真奥から銀シャリの診断結果を聞いて、しみじみと言う。

「一年経てば、猶ほ大人になるんだってさ。もう増りに箱の中で暴れる暴れる」

帰宅した銀シャリは、もう箱の中に閉じこもっていることができないらしく、聲の上を好き勝手に歩き回っている。

「で……」

と、芦屋は、真裏が銀シャリ以外に持ち帰ってきた品々を見て複雑な顔色になる。

「最低限、今はこれだけ必要、と」

オーロラ動物クリニックで勧められた、ミルクに添加する糖分補助剤や離乳プレートとそれを入れる皿の他、トイレ用猫砂、子猫飼育の手引きなどが銀シャリの箱の横に置かれている。

「見た目はど金ばかりかってねえから、診察代と合わせても七千円くらいだからよ」
七千円という値段に一瞬顔を強張らせる芦屋だが、

「にー！ にー！」

すっかり元気になって、足元にすり寄ってきて、両足の間を一人前に八の字を描きながら歩き回り、時折り立ち止まって見上げてくる銀シャリのつぶらな瞳と目が合い、

「ま、まあ、し、仕方ないかもしれないですね」

と、妙に甘いことを言い出した。

「ぶしっ……にー」

「ふ、ふ、む、あ、で、その、この離乳食は一食につきどれほど盛れば……」

ズボンの裾から入って肌を撫でる銀シャリの毛の感触に妙な唸り声を上げながら、銀シャリ

を踏み潰さないようにゆっくり歩く芦屋。

だが銀シャリはそんな芦屋の足元を律儀についていき、なかなか離れようとしなない。

そんな様子を見てつい顔を綻ばせる真奥だが、ふと思ひ出して買い物を逃した。

「あと、これはホームセンターで買ってきたちょっと上等なマスクな。漆原、もう少しこれつけて我慢しろ」

「ものおおおおおおおお!!」

「にい! にー! にー!」

押入れの中からは種天使の悲痛な悲鳴が聞こえ、まるでそれをおちよくるように銀シャリが芦屋の足元から離れ、押入れの前で鞠いた。

そのまま親に爪を立てようとしたので慌てて真奥が抱え上げる。

「全く、騒がしいな……」

隣の部屋で鈴乃は屑根を寄せていたが、聞こえてくる声が、銀シャリの無事を喜ぶ声だったので、人知れず安心しているのだった。

それからまた、しばらくの時間が過ぎた。

銀シャリはすっかり子猫本来の活発さを取り戻し、魔王城の面々にも慣れて、世界征服を成

し逃げんとした悪魔達を敵々に振り回した。

だが、そこは魔王と四天王一の知将と呼ばれた悪魔大元帥である。

もう銀シャリの食べる量を間違えたりはしないし、遊びに熱が入って家具に激突しそうなのを止めるのも、ずっと簡単になった。

おしつこやうんちのタイミングも即座に見切って猫砂に放り込む技術など、既にベテランの域に達している。

段ボール箱の中も銀シャリが居心地の良いように籠糞タオルが定期的に交換され、緊急用に購入した猫用ミルタも無くなりかけていた。

真美が百均で購入してきた猫じやらしは、銀シャリのお気に入りです。真美達が振らなくても一人だけがじと戯れていることがある。

「……こんな状態で、里親が現れたときに大丈夫なの？」

「知らん、私に聞くな」

「かわいいですよねー」

「へーくしょんっ！」

銀色の毛玉と載れる大の悪魔二人を眺めて、真美と鈴乃と千穂はそれぞれに感想を漏らし、漆原は相変わらずくしゃみをしていた。

そして、銀シャリが魔王に拾われて二週間近くが経とうとした頃だった。

「……っ」

真奥の携帯に、オーロラ動物タリニツクから、電話がかかってきたのだ。

最早恒例行事と化していた夕方のねこじやらしの時間だったので、真奥は冷や水を浴びせられたように感じた。

「真奥さん、吉村です。銀シャリちゃんを引き取りたいって方がいらっしやいまして……」

「そう……ですか」

「にー？ にー！ にー！」

真奥が遊びに集中してくれないのを察して、真奥の体によじ登って注意を引こうとする銀シャリ。

真奥は肌を爪を立てられシャツの袖によじ登られそうになりながら、それを放置して吉村との電話を続ける。

西屋はそんな真奥と銀シャリの様子を、ある種覚悟した様子で見ている。

漆原は、押入れの中で息をひそめてくしゃみをしていた。

「……」

通話を終えた真奥は、当初の目的を忘れて真奥の頭への登攀に挑戦している銀シャリを肩に乗せたまま言った。

「引き取り手が、現れた」

「……左様ですか……」

「信頼できる人だそうだ。飼育の経験も豊富で、前に飼っていた猫を、普通よりずっと長生きさせたんだと」

「……聴ってもない、申し出ですね」

「……ああ」

めでたい話のはずなのに、真奥と声屋の声はとことん暗い。

「暗いよ、お前ら」

押入れの中から漆原の声が聞こえる。

「明日、引き合わせてくれるそうだ。もちろん断ってもいいとは言ってくれてるが……」

「……そういう訳にもいかないでしょう。本来、ここにいるはいけな猫です」

元々、魔王城では銀シャリを最後まで世話してやれないから引き取り手を探しはじめたのだ。ここに来て理想的な相手が出てきたのに、断る理由はどこにも無い。

真奥は、遂に魔王の頭上に君臨した銀シャリをつまみ上げると、顔を近づけて言った。

「良かったな銀シャリ。飼い主が現れたぞ」

妙にしんみりしてしまった仮初めの飼い主の顔を見下ろしながら、幼い顔の銀シャリは欠伸をするように大きく口を開け、

「にー……かつ」

「……あのな、こんなときに毛玉吐くなよ」

感傷も哀もなく、真奥の目の前で銀シャリは毛玉を吐き出し、手足をじたばたさせはじめた。「ああそうだ、恵美やちーちゃんにも、面倒かけたから知らせねえとな。明日から銀シャリが俺達に食われる心配はしなくて済むぞってな」

最早手遅れなほど、真奥も声屋も、銀シャリに情が移ってしまっていたのだ。

「みゃーみや、おいしゃさん？」

魔王の愛騎、シテイサイクル・デュラハン式号に設置された子供用座席から、アラス・ラムスが真奥を見上げてくる。

「新しい飼い主さんに会いに行くんだ」

自転車を押し歩きながら、真奥は頷く。

前かごにきちんと固定した箱の中には、久々の外出で緊張しているのか、いつもより大人しい銀シャリがいる。

銀シャリを新しい飼い主に引き渡すことになったことを話すと、なぜか恵美が、アラス・ラムスを送れて現れたのだ。

病院の場所がヴィラ・ローザ管轄から離れていないことを確認してから、

「折角だから、一緒に出掛けてくればいいじゃない」

と、珍しく恵美の方からアラス・ラムスを預けてくれた。

「……箱インフルにでもかかったか」

恵美らしくもない申し出に真奥は目を瞬かせるが、恵美は最近見られる低いテンションで、事もなげに言う。

「梨香に聞いたのよ。預かってたベットを渡しに行った婦りの一人の寂しさは異常らしいから、ついでにアラス・ラムスとご飯でも食べに行けば？ まだまだ暑いんだから、脱水症状とエアコンの冷えには気をつけなさいよ」

「……ますます気味が悪いんだが」

銀シャリと別れがたい気持ちを見て破られた上に敵に塩を送られているようで気分の良くない真奥だが、

「あら。じゃあ銀シャリちゃんと別れて喪失感に打ちひしがれてるのを私達の中の誰かに見られたいの？」

からかうように追撃されて、グウの音も出ない。

「別に一人で行くって言うならいいわよ。ねぇアラス・ラムス、ばばったらアラス・ラムスと一緒に出掛けたくないんだって。どうす……」

「ああもう！ 行ってくるぞ！」

どこまでも底意地の悪い惠美を振り切り、名残惜しそうな戸屋と鈴乃と千穂に見送られて真奥はオーロラ動物タリニツタに向かう。

「みやーみや、みやーみや」

アラス・ラムスは滅茶苦茶な節回しで手を振り回しながら妙な歌を歌う。

そんな様子に苦笑して、アラス・ラムスが調子に乗って銀シャリの箱を叩き出さないように注意しながら、父子と猫はゆっくり時間をかけてオーロラ動物タリニツタに到着した。

真奥は自転車を固定すると、まずはアラス・ラムスを座席から降ろし、大人しくしてるよう言い含めてからかごに紐で固定した銀シャリの箱を抱える。

アラス・ラムスは、なぜか両手で自分の口を塞ぎながら真奥の横をとてとてとついてくる。

「アラス・ラムス、なんで口塞いでるんだ？」

気になって尋ねると、

「いーこするの、しー」

どうやら、アラス・ラムスの中で「大人しくする＝静かにする」ことらしい。

自分を父と慕う赤子のそんな解釈に思わず顔を綻ばせた真奥は、ちよつとだけ救われた気持ちになって、オーロラ動物タリニツタのドアを開いた。

「あ、真奥さん、お待ちしていきまし……あれ？ そちらのお嬢さんは……」

待合室には既に吉村獣医師が待機していて、真奥が連れてきたアラス・ラムスの存在に日



を丸くしている。

「まあ、なんと言うか、娘です」

「そ、そうでしたか」

「わんわー」

アラス・ラムスは待合室の入り口にある、大きな陶器製の犬の置物に目を輝かせ、早くも「しー」が解けてしまう。

「こら、アラス・ラムス、しー、だぞ」

「しー？ わんわもしー」

陶器製のレトリバーは「OPEN」の看板を口に咥くはえているだけで何も言っていないのだが、アラス・ラムスは真剣に陶器のレトリバーに向かって口の前で人差し指を立てている。

「それで、銀シャリを引き取ってくれる人っていうのは……」

「ああ、ご紹介します。こちら……」

吉村獣医師に促つゝされて待合室の奥のベンチから立ち上がった人物を見て、真奥は目を丸くする。

「あれ？ 広瀬さん？」

「え？ お知り合いだったんですか？」

吉村が、真奥の言葉を聞いて驚いた様子を見せる。

そこにいたのは、ヒロセサイクルショップの店長広瀬だった。

真奥は一度銀シャリの件を相談して広瀬には断られていただけに、引き取り手が広瀬であることに驚きを隠せない。

「何か、悪かったな真奥ちゃん、この前はツレないこと言っちゃって」

広瀬はバツが悪そうに苦笑する。

「吉村先生から、俺んちで猫飼ってたって話は聞いた？」

「凄く長生きさせたって……」

「まあ、そういうことで、長生き『させた』ってことで察してくれ。『昨年逝っちゃってな』

でも、広瀬さんのお宅のルナちゃんは幸せだったと思いますよ」

吉村は、昔を懐かしむように優しい言葉をかける。

「ルナって名前だったんですか」

「まあ」

職人然とした風貌の広瀬は恥ずかしそうに笑う。

「結婚前から飼ってたから、年齢で言えば上の子供より年上でな。死んじまったときには家族全員で泣き暮らして、もうルナ以外の猫は飼えねえって思ってた。最初は真奥ちゃんの話も断っちゃったけど……まあ、その、開けていいか？」

広瀬は真奥に断って、真奥が抱えた箱の蓋を開ける。

「にー？」

すると待ちかねたように、銀シャリが、元氣良く顔を出した。

「写真見て驚いたんだが、ルナにそっくりなんだよこの子。ルナもロシアンブルーにしちや妙に毛の色が明るくて、多分純血種じゃなかったんだろうが、それでもまあ綺麗でさ。たまたまルナの命日が近くて世話になった吉村さんに挨拶に来たら、貼り紙に目が行っちゃってさ、何か他人とは思えなくて……名前、なんてつけたの？」

「銀シャリです」

「銀しや……」

広瀬は「瞬絶句したが、すぐに破顔する。

「うちに来てもらってもいいか？ もちろんルナの代わりとかじゃなくて、新しい家族ってことで。まあその、子供らが「銀シャリ」って名前を良しとするか分からないけど、そこはなんとか説得するから」

「大事にしてくれるなら、名前は好きに呼んでやってください」

真実（マコト）は笑顔でそう言くと、銀シャリの箱を広瀬に手渡す。

「時々、様子見に行ってもいいですか？」

「勿論だ」

「にー」

銀シャリも、新たな飼い主に特別異論はないようだった。

※

「なんだ、近所の人だったの」

「しかも、思い切り知り合いでな」

真奥の結果報告に、恵美はとてつまらなそうな顔をした。

「わんわ、わんわー」

アラス・ラムスは陶器で出来た小さな犬の人形を持っていて、また真奥が甘やかしたのだとため息をつく恵美。

「あーあ、残念ね。アラス・ラムスがなくなったときと同じくらい、絶望に打ちひしがれて泣きながら帰ってくると思ったのに」

「……あのな」

からかわれているように聞こえて、その実、気を遣われているようで真奥としては大変に居心地が悪い。

「広瀬さんて、商店街の自転車屋さんの広瀬さんですか？」

さすがに千穂は、地元のことだけあって広瀬の店のことを知っていた。

「良かったですね。すぐ近くじゃないですか！ それなら銀シャリちゃんも真奥さんも寂しくないですね！」

千穂の他意のない言葉に、真奥は思ひ切り狼狽える。

「お、俺は別にそんなんじゃないっての。それにこれから広瀬さんちに届け物しなきゃならねえから、なんか別れたって感じしねえんだよ」

千穂の邪気のない言葉に鼻白む真奥は、実際これから銀シャリの世話に使っていた細々としたものを広瀬に渡しに向かうことになっている。

最初は慣れた道具を使って、その後時間をかけて広瀬の家で過ごしやすいようにしていくのだという。

大して多くもない銀シャリ関係の道具を袋に纏めながら、真新しい歯型がついた箱じやらしをしまうときだけ、真奥の心は、少し軋んだ。

「なあ恵美」

「何よ？」

「……アラス・ラムス、連れてきてくれて、サンキユな」

「……」

なんだ、やっぱり寂しいんじゃない、という言葉が喉まで出かかった恵美だが、真奥がすぐに目をそらしてしまったので、チャンスを選んではしまった。

「……はあ。なんだか急に張り合いというか、緊張がなくなっちゃいましたね」
その夜、芦屋は何度目か分からないため息をついた。

真奥よりもむしろ気が抜けてしまっているのは芦屋かもしれない。

芦屋は真奥と交代で銀シャリへの餌やりを担当していたので、時計と、銀シャリの箱が置いてあった部屋の間を見る癖がしばらくは抜けなさそうだ。

真奥も、ここ数日はバイトを上がって帰ると銀シャリと遊ぶのが日課だったのだが、今や暇を持て余して、畳に寝転んでいる。

そして漆原はと言えば。

「……」

まだ、押入れから出てこない。

「おい、いい加減出てこいよ、もう銀シャリいねえんだぞ。暑いだろぅがよ」

「……」

真奥の声にすっと押入れの隙間が開いて、漆原が顔を半分だけのぞかせる。

「こええよ。座敷童が」

「……あ、やっぱだめ」

「漆原は真奥に返事もせず、すぐに押入れを閉じてしまう。」

「芦屋、頼む、明日でいいから掃除機かけて」

「……何故私が、貴様に掃除の指示をされねばならんのだ」

芦屋が仏頂面で言う。

「まだ残ってるんだよ、銀シャリの毛とか臭いが。だからなんかまだ鼻がムズムズすんの！」

頼むから明日朝イチで掃除機……へ、は、は」

漆原は唐突に言葉を切り、妙な呼吸を始める。

そして、

「はあああくしょよいい！」

一発、盛人にくしやみをした。

「大変だな、お前も……」

漆原とは違い、銀シャリに関わる一切の痕跡を感じることができない真奥は、どこかしみじ

みと言う。

「でも……いたんだなあ。この部屋に、猫が」

「そうですね……でも魔王様、それでは銀シャリが死んだみたいに聞こえます。今は広瀬さん

のお宅で、健やかに育つことを祈りましょう」

「……そだな」

頷く真裏に、押入れからの怨嗟の聲が届く。

「僕のくしやみで追憶とかすんの、やめてくれないかな！……ぶへくしよい！」

遠原のくしやみは押入れの壁を揺らし、陶室の鈴乃がその音に根根を毒せる。

「健やかに育つことを祈る、か」

「魔王様？」

「……いや、ギャグにもならぬよと思ってな」

「は？」

「……なんでもね。もう寝るわ。おい遠原！タオルケット取るから機、開けるぞ！」

「わ！待って待ってマスクしてな……待ってって言ってるだろ！へ、へくしよいつ！」

鈴乃は、舊抜けになっている魔王城のドタバタにうんざりしながらも、銀色の子猫の健やかなる成長を祈ることだけは、彼らと心を同じくしていた。

「……魔王が、小さな命を救うか……」

祈りを捧げる神は地球の空にはいないが、それでも晴れ渡った夜空を見上げて、鈴乃は思う。「その一徳が魔王に蜘蛛の糸をもたらすとしたら、それは誰が、どのような形で差し伸べるのだらうな」

悪魔の思いも、人間の思いも、全ての思いも全く意に介さず、夏の夜は暑気と都会の喧騒を
棄せて、幽々と更けていった。



魔王と勇者、お布団を買いに

「ベル、ごめん、ちょっとアラス・ラムス、見てもらっていい？」

「なんだエミリア、来ていたのか。どうした？」

夏の陽差しがかすかに和らぎはじめたある日の夕方、着物のカタログを眺めていた鈴乃の部屋に、隣室を訪ねていたと思われる恵美が、険しい顔でやってきた。

「すずねーちゃ」

恵美の手から託された赤子、アラス・ラムスは素直に鈴乃の胸に抱かれる。

「すぐ済むから」

そう言う恵美は、理由も話さずにまた出ていってしまう。

「すずねーちゃ、それ、えほん？」

「……ん？ ああ、これは綺麗な和服の写真が沢山載ってる本……」

恵美の様子を怪訝に思いつつも、アラス・ラムスの間に応じて読んでいたカタログを見せてやろうとしたときだった。

「却下!!!」

「おうっ!？」

「う？」

アパートの薄い壁を吹き飛ばさんばかりの怒鳴りが響き、鈴乃は思わず腰を浮かし、アラス・ラムスも何事かと目を丸くしている。

ついで壁の向こう側、隣室の押入れに当たる場所で、巨大なネズミが慌てふためき暴れるような音がして、その後、しばしの静寂。

「……アラス・ラムス」

「はい、すずねーちゃ」

鈴乃の問いに、律儀に挙手して答えるアラス・ラムス。

さっきの大声は間違はなく恵美だ。

そして鈴乃の隣室。東京都渋谷区笹塚の六畳一間の木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室に居する魔王城で、異世界の勇者たる蔵佐恵美、エミリア・ユステイーナが怒号を張り上げる理由は、

「ままは……またばばと喧嘩しているのか？」

それ以外に見当たらぬ。

このアラス・ラムスの「ばば」である魔王サタンこと真奥貞夫が、また「まま」である恵美を怒らせるようなことを言ったのだらう。

だが、鈴乃の予想に反し、アラス・ラムスは首を横に振った。

「あのね、今日ね。ばばのおうちでおやすみなさいしたいのってゆったらね、ままがすずねーちゃとあそんでなさいって……」

「あー……」

アラス・ラムスが必死の語彙力で伝えた内容に、鈴乃は思わず肩を落とした。

「……嵐にならなければいいが」

嵐

「い、い、いきなりデカイ声出すなよっ！」

二〇一号室の魔土城の主、真奥貞夫は早鐘のように脈打つ胸を押さえながら惠美に抗議する。「いきなりじゃないわよ。私がベルにアラス・ラムスを預けに行った時点で穏やかに済まないことくらい察しなさい」

惠美は、口に焼けた六畳間の真ん中で、勇者の名にふさわしい鋭い眼光で、キッと真奥を睨みつけた。

「何日かには一回、アラス・ラムスをあなたに会わせるのは、仕方ないから認めてあげるわ。でも、そこが譲歩の限界よ！ 泊まらせるなんて絶対に認めないわ！」

「勇者ともあろうものが、なんと嫉妬な！」

もう一人、真奥の隣にいる上背のある男が更に抗議を重ねる。

「何、アルシエル！ 文句あるの!?」

真奥より頭一つ背の高い男こそ、悪魔大元帥アルシエルこと西屋四郎。

魔王城の家事家計を一手に与る知将である。

「どうせ貴様のことだ。我々悪魔がアラス・ラムスの教育に悪いとか、そのような浅はかな理由で宿泊をさせないつもりだろう！」

勇者である恵美は、かつて一度は雌雄を決した魔界の王と将である真奥と宮屋を、当然のように目の仇にしている。

これまでも恵美は、真奥達のことを、悪魔であるという色眼鏡越しにかなり言いたいことを言ってきた。

「だが、貴様はそれでも『母親』か！『父親』と一緒にいたいという子供の願いを無下にするなど、勇者とも、いや、人とも思えぬ非道非情。アラス・ラムスのことに関してだけは、我々は過去の遺恨を抜きに考えるべきではなかったのか？」

隣室に住む鎌月鈴乃ことエンテ・イスラの大法輪教会訂教審議官クレスティア・ベルに預けられている赤子アラス・ラムスは、ただの赤子ではない。

異世界エンテ・イスラの世界組成の宝珠セフィラ・イエソドの欠片の化身である。

勇者である恵美を「ママ」。魔王である真奥を「はば」と信じて疑わないアラス・ラムスは日本に來た当初、独立した存在として魔王城で起居していた。

その後、エンテ・イスラの天使達からアラス・ラムスと聖剣を守る戦いで、アラス・ラムスは恵美の持つ聖剣「進化聖剣・片翼」と融合してしまい、結果として恵美のマンションに引つ

越すことになった。

その一連の騒動で、彼女を守るために、生涯の仇敵同士である真奥と恵美は、アラス・ラムスの日本での生活に干渉してだけは、極力お互いの過去を考えないようにしようという暗黙の取り決めたはずだった。

だが、そんなことを考えていた声屋を、恵美は一笑に付した。

「過去の遺恨（いこん）？ アルシエル、あなた私がそんな理由でこんなこと言ってると思ってるわけ？ 無いとは言わないけど」

「無いわけじゃねえのか」

真奥の突っ込みは無視される。

「でもね、あなた達が悪魔であるということを考えないとしても、この部屋にアラス・ラムスを泊まらせるなんて絶対に承服できないわ！」

そう言うとき、恵美はつかつかと押入れに歩み寄り、横に手を掛けると一気に引き開けた。

「うわわっ!!」

すると、突然開け放たれた押入れの二段目から、情けない悲鳴と共に小柄な少年が転がり落ちてきた。

最初の恵美の怒号で押入れに避難して、その後ずっと中から聞き耳を立てていた、元悪魔大元帥ルシフェルこと漆原半蔵である。

「あ、あ、危ないな！ 何すんだよ！」

危ういところで疊に手をつけて頭からの落下を回避した漆原は抗議するが、恵美は全く意に介さない。

そして漆原が転がり落ちた後の、押入れの二段目を指し示して言った。

「どうしてもアラス・ラムスを泊ませたかったら、せめて布団くらい買いなさい！」

三人の大悪魔は、グウの音も出ずに沈黙を余儀なくされた。

芦屋に言われるまでもなく、恵美だってアラス・ラムスの望むようにしてやりたいのはやまやまなのだ。

何せ日本に来てから最初の二週間はこの六畳一間の魔王城こそがアラス・ラムスの家だったわけだし、恵美の聖剣との融合、という事態さえ起こらなければ今だってそうしていたかもしれない。

だが、結果として恵美が引き取ることになった現在、アラス・ラムスの生活環境は激変したと言って良い。

何せ恵美のマンションには、エアコンがある。

これは年端もいかぬ乳幼児にとって重要だ。

連日猛暑日を記録する東京都内のこと。比較的風の通りやすい立地のヴィラ・ローザ管轄だが、こうして黙って眠み合っているだけでも恵美の額には汗が浮いている程なので、ほとんど焼石に水だ。

そして第二には、恵美が憎恨している布団。

床に寝る文化にあまり触れたことのなかった恵美なので、日本の生活でもベッドを用いて就寝している。

アラス・ラムスが初めて恵美の部屋で寝たときのことを、恵美は未だに忘れられない。

「ふかふか！ ふかふか！」

アラス・ラムスは恵美のベッドのマットレスをどシバシと叩きながら大いに喜んでいた。

それまでではなく、畳の上に直に寝るか、バスタオルを敷いていたのだと言う。

日本に比べて決して文化的・経済的に豊かとは言いがたいエンテ・イスラですら、余程の貧困国でもなければ必ず各家には専用の寢床があったのだから、この経済大国で物価がピンキリの日本で曲がりなりにもまともな社会生活を送っている真央が、布団の一種も購入しないというのはなんとも解せない。

「別に低反発素材だの百パーセント羽毛だの買えとは言わないわ。でも、いくらなんでも夜に赤ん坊を畳の上に直に寝かせるなんて冗談じゃないわ。あれくらいの子は骨格が柔らかいのよ。変な寝方して体にクセがついたらどうするの！」

大体、悪魔が三人、この夏場に登の上に川の字になって寝ている、という環境だけでも噴飯ものだ。

真美達は日常身だしなみや清潔さに気を配るタイプではあるが、それでも目に映る場所に衛生臭、臭殺菌スプレーのボトルが無ければ、登に足を踏み入れることすらしたくなくなる。

恵美の正論に反論できない真美と芦屋。漆原は関係ないとはかりに押入れに戻ろうとして、恵美の眼光に遮られそそくさと窓際に逃げる。

「……前から不思議だったけど、どうしてあなた達、布団買わないの？ それくらいのお金、無いわけじゃないんでしょ？」

シングルサイズの布団なら、店を選べばフルセットで揃えてもそう高額にはならない。

贅沢を言わなければ一万五千円も出せば、オールシーズンで使うのに十分すぎるものが揃うだろう。

「こんなに立派な収納スペースがあるのにもったいない。これじゃ完全にルシフェルの自棄じゃない」

恵美は開け放った押入れの二段目を見て、深くため息をつく。

「私はもう、そこはルシフェルを収納するための場所だと思って諦めている」

「芦屋、速回しに僕がこのお荷物だって言いたいの？」

芦屋の低い声に漆原が囁みつくが、恵美は芦屋の言葉に一定の理解を示した。

「……なら上はともかく、この下の段の段ボール箱とかそんなに沢山荷物が入ってる気配も無いし……ちよつと整理すれば置く場所だってありそうなのに」

「エミリア、僕が二段目に収納される前提で話すのやめてくれない？」

漆原の抗議を無視して恵美は真奥に向き直る。

「……あんまり言いたかねえんだがな」

すると真奥は、諦めたように項垂れて、思わず正座していた足を崩した。

「答える前に聞きたいんだが恵美、お前今持ってる家電とか、エンテ・イスラに帰ることになったらどうするつもりだ？」

「家電？ 私の家で使ってるやつ？」

恵美は思わず魔王城のキッチンに目をやり、冷蔵庫やレンジを指差すと、真奥が頷く。

「物によるけど、レンジや冷蔵庫はなんとか改造して電源を法術由来にして、持って帰って使えないかと思ってるわ」

「いいのかよ。異世界のもの持ち込んだりして。よくあるじゃねえか。先進世界のものを持ち込んで技術のギャップでバニッタになるみたいな話が」

真奥の言いたいことはなんとなく分かるが、恵美は肩を練める。

「エンテ・イスラ中を旅して異世界まで来て魔王討伐するのよ。その後の生活を少しくらい便利にする道具を持って帰っても、バチは当たらないと思うわ」

「……欲があるのか無いのか分からんな」

芦屋は恵美に聞き咎められないように呟く。

ともすれば恵美の発言は、エンテ・イスラで自分一人だけ地球科学の恩恵に浴す生活を良しとする傲慢な考えにも聞こえる。

だが一方で、異世界に渡ってまで命がけで魔王を倒して世界に平和をもたらした勇者の望む報酬が、電子レンジだの冷蔵庫だの商店街の福引景品レベルのものでいいのか、と考えると、恵美は非常に欲が無いとも思える。

「でもまあ、正直俺も考えることは似たようなもんだ。俺もレンジは持って帰りたいし、冷蔵庫なんかもう二、三台くらいあったっていいと思う。でもよ……」

真奥は言いながら、恵美の後ろの押入れに目をやる。

「布団は……そういう訳にいかねえだろ。考えてみる。俺達、悪魔なんだぞ」

「え？」

「漆原はまだいいさ、そんなに変化無いんだから。でも、芦屋なんか今の時点でもうロングサイズのタオルケットが足りなくなってるだぞ？ 俺だって似たようなもんだ」

そこまで言われて、恵美ははたと気づく。

今の人間の男性の姿は、いずれも仮の姿。

真奥、芦屋、漆原の正体は、魔界に君臨する大悪魔であり、特に真奥と芦屋の悪魔型は、人

闘の成人男子など軽く凌駕する体軀を誇る。

「……ブッ！」

そこまで想像して、恵美は思わず吹き出してしまった。

そして真央は、恵美のその反応が予測できていたようで、顔を歪めてそっぽを向いてしまう。
 「い、いいじゃない、ぶふっ！　しょ、庶民派魔王なんでしょ！　あははっ！　そ、それこそ私が砕いた角が痛くないように低反発枕でも買えば……あははははは！」

「笑うな！　悪魔に戻った魔王様が人偶サイズの布団で就寝している姿を想像して笑うな！」
 魔王型の真央がす足らずの布団を体の上にもよこんと載せている姿を想像して、笑いが止まらなくなる恵美と、顔を真っ赤にして抗議する真央。

「おい真央、そこまで具体的にお前が想像していると違にお前に腹立ってくんぞ」

「はっ？」

「……とにかくだ。布団は向こうに持って帰っても使えないし、それにな」

真央は腕を組み、ふんぞり返って恵美を見上げる。

「寝床を自分で用意しちまうと、本当にこの世界に腰を落ち着けることになっちまいそうでな。単純に、俺が買いたくなかったんだよ。俺にとって日本は、あくまで仮宿だ」

「あはは……はあ……」

ひとしきり笑った恵美は、呆れたように腰に手を当てた。

「魔王ともあるうものが、ジントクス信じちゃってるなら世話ないわね。そういう話、千穂ちゃんの前でするんじゃないわよ？」

「……」

この場にはいない少女の名を上げて、恵美は釘を刺す。

日本で唯一、真奥や恵美の正体や異世界エンテ・イスラの事情を知る女子高生、佐々木千穂は、真奥が魔王と知ってなお好意を寄せている。

日本が仮宿、と言いつける真奥を目の前にしたら、千穂は意気消沈してしまふだろう。

恵美にとっても、千穂は大切な友人なのだ。

「……まああとは真面目な話、三人分を買おうと思つたらやつぱそれなりの出費だろう？ さすがにそれだけの余裕は無いから、ここまで来たらいらねえかなと思つたんだよ」

「まあ、分からなくはないけど」

他人の家の経済事情にまで踏み込むわけにもいかず、さりとて納得できない点もある。

「でもあなた達だって日本にきて一年は経ってるわけでしょ？ そんな状態で、この前の冬は

どうしてたわけ？」

夏場は、最悪雑魚寝でもなんとかなる。

が、真冬となると、暖房器具の無さそうなこの部屋で、布団も無しに寝るのはそれこそ自殺行為のような気がするが……。

「これ、買ったときにべらっべらなコタツ布団が付いててな。あとはとにかく服重ねて着ぶかれて、丸屋と二人で反対側から足突っ込んでそれで寝てた」

「えっ……」

真美は誇らしげに部屋の中で食卓・物書・机・兼その他色々な用途に使われるカジュアルコタツに手を置いて言い、日本の冬を経験したことのない漆原が顔を強張らせて聞いた。

「……まあ、今度の冬にあなた達が凍死したいなら別に何も言わないけどね……」

討伐なんかしなくても、放っておくと本当に死んでしまいそうな魔王達の生活。

「仕方ないわね」

このまま言っていてても噂が明きそうにない。

「いいわよ。さっきアルシエルも言ってたし、アラス・ラムスのことは私も大事だから……布団買うお金、出してあげるわ」

「マジか？」

「なんだとっ？」

「本当っ？」

すると突然、三人の悪魔が目を輝かせて真美を見上げる。

その敬うような視線を見て、真美はすっと目を細めて三人の勘違いを打ちのめした。

「アラス・ラムスの、ね？　なんで私が、あなた達の布団にお金出さなきゃいけないの。つい

でに言うとも、あなただって「はば」なんですかね？ 折半に決まってるでしょ」

その瞬間の真風達の落胆ぶりは、動画にして記録しておきたくなるほど劇的なものだった。

「なんで勢いであんなこと言っちゃったんだろ」

翌朝、恵美は通勤電車に揺られながら、早速昨日の魔王城での宣言を後悔していた。

いや、アラス・ラムスのことを考えるなら、やはり真美に会わせることを禁じるわけにはいかない。それについてはもう割り切った。

問題は、恵美とアラス・ラムスの聖剣を介した結びつきである。

聖剣を介して融合状態の恵美とアラス・ラムスは、一定距離以上離れることができない。

ということは、アラス・ラムスが魔王城に泊まるためには、必然的に恵美も近くにいないければならないということだ。

その日だけは迷惑を承知で隣室の鈴乃に泊めてもらえば良さそうなのだが、果たしてアラス・ラムスはそれを良しとするだろうか。

かつてアラス・ラムスを超える天界との騒動で恵美は真美とアラス・ラムスとの三人だけの「家族本入り」の夜を過ごしている。

あの日のことをアラス・ラムスが鮮明に覚えていた場合、絶対に三人で寝たがるに決まっ

そのときは大人用の布団が無かったので決して恵美と真奥が同衾、ということにはならなかったのだが、ある意味恵美の精神衛生よりもずっと現実的な問題が立ちはだかっている。

「まさかアルシエルとルシフェルを追い出すわけにいかないしね……」

単純に、今の魔王城に恵美の寝ることができるスペースが無いのである。

以前恵美が泊まったときは事情が異なる。

いくら漆原が小柄とはいえ、男三人が横になればもう畳はいっぱいいっぱいだ。それこそ以前そうだったように、アラス・ラムスが入る程度の隙間しかない。

パソコンデスクやコタツをいくら寄せても、恵美がアラス・ラムスの横に入り込むには相当悪魔達中と接近して眠らなければならない。

いくらアラス・ラムスのためとはいえ、できることとできないことがある。勇者としても、女性としても。

「ルシフェルを押入れに収納して……ダメか」

押入れの中で座敷童のごとくごそごそされた日には、アラス・ラムスが飾がつて泣き出す可能性もある。

水入らずの日は隣の鈴乃が戸屋と漆原を泊めてくれたが、それは本当に例外中の例外だ。「なんとかアラス・ラムスに納得してもらえないわね……」

なんでこんな、親権争い中の元夫婦のような極みで頭を痛めねばならないのだろう。

「……それに、子供用の布団ってなると、何がいいのかも分からないし……早まったわ」

恵美は憂鬱な顔で、自分のスリムフォンのインターネットブラウザを起動させる。

かつて恵美が自分用の布団を買ったのは近所の衣料品店だったが、残念なことに昨夜の爆りかけに寄ってみれば、そこには子供用の布団は売っていなかったのだ。

ネットで調べようにも、ものがアラス・ラムスが寝るための布団である。

できれば本人が気に入る質の良いものがいいのだが、代金は真実と折半の約束だから、向この経済観念にも合わせず独断で購入して、後からぐちぐちと文句を言われたくもない。

一体どういうものならいいのだろう。

恵美には日本で分らないことがあるとき、素直に人に尋ねる習慣ができていた。

だから昨夜のことから色々頭を悩ませていた恵美は、その日の昼、ごく当たり前のように勤め先の同僚で友人でもある鈴木梨香に、質問してしまったのだ。

「ねえ、子供用の布団で、どういう所に行けば買えるかなあ」

「へっ」

携帯電話会社ドコモの子会社の一つのお客様相談センターに勤務する恵美の同僚、鈴木梨香は、大きな目を瞬かせてランチセットのバスタを食べていたフォークを取り落とした。

「ちよ、ちよっと梨香、どうしたの？」

梨香の劇的な反応に驚く恵美だが、

「そ、そりや驚くよ。いきなり恵美の口から子供用の布団とか言われたら……え？　なんでそんなもの買うの？」

「ああ、実はね、この間、真奥の所の親戚の子供の話したでしょ？」

以前も梨香には、アラス・ラムスへの接し方で相談したことがあった。だから、あまりにも自然に、言ってしまった。

「う、うん」

「その子が実は今……」

その瞬間、恵美は固まる。

これは、完全に下手を打った。

だが、考えなしに放ってしまった言葉はもう取り返しがつかない。

「真奥さんの親戚の子が、何？　例の、恵美をお母さんだと勘違いしたっていう子だよね？」

「そ、そうなんだけど、あの、その子が、ね」

うちにいる。

それを言ったら梨香がどう反応するか、それくらい考えるべきだった。

梨香は良き友人だが、佐々木千穂とは違い恵美や真奥の正体を知らない。

アラス・ラムスの存在は知っていても当然正体は知らず、梨香には真奥の親戚であると紹介

していたのだ。

「時々、うちに来てるの……それで、泊まることとかもあって……」

苦しい言い方だとは分かっているものの、強引に話題を変えることもできず、そう白状せざるを得なかった。

「う、うちに來てる？ って、何それ？ どゆこと？ あのアラスだかシラスだかい子を、

恵美が預かってるっていうこと？」

「アラス・ラムス」

曲がりなりにも自分の「子」を適当に呼ぶ梨香に訂正するが、梨香が問題にしたいのはそんなことではない。

「真奥さんの親戚でしょ？ それをなんで恵美が預かってるの？ それって何か変じゃない？」
そりやそうだ。恵美だって言われるまでもなく変だと分かっている。

はんの数日前まで、恵美とアラス・ラムスの間には、アラス・ラムスの勘違い以上の繋がり
は無かったはずなのだから。

「何……まさかとは思うけど、その子が恵美に懐いてるのいいことに、真奥さんが恵美に世話
を押しつけてるわけ？」

取り落としたフォークを持ち直した梨香だが、その目はかなり真剣な不審の色を宿している。
恵美はたじろぐ。

「う、ううん、そういうんじゃないの！ 押しつけられてるとかそういうんじゃないで……」
 「じゃあ何？ 事と次第によっちゃ私が真奥さんにビシツと言ってやるよ？ なんなら実家の会社のツテで弁護士とか紹介しようか？」

話が民事的にどんどん人さくなくなってくる。

「神戸の弁護士さん紹介されても困るから、ちょっと落ち着いて榮香、本当に、真奥が育児放棄したとかそういうことじゃないの！」

いい加減止めなければ、それこそ榮香の暴走は本気で真奥の所に殴り込みかねない勢いだ。そして残念ながら、それをされると困るのは恵美も同じなのである。

現状、真奥の態度がどうであろうと恵美とアラス・ラムスが不可分の存在であることは変わらないのだから。

「ほら、なんて言うのかな、あれくらの年ごろだと、やっぱりお母さんが恋しくなるみたいなんだけど、真奥の所が男所帯でしょ？ 隣に住んでる鈴乃だとやっぱりダメみたいで、私も真奥はともかくあの子のことは好きだから、こう、本当に必要なときにはうちに泊まらせてあげてるのよ。も、もちろん真奥の親戚の方にはさちんと話はつけてるから」

「ふううん……なんか変な感じだけど……まあそういうことなら、納得せんでもないわ」

「あとは千穂ちゃんにも懐いてるんだけど、さすがに女子高生のうちに赤ん坊預けるわけにいかないでしょ？」

「彼女でもない女にってのも十分変な気はするけどね」

梨香はまだどこか釈然としない様子だったがそれでもとりあえずは引き下がってくれた。

「で、それで子供用の布団ってことか。でもそれ、まさか恵美がお金出すの？」

「ちゃんとその分のお金は、真奥の方に出してもらうことになってるから」

本当は半分なのだが、そこは言ったところでどうにもならない。

梨香はフォークを行儀悪く咥えながらも考え込む。

「布団ってか寝具？　って聞いてバツと思いつくのはやっぱ西川寝具だけど、真奥さんとこの

経済事情だとちよっと厳しいかもね」

「……西川か」

西川寝具は創業四百年を越える日本有数の老舗企業で、寝具と言えば西川、と言っても良い寝具メーカー最大手である。

「ま、子供が使えぬ期間を考えるとちよっと高いかもね。でもこの際だから、今から大きいのが買っちゃうってのもアリじゃない？　アラス・ラムスちゃん？　もう結構大きいんでしょ？」

「そうね……って梨香、アラス・ラムスに会ったことあったっけ？」

アラス・ラムスを梨香と会わせた覚えのない恵美は首を傾げる。

「……っと、ううん、恵美の話しぶりを聞いて、なんとなくそうかなーって」

梨香が一瞬詰まった気がしたのは気のせいだろうか。

「まああれよ。専門店とかだと高いけど、養松屋とかの子供用品店とかにあるのだったら、西川製でも割り引かれてたりするんじゃない？ 本当に値段安くしたいならネット通販なんだろうけど、子供寝かせるものなら手触りとか気になるだろうしね」

「養松屋？」

「あれ？ 知らない？ 子供用の服とか身の回りのものとか色々売ってる店」

「知らなかった。昨日検索してみたんだけどネット通販のサイトしか出てこなくて」

恵美はスリムフォンを取り出すと、養松屋の名を検索してみる。

「あ……でも確かに都心で見た記憶ないなあ。少し郊外とかベッドタウンにあるイメージ」

梨香は食後のアイスコーヒーを飲みながら、ふと気づいてグラスを置く。

「そーいや恵美も真奥さんも、最寄駅京王線だよな？」

「え？ う、うん」

スリムフォンの画面に小さい画面で必死に店舗検索をしていた恵美は梨香の大きな声に電話を取り落としそうになる。

「郊外とかベッドタウンって言うなら、聖蹟桜ヶ丘とか南大沢とか行ってみたら？」

「え、どうして？」

電車内の路線図で、駅名だけは知っている。聖蹟桜ヶ丘は特急停車駅で、南大沢はどこかの駅から別れた路線の先にあった気がする。

恵美の最寄駅は京王線とはいえ、支線である井の頭線の永福町駅。

新宿から京王線で三駅の明大前駅で乗り換えてしまうため、明大前駅以降の京王線本線の駅については詳しくないのだ。

「南大沢に大きなアウトレットモールがあるんだよ。ブランドものとか安く売ってたりするんだ。まあ奮闘ってなるとあんま関係ないかもだけど、あと、聖蹟桜ヶ丘は駅前に京王関係のショッピングセンターが沢山あって、値段もピンキリで結構楽しいよ?」

「郊外のショッピングモールか……」

恵美はそう言うのと、梨香の言った駅名を検索しはじめた。

※

「こら、アラス・ラムス、お靴脱ぎなさい」

「あん、やーの」

「だーめ、電車の椅子が汚れちゃうでしょ」

「うー」

恵美は、電車の座席の窓から外を見たがるアラス・ラムスの足を掴んで、強引にサンダルを脱がせようとする。

ちよつとの間抵抗したアラス・ラムスだが、

「こら、アラス・ラムス、ままの言うこと聞かなきゃめつだぞ」

「……うー、あい」

反対側の隣にいる真奥に齊められると、素直に頷いて恵美の為すがままになり、足を解放されると早速座席に膝をついて外を眺めはじめた。

「まったく……ぼぼの言うことだと素直に聞くんだから……」

恵美は腕がせたサンダルを手につくと、アラス・ラムスが見ている外の景色を振り向いた。

「積み重ねた威厳の差ってやつかな」

「Tシャツにハーフパンツ、しかもサンダル履きの魔王が威厳を語らないで」

「今日暑いしな。それに休みの日の父親なんてこんなもんだろ」

真奥がそう言って電車内を見回し、恵美もそれに釣られる。

「……あなたの外見の若さでそれっていうのは、ちよつと違う気がするわ」

だが、これ以上言ったところで今さらどうしようもない。

恵美は、車内アナウンスが次の停車駅である調布を告げはじめるのを聞いて、諦めたようにため息をついた。

日曜の京王線下り、特急京王八王子行きの車内である。

休日のお昼前の下り列車ということもあり、車内はそれなりに混んでいたが、恵美とアラ

ス・ラムス、そして真奥は運がいいのか悪いのか、三人並んで座席に腰かけることができた。真奥が恵美からアラス・ラムスの布団を買うために聖蹟桜ヶ丘なる駅まで行くことを告げられたのは週末のことだった。

笹塚からだとも明大前で特急に乗り換えて行くことになるのだが、真奥は、最初は行くことを渋った。

何せ、路線図を見ても笹塚から大変に遠い。

品物の質と値段の幅が広いという恵美の話もピンとこない真奥だったが、

「ばばといっしょにお出かけしたい」

という電話越しのアラス・ラムスの一言に、気づけばOKを出してしまっていた。

アラス・ラムスと出かけるということは、恵美も必然的にくっついてくる、ということに気づいたのは電話を切ってからのことだった。

「……何、そのメモ」

財布と携帯電話以外は何も持ってきていない真奥が手にしているメモを見て尋ねる恵美。

「ん、酒屋が、安かったら買ってきてくれて、買い物メモ」

アラス・ラムス越しに差し出してきて、ついうっかり手に取ってしまう恵美。

成り行き上目を落とすと、

「玉ねぎ一袋、白だし、納豆、食器用洗剤詰め替え用……安売りしてるからって電車で乗って

まで買いに行くもの？」

「だよな。あいつ何か勘違いしてる気がする」

恵美から突っ返されたメモを手の中で握りしめてポケットに突っ込むと、唐突にアラス・ラムスに体を向ける。

「アラス・ラムス、何が見える？」

「んー、ひこーき」

「お？ おー、率直だ。高いなー」

「あと、まぐろばと」

「ん？」

「まぐろばと!!」

「んん？ 何？」

一度で聞き取れなかった真美に、アラス・ラムスは顔だけ向けて必死の形相で訴える。

「んつと……」

「……マダロナルドの看板のことよ」

見かねた恵美が助け船を出した。

「なんだって？」

「電車から時々見えるでしょ。線路沿いの道の看板とか」

「……ああ。確かに」

言っているそばから、通過駅のロータリーにあるマグロナルドを発見したアラス・ラムスが、

「ばば！ まぐろばと」

「おー、そうだなー」

と、魚なのか鳥なのか分からない新種の動物の名前を上げながら発見の報告をしてくれる。

「マグロナルド、は言いにくいもんな」

「最近食べたがって仕方ないの。まだ早いって言い聞かせてるんだけど」

「そうなのか？」

尋ねると、東美は心底嫌そうに、アラス・ラムスから見えない位置で顔を繋めて言った。

「『ばばとおなじにおい』ですって」

「……いい子だなあ！ アラス・ラムスはあー」

東美の仏頂面をよそに、感極まったかのようにアラス・ラムスを抱きかかるとして、

「あうっ」

窓に顔を付けて外を見ていたアラス・ラムスは、突如すれ違った対向車両が起きた風圧で

揺れた窓に顔を打ちつけてしまい、

「う、ひいええあああああ！」

驚きの余り泣き出してしまった。

「お、おおお、い、痛かったな今のは！ 大丈夫かアラス・ラムスー」

真奥は撫でようとした手でアラス・ラムスを抱えるとなんとか泣きやむようにあやし、

「す、すいませんすいません」

恵美は周囲に小声で気を遣いつつ、真奥が抱き上げたおかげで空いたアラス・ラムスの空白を、

「……………ああもう！」

周囲の微妙に白い視線に耐えつつ、真奥の体に密着するように席を一つ詰めたのだった。

「……………はあ」

大きくカーブした聖蹟桜ヶ丘駅のホームに降りた真奥と恵美は、ぐったりして顔を見合わせる。

「……………なんで大天使相手にあんな大立ち回りができるのに、風圧で揺れた窓にデコぶつけないで泣くんた…………？」

「私も…………知らない」

「…………すー…………すー」

泣き疲れたアラス・ラムスは、真奥の腕の中で寝てしまっている。

エアコンが効いた電車内からじつとりと湿気のある表に出ても、目を覚ます気配が無い。

「青児ってのは驚きの連続だなあ……」

「迷子の心配が無いだけ、マシな気はするけどね……あら？」

そう言う二人のすぐ脇を、アラス・ラムスより少し小さいくらいの子を乗せた乳母車を押す若い夫婦が通り過ぎた。

「……あーゆー手もあるか」

「でも私達の行動半径だと、階段とか段差がありすぎてあんまり便利じゃない気がするし、アラス・ラムスの歳だともう乳母車は小さいんじゃないかしら」

「時々店の客にいるぜ？　もう幼稚園くらい行つてそうな子に乗せてる人。……よつと」

真奥は、抱えているアラス・ラムスがずり落ちそうになって、体を揺らして抱え直す。

「確かにたまに見るわね。でもきつとこの子の大ききのだと、値段が高かったりし……そ……」

いつの間にか真美は、真奥のすぐ隣に立ってアラス・ラムスの寝顔を覗きながら真奥と話している自分に気がついた。

そして、ここまでの電車内での出来事を思い出し、

「お、おい、どうした？」

「……………っ」

すぐそばのベンチに思わず座り込んでしまう。

「熱中症か？ 気分でも悪いのか」

どこか本気で慌てている風の真央を、座ったまま、下から睨み上げるように見る恵美は、
「これじゃ私達……まるで本当の夫婦みたいじゃないの……」
地の底から這うような怒嗟と共にそんな呪いの言葉を吐く。

「……………あ？」

真央も思わず陰呑な様子で片眉を跳ね上げる。

「お前なあ」

「何よ」

「女がそういうこと言うときは、普通もうちっと気恥ずかしげに言うもんじゃねえのか」

恵美は本当に熱中症で気絶してしまいたいと思った。

「あなたは私にそういう反応をお望みなわけ？」

「ンなワケねーだろ」

「……………殺すわよ……………はあ」

恵美は本当に顔色を悪くしながらもベンチから立ち上がり、

「……………それじゃ、今後そういう場面が無いように、当初の目的を果たしてとっとと帰りましたよ。
全く、調子狂うわね」

「こっちのセリフだ」



言いながら、結局アラス・ラムスがいるので、二人で並んで駅の階段を下りる真奥と恵美。

「……こんなところ、千穂ちゃんに見られたら大惨事になるわね」

「ん？」

「……なんでもないわよ」

※

「あらー、可愛いお嬢さんですねー！ おいくつでいらっしやいますか？」

「……………」

「に、二歳ちよつとです！ あははは」

改札を出てすぐの聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンターの、ベビー用品売り場でのこと。

スタッフの女性に悪意なくそう声をかけられた恵美は瞬間凝固してしまい、慌てて真奥が引きつった笑顔で応える。

「お、おいしかりしろよー」

「……はっ！」

視線が定まらなかった恵美の肩を空いてる手で括らして、なんとか事なきを得る真奥。アラス・ラムスは未だ真奥の腕の中でお休み中である。

「本日はどのようなものをお探しいらっしゃいますか？」

「えっと、その、この子が使えるような布団がないかなと思って来たんですけど……」

先導していたはずの恵美が完全に復活しきらないので、真奥が仕方なく答える。

「なるほど、かしこまりました。今まではベッド・ベッドが何か、お使いでいらつしやいましたか？」

まさか聲に「直寝ちかさせていたとも言えないので、

「いや、母親と一緒に……」

「……………」

恵美、またも凝固。

「おいっ！ いちいち『家族』意識するたびに遠い目になるな！」

「あの……？」

真奥が突っ込むが今回は、スタッフに不審がられてしまった。

「あ、いえ、なんでもありません。母親と同じ布団で寝てました。はい」

「は、はあ……お、お母様と一緒に。それでしたら、あまり寝ている間は活発に動き回る方ではないのですか？」

「……………」そうですね。結構、じっとしていると思います」

実際、魔王城にいた頃のアラス・ラムスも、夜寝きをすることはあっても寝ている間にごろ

ごろと転がるような寝相の悪さは無かった気がする。

「でも、それが何か……？」

「ああ、はい。区切られた空間のベビーベッドから外に出たお子様の寝相って、結構変わるものなんです。今まで大人しく寝ていたと思ったたらこんなに動く子だったんだなんて驚かれる若いお母様の話をよく伺いますもので」

「はい」

「でも、ベビーベッドを使われないご両親もいらっしゃいますし、そこは人それぞれですね。お休み中もあまり動かないのであれば、いい布団を用意してあげるのが良いかと思えます。どうぞこちらへ、商品をご案内致します」

「はい。おい、恵美っ」

「……あ、うん」

どこか呆けたような恵美は、真奥が袖を引っ張ると素直に後についてきた。

案内された棚には大きな四角いビニールケースがあり、如何にも子供向けのデザインの布団セットが多く並べられていた。

「ぬいぐるみがついてるんですか」

「こちらは、子供さんが寝る間に握りしめたりするためのものです。何かに掴まっている安心感を得ることが出来るんです」

顔きながらスタッフの女性達は、一つの布団セットを指差す。

「こちら、二九八〇〇円のセットになるのですが……」

「にまつ……」

その瞬間、今度は真奥が困まった。

「敷布団に、季節で中身の調節ができる掛布団、枕に、それぞれのカバー、それから低刺激程度のブランケット、それからぬいぐるみですね。それらがセットになったものです。向こうの棚の物は、掛布団が夏掛け冬掛けと二種類あつて、それぞれにカバーが付いたものになりました、こちらは三五八〇〇円となっております」

「さ……」

「カバーは、家庭で洗濯できるんですか？」

ここで真奥に代わつて、ようやく意識を取り戻した恵美が質問役に移る。

というより、真奥が酸素不足の金魚のように口をバタバタしはじめたのを視界の端で捉えた恵美の意識が、場を取り締るために強制的に再起動した形だ。

「もちろんです」

店員は力強く頷くと、真奥の腕で眠るアラス・ラムスを見る。

「お父様のお話では……」

その瞬間、恵美は意識を持っていかれそうになるのを懸命にこらえなければならなかった。

「お嬢様は、あまり眠るときに動かないそうですね」

「……はい、寝相は良い方だと思います」

「お嬢様くらいのお子様の体は成長途中で柔軟ですので、あまりに寝相が良いすぎてもそれはそれで骨や筋肉に負担がかかってしまうんです。大人でもずっと同じ姿勢で寝ると体が凝ったりしますが、子供さんだとそれが成長に関わってくる可能性がありますので、寝相がよいお子様ほど、低反発素材を利用したいとお布団を使うことをお勧めさせていただいております」

「成長……か」

恵美は、ふとスタッフの女性の言葉を反芻して、真奥に抱えられるアラス・ラムスを見る。ついでに棚の上の値段を見ながら呆然とする真奥の肩に触れて軽く揺すった。

「ちょっと、ぼけっとしてアラス・ラムス落っこちさないでよ」

真奥はそれでようやく現実に戻ってきた気配で、慌てた様子でアラス・ラムスを両腕で抱える。

「お、おう！ し、しかし言うことは分かるが三万五千か……」

「一応聞いてたのね……ちょっとお聞きしたいんですけど」

「はい」

恵美は、小さく息を吸ってスタッフの女性に尋ねる。

「初歩的な質問なんですけど、子供用の布団は、大体何歳くらいまで使うものですか？」

「……正直に申し上げます」

スタッフの女性は苦笑して言った。

「お子様の成長度合いによる、としか申し上げられない部分もございます。お休み中によく動かれるお子様ですと、掛布団はともかく敷布団は大きくすることもあります。大体こちらの商品をお使いいたたく場合、身長は一〇〇センチくらいまでとお考えいただければ……」

「成長による……そうですよ」

「……恵美？」

真奥は、スタッフの言葉に頷きながら、どこか難しい顔でアラス・ラムスを見る恵美の瞳に首を傾げた。

「……分かりました。ありがとうございます。ちょっと色々見て回りたいんで、カタログとかあったらいただいてもいいですか？」

「勿論です。是非色々回ってご検討ください。今、何冊かカタログをお持ちいたしますね」
笑顔でバックヤードへ下がるスタッフを見送りながら、恵美が、ぼつりと言った。

「ねえ、魔王……」

「あ？」

振り返ったその顔が、少し寂しげなのは、きっと真奥の気のせいではない。

「アラス・ラムスって、普通の赤ん坊みたいに成長するのかしら？」

「……っ」

恵美が言うのは、単にアラス・ラムスの肉体が大人に向かって大きくなるのかといった問題だけではないだろう。

その責任から逃れたいわけでは決してない。

だが母が勇者で、父が魔王で、それでいて勇者も魔王も本当の親ではないアラス・ラムスは、「どんなふうに、成長させてあげればいいのかしら……」

恵美の背中越しに、寝具のカタログをショッピングセンターの袋に入れて駆け寄ってくるスタッフの女性の笑顔が、真奥の目にはとても非現実的なもののように映った。

※

「なんつーか、こう、極端だよな」

真奥は、四件目のショッピングセンターの廊下を歩きながら呟く。

「最初は三万なんばはいくらなんでもって思ったが、いきなり次の店で三千円ってのも、それはそれで拍子抜けと言うか……間を取って一万五千円くらいのはってねえのかな」

「三千円のは保育園とかで使うためのお昼寝セットでしょ。夜きちゃんと寝るための布団セットとは、根本的に違うわよ。それより、安さ至上主義のあなたとも思えないけど、どういう風の

吹き回し？」

恵美の言葉に真奥は鼻を鳴らす。

「最初にデカイ金額見ちまったから、レギュレーションが分からねえんだよ。高すぎるのは困るが、安すぎるのもそれはそれで不安になるっていうか……」

そう言うとも、真奥はふと足元を見下ろす。

「ばば、なーに？」

「……それに、俺や声優や漆原は大人だからいいが、やっぱアラス・ラムスには、それなりにいいもん買ってやりてえし」

恵美も真奥と同じように、自分の足元を見る。

そこには束の間の午睡から覚め、両手ではばとままと手を繋いで、小さな足を懸命に動かすアラス・ラムスがいるのだ。

「お、アラス・ラムス、前階段だぞ。ママの手ぎゅつとしてろ！」

「あい！」

「え？ ちょ……」

アラス・ラムスに力強く握られた手を反射的に握り返した恵美は、

「そーら！」

「んいいやああい！」

真奥と二人で、間にいるアラス・ラムスを持ち上げて階段を上がっていた。

アラス・ラムスは歓声を上げてばばとままの手にもぶら下がり、無事、階段の一番上に着地する。

「……………っ!!」

「こらー、恵美し、もういい加減慣れろー! 今日はずっとこんな調子だぞー」
思わず座り込みそうになる恵美に、真奥の気楽な声がかかった。

「まま、だいじよぶ? あつい?」

おまけにアラス・ラムスにすら心配されて恵美は立つ瀬がない。

「よし、アラス・ラムス、ままも疲れたみたいだからお昼ご飯にしようぜ」

「ごはん!」

アラス・ラムスは両親の手を握ったまま嬉しそうに手をぶんぶか振る。

「まぐろばと!」

「んー? マグロナルドはまだちょっとアラス・ラムスには早いかなー」

「やん、まぐろばと!」

鯊なのか鳩なのかは知らないが、今日のアラス・ラムスは妙にマグロナルドに執心である。

「なあ、食わせたことあんのか?」

「ないけど、この子ってマグロナルドに限らず、ファーストフードの匂いに敏感みたいで」

「匂い……」

そういえば、以前アラス・ラムスが木崎に会ったとき、

「ばばと同じ匂い」

と言っていたことを思い出した真実。

「なあアラス・ラムス」

「なにに？」

「なんでマダロナルド食べたいんだ？」

ふと気になって尋ねたその言葉に、アラス・ラムスは明朗快活に答えた。

「ばばの匂い！」

「……………」

真実と恵美は、思わず顔を見合わせてしまう。

「ねーまま、今日はばのおうちでいっしょ寝よう？」

「……………まずは、ごはんね？」

恵美は、アラス・ラムスの無垢な瞳から逃げるようにそう言うとき、寂しげに俯いてしまう。

「……………なあ恵美」

「何よ……………」

「回（こ）んでんのか？」

「……は？」

突然真美がとんちんかんなことを言いはじめて、惠美は本気で首を傾げる。

真美は真美で、その惠美の反応が予想したものと違ったので、思わず狼狽えてしまう。

「あー、いや、てっきりその、アラス・ラムスが俺ばっか気にするもんだからヤキモチでも焼いたのかと」

「……あのね、私だってそこまで自己中じゃないわよ。あ、ほらあそこ、地図ある。どこかお昼食べるとこ探しましょう？」

「あ、ああ」

惠美が指差す方向には、ショッピングセンターの中にある飲食店案内があり、他にも何組かの家族連れが今日の昼食をどこで食べるか、楽しい悩みを話し合っていた。

「元々あなたの所にいたんだから、あなたのことを恋しがるのは当たり前でしょ」

「お、おお……」

「私が悩んでるのは、『勇者』を優先するべきか、『まま』を優先するべきか、それだけよ……アラス・ラムスが食べられそうなのは……」

案内板の前で、それぞれの店の一押しメニューの写真を眺めながら、惠美はなんでもないとのようにそう言った。

「……なんか悪いな。俺はどっち優先させてもそんな変わらないから……俺なんてどうだって」

「あなたに悪いなんて思ってもらう必要ないわ。私は前から言ってるでしょ。……そのお蕎麦屋さん、高いわよ。天麩羅^{てんぷら}付きだし」

「どういふことだ？ ……天麩羅^{てんぷら}か、ううむ」

「どういふもこういふも……ところで、そもそも外食して平気なの？ お金は？」

「ああ、こう見えて、一応金は持ってる。毎月の給料から俺の自由にしていい金があるし、それに出勤する日は毎回三百円小遣いもらってるからな。それ使わない日は丸々三百円貯金できるから、自分とアラス・ラムスに天麩羅^{てんぷら}食わせるくらいはなんとかなるわ……って、そういう話か？」

「お登どうするって話でしょ？」

「いや、もうちょっとシリアスな話してた気がするんだが……」

「ああ、そのこと。どうせ言っても無駄^{ムダ}だろうから言わない方がいいと思っただけよ。……バスタは、ちょっともう飽きたしな」

「なんだよ。言ってみろよ」

「まぐろばとー」

並んだ店の中から、アラス・ラムスが目ざとくマダロナルドのロゴを見つけ出して快^{はや}義^ぎを上げる中、惠美はなぜか少し憚^{はげ}しそうな顔をして、横目で真実を見た。

「『魔王』より『ばば』を優先して、世界征服^{せかいせいふく}を諦^{あきら}めて一生日本で過ごすって言うなら、私も

「ここまで意固地になったりしないんだけどね」

真奥の願裏に、あの日の光景がフラッシュバックする。

バイト上がり、夜中の笹塚の交差点。

あのときの恵美は、どんな思いで言ったのだろう。父の仇と糾弾して、命を追っていた相手に、

「この国で一生を過ごすなら、私は無理にあなたを組む必要もなくなる」

あのときは、アラス・ラムスもいなかった。ただ、魔王と勇者、仇敵の間柄だった。

今、恵美は、二人の間に一つ増えた縁を、本当はどう思っているのだろう。

いや、どう考えても、真奥と夫婦に見られたくないとは本心から思っていることは間違いない。だが「一人の少女の母」であることは……？

「……なあ」

「何」

「マグロナルドのポテトってな、言えば塩抜いてくれるはずなんだ。ちよっとくらい、アラス・ラムスに食わしてやらねえか」

「ええ？ どうしたの突然」

「それでよ、どうせ店の中混んでるだろうし、テイクアウトして、ここ、行ってみねえか？」

真奥は恵美の疑問には答えず、飲食店案内図のすぐそばにあった、聖蹟桜ヶ丘駅周辺の地

図の、ある一点を指差した。

「なあアラス・ラムス」

「なーに？」

こちらを見上げて答えるアラス・ラムスを真奥はゆっくり抱き上げて、顔の高さを合わせて言った。

「ビクニック、しようぜ」

※

「風強っ！」

恵美は思わず、風にたなびく髪を押さえた。

「かわー！」

「おおー、結構広いなー」

三人は、聖蹟桜ヶ丘駅から歩いて十分程のところにある、多摩川の河川敷にいた。

右手に京王線が走る鉄橋を臨む河川敷には公園やサッカーコート、テニスコートなどが整備されており、なかなか見ごたえのある景観だ。

「なんであの辺りだけ、藪が手入れされてないのかしら」

「向こうでバーベキューやつてる奴らが見えるけど、こっちの公園が禁止みたいだから、何か貸み分けてんじやねえか？」

左手には大きな橋があり、その橋のたもとには大勢の人間が集まってバーベキューをやっている様子が見て取れた。

「ばばー！　こーえん！　こーえん！」

河川敷に整備された遊具を見て、アラス・ラムスが目を輝かせる。

「おう。でもまずはご飯食べような。あの辺、ベンチ空いてるからそこにしようぜ」

真奥はアラス・ラムスを抱えながら、恵美の先に立って土手から河川敷へと下りてゆく。目指す先には、親子三人が腰かけるのに丁度良さそうな古い木のベンチがあった。

幸い大きな立木の下で日を避けることもできそうだ。

「……アラス・ラムス、公園って知ってるんだ」

恵美は意外そうに言う。

「私、一回も連れてったことなかった……」

「うちにいた頃、アパートの近所の公園に芦屋と鈴乃が何回か連れてったらしいぜ？」

「まー！　ぶらんこ！　ぶらんこのる！」

アラス・ラムスはともすれば、真奥の肩を乗り越えて走り出さんばかりだ。

「何か……いつもお出かけって言えば仕事ばかりで、融合状態だったから……」

開けた場所ですわしなく周囲を見回し、目につくもの全てに歓声を上げるアラス・ラムスを見て、惠美の胸が少し痛む。

「やっぱり、ストレスよね。少し、仕事のシフト減らそうかしら……」

「今の状態でうまく行ってんなら、やめとけ」

目的のベンチにアラス・ラムスを座らせて、テイクアウトしたマグロナルドの紙袋を手渡しでやる。

アラス・ラムスは両手でそれをしっかり受け取ると、目を輝かせて抱きしめる。

「まぐろばと！」

「そりや二十四時間一緒にいられりや、言うことないんだろうけどな。俺達は金のために働かなきゃならねえことも確かなんだ。俺だって、魔王城にいる間、ほとんどアラス・ラムスと遊んでやれる時間なんか無かった。言葉や鈴乃に任せっきりだ。……ほら、アラス・ラムス、お手で出せ。食べる前に手拭くぞ」

真裏はベンチの前にしゃがむと、コンビニで買ったお手拭きでアラス・ラムスの小さな手を拭いながら、惠美を見上げる。

「座れよ。食うんだろ」

「……うん」

惠美は神妙な顔で、アラス・ラムスの隣に腰を下ろした。

「よつと……ほら、アラス・ラムス、ご飯食べる前は？」

真奥も反対側の隣に座り、アラス・ラムスを見下ろす。

「あい！　いたたきます！」

言うが早い、アラス・ラムスはマグロナルドの小さな紙袋を開けて、中からポテトをわし掴みで取り出す。

「まぐろばと！」

袋の中に入ってるのは、Sサイズのポテトが一つだけ。

あとは恵美の判断で、色々なおにぎりをテイクアウトできる店から各々好きなものを選んで買ってきてある。

「恵美、ほれ、茶」

真奥が差し出したのは、百円ショップで購入したお茶のペットボトル。

恵美はそれを一瞬ためらってから受け取り、蓋を開いて口を付けた。

「……あ、美味しい……」

ボトルの品名を確認めると、恵美が見たことのないメーカーと商品名が記載されていた。

「それ、気に入ってたんだけどなあ。春先くらいにコンビニで売ってたんだけど、売れなかったのかすぐ見なくなって、最近百均で二本百円とかで見えるようになった。まあ、夏終わる前には無くなる運命だな」

真奥はからからと笑いながら、自分も同じ銘柄のペットボトルを開けて飲む。

「おいアラス・ラムス、ポテトばっかじゃ喉乾くだろ。お茶飲め」

「んむぐ……あい」

塩抜きポテトを頬張るアラス・ラムスは、真奥の飲みきしのお茶に口を付けて、小さい口いっぱいを含んで飲み込む。

「……そうすると、本当に親子みたいわ」

夏の陽差しの下、本陰のベンチで小さな娘にお茶を飲ませている若い父親。

それ以外に、目の前の光景をそのまま言い表せる言葉など、恵美の中には存在しなかった。

「なれたらいいとは、思ってる」

「……………へ？」

それは恵美の言葉に返事をしてのことだったのか。判断できずに恵美の反応は一瞬遅れた。

「お前だって、普段なかなか堂に入った母親ぶりだぜ？」

「え……そ、それは、その……」

それは果たして實め言葉たり得るのか。

「俺だって考えないわけじゃねえよ。一体いつまで、アラス・ラムスのそばにいてやれるのか

……アラス・ラムスが」

河川敷の公園で遊ぶ家族連れの声が、やけに遠くに聞こえた。

「いつまで俺達のそばにいてくれるのかってな」

「……魔王……」

「ふはっ！ まま！ おにーり！」

「え、ああ、うん」

お茶とポテトを飲み下したアラス・ラムスに請われて、惠美はたくあん付きのおにぎりセントの容器をアラス・ラムスの前に差し出してやる。

「お、いきなりたくあんからは、淡いなアラス・ラムス」

「たくあん、好き」

ぱりぱりと軽快な音を鳴らしてたくあんを頬張るアラス・ラムス。

「……『マルクト』の色してるものは、なんでも好きみたい」

「……そっか」

惠美の言葉に、真央は苦笑する。

アラス・ラムスは、明るい黄色をしたものを好む傾向にある。

それは、アラス・ラムスの存在の核を為す、世界組成の宝珠セフィラ・イエソドの仲間であるセフィラ・マルクトの司る色であるらしい。

ままは、天使と人間のハーフで勇者。ばばは、悪魔で魔王。そして、娘のアラス・ラムスは、セフィラの化身。

この親子関係が、普通の人間の親子のように円満に続くはずのないことは火を見るより明らかだ。

「でもま、それを考えてうじうじ過ごしたって仕方ない。今の俺達にはアラス・ラムスを放り出すことなんてできねえし、それに……」

そのときだけは、真奥ははっきりと、恵美の目を見て言った。

「お前が今、聖剣を使って俺を斬る意志が無い以上、今の俺達にはアラス・ラムスと俺達が別れるときなんてのは想像のしようがねえ。考えるだけ無駄だ」

「……」

はつきり言われてしまった恵美は、しかし言い返すことができない。

魔王を斬るために磨いた剣の技。手に入れた聖剣。

その聖剣に宿る、アラス・ラムス。

今聖剣で真奥を斬るということは、アラス・ラムスの身を「ばば」の血で染める、ということだ。

「わ、私は……だからってあなたを討伐するのを諦めたわけじゃ……っ！」

決して魔王を許したわけでも、討伐を諦めたわけでもない。

それだけは言っておかなければならないと語気を強めるが、真奥の泰然とした笑顔は変わらなかった。

「変に突つ張るなよ。別にそれに付け込んで悪さしようとは思わねえから。って、アラス・ラムス、力いっぱい握るなって……ああああ、ぐっちやぐちやになっちゃった」

「あ、あ、おかが零れる！」

ちよつと真面目な話をしてうっかり目を離したときには、もう手遅れ。

アラス・ラムスはおかかのおにぎりをつまみつぶしつぶしに、おにぎりは見事分解してしまう。

「あー、べったべた。ほら貸せアラス・ラムス。おい恵美、割り箸あったろ」

「あ、うん。ほら、アラス・ラムス。ダメよ、おにぎりぐちややってやっちゃ。あーんして」

「あー」

恵美はなんとか救出したもおにぎりの破片を容器に戻し、割り箸で少しずつ挟みながらアラス・ラムスの口に持っていく。

「……ま、こんなことやってるうちは、お互い魔王も勇者もねえわな」

「……」

恵美は、アラス・ラムスに食べさせることに集中する振りをして、真奥の声を無視する。

同意するのは、なんだか悔しい。

真奥も別に反応を求めてはいないらしく、アラス・ラムスが零して服に付けてしまったご飯粒をつまんで取りながら、

「いい天気だなあ」



誰に言うでもなく、青空を見上げて大声を上げたのだった。

※

「あー、つかれたなー、おい」

「……」

時刻は午後六時でも、まだまだ空が明るい夏の夕方。

笹塚駅に降り立った真央は、大きく伸びをしながらぼやいた。

アラス・ラムスは恵美の腕の中で完全に熟睡してしまっている。

お昼ご飯の後、うっかり当初の目的を忘れて河川敷の公園の遊具で遊び倒してしまったアラス・ラムスは、帰りの電車で即座に寝付いてしまった。

川風に吹かれてこそいたが、夷天下のピクニックであったことには変わりなく、疲労困憊した真央と恵美は、笹塚まで各駅停車で座って帰ってきたのだ。

「はあ。んじや恵美、悪いけど、布団のカタログ持ってうち来てくれ。声屋に説明しなきゃならんから」

「……」

恵美は、本来なら途中の明大前駅で乗り換えて自宅に帰っても良かったのだ。

それがわざわざ笹塚まで来ているのは、ひとえに真奥に頼み込まれたからである。

アラス・ラムスの布団運びは結局聖蹟桜ヶ丘（せいせきおうがけ）にいる間に決定に至らず、なんとなく最初の高い布団セットを貰おうということになったのだが、二人で金を出す以上、やはり一度戸屋に諮ら（さぐら）ないと後が怖い、と言い出したのだ。

部下の顔色を窺（うかが）わないと買い物もできない魔王に呆（うろ）れつつも、恵美も即決するつもりは無かったようで、十分吟味（ぎんみ）する必要があることだけは了承してくれた。

が、焙りの電車で疲れに任せて寝こけてしまった真奥。

笹塚で目覚めてから、ずっと恵美の機嫌（きげん）が悪いのが気になった。

何せ真奥の言葉に、全く反応してくれないのだ。

「おい、顔赤いぞ、日焼け止め塗り忘れたのか」

ふと見ると、夏の夕方の白い陽の光に照らされている恵美の顔は、なぜかほんのり赤らんでいる。

河川敷はなかなかの陽差しだったことを思い出した真奥はうっかりそう尋ね、

「……あのね」

地の底から刺すような絶対零度の視線に射抜かれて口を噤（つぶ）む。

「よくも……よくも……」

「お、おう？」

何故、恵美は身を震わせているのだろうか。

怒りで瞳を燃え上がらせているのだろう。

そして今にも炎を吐き出しかねない口を開けて、恵美は真奥にぐっと顔を寄せて言った。

「よくも延々、私に寄りかかってくれたわね？ ええ？」

「おおおお？ え？ ま、まじで？」

座席に座って割とすぐに寝こけてしまった真奥には全く身に覚えがないのだが、恵美は意味の無い嘘をつくようなことはしない。

「まじで？ じゃないわよ！ さ、桜上水から乗ってきたおばあさんに、『ご家族でお出かけですか？ 仲のいいご夫婦ですね』とか言われた私の屈辱をどうしてくれるの！」

「あー、えーっとその……」

恵美は顔を真つ赤にしながら、それでもアラス・ラムスが起きないように小声で怒っている。手が自由ならそれこそ真奥の胸ぐらを掴みかねない勢いだ。

「な、何だも肩で跳ねのけようとしたのに駅に止まる度に私の肩に寄りかかってきて……もう、顔から火が出て死ぬかと思ったわよー」

「お、おう、な、なんか悪い……」

「本当は明大前で乗り換えてやろうと思ったのに、あなたは寝てるしアラス・ラムスも寝てるし、どうしようもなくって本当に……もう、馬鹿っ！」

「お、おい、注目浴びてる注目浴びてる！」

恵美の顔を赤らめながらの糾弾は熱を帯び、どんどん声が高くなってくる。

「は、ほらアラス・ラムスが起きちまうよ。な、ちよ、ちよつと落ち着け、アラス・ラムス抱いててやつから深呼吸しろ」

「わ、私は落ち着いてるわよ……！」

それでも恵美は、真奥にアラス・ラムスを渡しながら大きく息を吐く。

座席に座れたのに全くリラックスできずに凝り固まった全身をはぐすのと、自分を落ち着かせる意味で伸びをしようと、真奥からそっぽを向いたときだった。

「あ」

「あ」

「……あ」

そこにいた人物と目が合い、恵美も、真奥も、そしてその人物も固まってしまふ。

「真奥さん、遊佐さん、アラス・ラムスちゃん？」

千穂だった。

学校の制服姿の佐々木千穂が、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、三人のことを凝視していたのだ。

「ち、ちーちゃん？」

「こ、こんにちは、千穂ちゃん……」

こんなタイミングで千穂に会うとは想像していたなかった真奥と恵美。

「どうしたんですか、こんな所で？」

千穂は平靜な様子で問いかけてくる。

「あー、うん、その、あのちよっと買い物に」

「お買い物」

「そ、そうなの。アラス・ラムスに必要な物があったんだけど、ひ、一人で決められなくて」

「そうですか。ですよ。遊佐さんのおうちに行って、環境変わりましたもんね」

真奥と恵美の正体を知ってる千穂は、もちろんアラス・ラムスの正体や事情も承知している。だから特に恵美と真奥が一緒にいることにどうこういうこともないのだが、

「……うふああう……んぬ」

その瞬間、アラス・ラムスが真奥の腕の中で目を覚ましたのだ。

「あ、ちーねーちゃ、おあよびやます」

寝ぼけ眼のアラス・ラムスは、視界に千穂の姿を捉える。

何故だろう、真奥と恵美は、これから起こることを以心伝心で予想して、背筋を凍らせた。

「おはよ、アラス・ラムスちゃん。今日はどこからお出かけしてきたの？」

千穂の何気ない問いに、ばばとままが大好きなアラス・ラムスは素直に答えた。

「ばばとままとびくにつくなの」

「へえ、ピタニ……つく……え？」

恵美は思わず真奥と恵美の顔を見る。

「ふあ……いっぱい、あそんで、今日、ままとばばいっしょに……ねるの……わふ」

目覚めきらないアラス・ラムスは、絶妙な単語の抜き出し方をして、千穂を凍らせてしまった。

「え？ 真奥さんと、遊佐さんが……？」

「ち、違うのよ千穂ちゃん！ そういうことじゃなくて！」

「お、落ち着けちーちゃん！ 考えてみる、俺と恵美が一緒に寝るわけねーだろ？」
慌てふためく真奥と恵美の言葉は、千穂の耳には届いていないようだ。

なぜならアラス・ラムスが、トドメの一言で機先を制してしまったから。

「……おふとん、かうの……あふ」

「お……ふと……ん……」

「千穂ちゃん！ 千穂ちゃん目を覚まして！」

「ゆ、遊佐さん……ま、真奥さん、も、もしかして本当にか、か、つかぞ……」

「ンなわけねーだろー 誰がこんな奴と家族になんか……」

「こっちも願ひ下げよ！」

「え？　ばば？　まま？」

「あ、アラス・ラムス？　ち、違うんだ、別にばばとままは喧嘩してゐるわけじゃ……」

「さ、三人でお布団買いに言ったって……まさか蘆佐さん、あのアパートに引越すんですか？　か、家族になっちやうんですか？」

「千穂ちゃん！　冷静になつて！　落ち着いて、一から説明するから！」

「ばばとままけんかやーのーわ……ひいええあああああ！」

「で、でも……わ、私、ふ、二人がそう決めたなら……何も」

「だから違うの！　冷静になつて千穂ちゃん！」

「あ、アラス・ラムス！　な、泣くな、違うんだつてあああもおお!!」

どこに軸を置いているのか分からない魔王と勇者の修羅場は、それから十数分続き、

「……魔王様、エミリア、佐々木さん、……一体駅で何を騒いでいるのですか」

突如現れた芦屋の呆れ果てた声による仲裁で、なんとか事なきを得たのであった。

「そうですか、アラス・ラムスちゃんがお泊りするためのお布団を……」

駅から魔王城への道すがら、芦屋に今日の真実の行動を説明された千穂は、ようやく疑念を解消してくれた。

芦屋と千穂の後ろでは、ぐったり頭重（あたまが重い）れながらついてくる真奥（まおく）と恵美（けみ）。

アラス・ラムスは、芦屋が手で押すシティサイクル・デニラハン（デンラハン）式号の子供用シートに座っている。

「でも、驚いちゃいました。真奥さん達、本当の家族みたいで……」

「言うな」

「言わないで……」

「……息びったりですね」

後ろから聞こえる低い声に、千穂と芦屋は苦笑する。

「それで魔王様、どうだったのですか。肝心のアラス・ラムスの布団は」

「あー……まあそのことをお前に相談するために、恵美には来てもらってるんだが」

「……ということは、それなりに値段が張るんですね」

芦屋は眉根（まゆね）を寄せるが、

「でも、赤ちゃん用の布団は、やっぱり良い物の方がいいですよ。小さい頃の睡眠は骨格とかに関わってくるって言いますし」

「まあ、そういう点も含めて帰ったら詳しい話を……」

何かと世話になっっている千穂に理詰めで押されると、芦屋も弱い。

「そういえば芦屋、お前さっきどこに電話してたんだ？」

ふと真奥が思い出したように芦屋に尋ねる。

真奥達がもめているところに芦屋が現れたのは偶然ではなく、駅の公衆電話を使いに来たということらしい。

「いえ、個人的な知り合いの予定を確認する必要がありました。大したことでは」

芦屋がそう答えて角を曲がると、少し先にヴィラ・ローザ荘の灯が見えてくる。

「ベルが心配していましたよ。魔王様とエミリアが、喧嘩をせずに買物なんかできるのか」と

真奥と恵美が何か言うより先に、

「ばばとままけんかしたらめっよ？」

自転車の子供用シートに座るアラス・ラムスが厳しい顔で後ろの二人を振り返り、

「はあ」

「はあ……」

『ばば』と『まま』は、複雑な色のため息をついたのだった。

「アラス・ラムスちゃん言う通り、憎すつと仲良くできたらいいですよね」

「さて……佐々木さんの仰ることで、立場的にはなかなか同意できませんが」

人間の女子高生と悪魔大元帥は、夕方の街並みを歩きながらそんな絡みもない言葉を交わすのだった。

「……………仕事行きたくないなあ……………」

らしくもない嘔吐を吐きながら、惠美は朝の新宿駅の雑踏の波間にいた。

昨夜、結局鈴乃の部屋で皆で夕食を食べて、アラス・ラムスがまたぞろ魔土城に泊まりたいと言うのをなんとか宥めて帰ってきた。

アラス・ラムスの布団については、やはり値段の面で清屋が嫌色を示したが、千穂の説得もあって西川製の布団を買うことができた。

そうになると、一応情報を教えてくれた梨香にもことの首尾を伝えなければならぬと思うのだが、汗顔に般を突いて蛇が出てきたばかりなので、どうにも気が進まない。

布団の話は何事もなくスルーできないだろうか、などともことん後ろ向きなことを考えながら自分の席に着いた惠美は、

「……………り、梨香？」

隣のブースに座る梨香が、いつもとは打って変わって遠い目をしていることに驚いた。

朝は強い方である梨香が、半分口を開けながらはんやりしているのは大変に珍しい。

「梨香？ どうしたの？」

「……あ、恵美、おはよ」

反応が、鈍い。

一体何があったのだろうか。昨日とはまるで別人のようだ。

「あ、あのね梨香、布団の話なんだけど……」

「布団………？　なんだっけ？」

これは重症だ。

あんなに食いついてきた話題なのに、まるで興味を示す気配が無い。

「どうしたの？　具合でも悪いの？」

さすがに心配になってきて尋ねる。

いつもは明るい梨香なのに、こんなに沈んで呆然とするようなこととはなんだろう。

「私……自分がよう分かんなくなりそ」

「は？」

「ねえ、恵美」

「な、何？」

その一言は、始業のベルに掻き消されそうになるほど、小さかった。

「携帯電話が無い頃の人達って、ずっとこういうもどかしい思いしてたのかね」

「よ、よく分からないけど……」

「ん、ごめん、なんでもない、仕事しなきゃね」

梨香は気を取り直したようで、全く覇気が見えないままヘッドホンマイクをセットする。

「恵美も、色々複雑かもしれないけどさ」

「う、うん……」

「思い立ったときに話ができるって、結構、大事なことだよ？」

梨香の中で落ち着かない何かは、きつとその一言に集約されているのだろう。

だがその言葉が何を意味するか、きちんと吟味できないうちに、

「……お電話ありがとうございます。ドコデモお客様相談センター、担当道佐がお伺いいたします」

恵美のブースに早くも着信があり、すがすがしい朝の不可思議な違和感は、日常業務の中に紛れて、すぐに見えなくなってしまうのだった。

数日前〜数ヶ月前 - a few days ago -



誰かが空けた窓から吹き込む冷たい風が、手元から小さな紙を浮かせて床へと落とした。

「あつ」

持ち主は、慌てて拾い上げようとする。

見られて恥ずかしい内容ではないが、普通は人に見せるものでもない。

立ち上がるのに合わせて椅子が木の床の上を鈍く滑る音がして、持ち主は席から床に手を伸ばすが、

「あつ」

彼女は、自分以外の手が拾い上げた紙を追って顔を上げる。

そこには、

「むー」

眉を寄せた渋い顔で、その紙に書かれている内容を見つめる彼女の友人がいた。

「ちよ、ちよっと、かお！ 見ないでよ」

彼女が友人のあだ名を呼びながら慌てて取り返そうとすると、

「やだ、返さない」

と、子供のような返事。

「かおってば！」

「ささちー、一体これはどういうこと？」

「何が」

箕輪北高校二年A組。クラスでも部活でも彼女が最も親しくしている友人、東海林佳織は不満げにその紙を「ささちー」に突っ返してた。

「全部八十五点以上じゃない！」

「わあっ！ 声大きい！」

「聞かれて困る点数じゃないじゃん！ 私なんか平均が六十以下だ！」

真剣に叫びながら、佳織は彼女の肩に抱きつくふりをして、後ろに回りながらふざけて首を絞める真似事をする。

「澄ました顔してさっさと良い点なんだから、この優等生！ 少しはその頭私に分けろ！」

「わ、ぐ、ちょ、かお、かお？」

「お？」

「……おかしくない？ 私、分けたよね？」

「……おー、お？」

彼女は、佳織が思い切り顔を反らした隙を見逃さなかった。

彼女は佳織から取り返した、春休み明け直後に容赦なく行われた学内模試の結果が書かれた紙を机に置くと、身を屈めて首に回っている手から抜ける。

そして素早く背後に回り込むと、佳織の左腕を下から掴み上げ、自分の体ごと背中に回して

肘から上を軽く締め、そして、

「わひやひやひやーぐ、ちよ、ささちー、脇腹はダメー！反則！」

肩の動きを制限しながら、佳織の脇腹をくすぐりはじめた。

「私、出そうなどことが、全部教えたよね？自分の勉強時間、分けてあげたよね？春体みの部活の後、一体何してたのぉ？」

「あはははははははや、そ、その、あの、ギブギブそれ以上はダメだって！」

くすぐりに堪えかねた佳織は太ももをばしばしと叩いて降参の意志を示す。

彼女も本気ではないので、素直に佳織を解放する。

「ふー、はー、や、勉強はしたよ？ささちーの教え方分かり易かったし、でも、その、時間無くてさ」

笑いすぎてひきつる顔の横で、黒髪をくるくる回しながら言い訳する佳織。

佳織の成績は決して悪い方ではないのに、その佳織をしてこうなると、もう一人はどうなってしまうのか。

嫌な予感が胸をぎったそのとき。

「おー、すげえ！佐々木、平均偏差が六十オーバーじゃん！」

折角彼女が佳織から取り返した模試の結果表を手にとって大仰に驚いている声をして、彼女は振り返った。

「江村君」

出席番号の一つ前、江村義弥だ。

東海林佳織も江村義弥も、彼女の一年次から続くクラスメイトで、同じ弓道部の仲間でもあった。

出席番号も男女混合の五十音順で三人並んでいて、まだ座替えのない学期初めの今の時期は三人一緒に縦一列に並んでいる。

「義弥、あんたはどうなのよ」

佳織が義弥に尋ねると、

「あ、俺？ 英語と国語で赤点一つ。他はなんとか五十オーバーかな」と、まるで悲げれない返事。

「よし、義弥には勝った！」

「……江村君……」

佳織はガツポーズし、彼女は呻いて肩を落とす。

「おー、ちーがまた凹んです」

「江村がまた赤点だったんじゃないの？ 弓道部、人いないらしいし、ちょっと気の毒」

彼女達三人のことを去年からよく知っているクラスメイト達のそんな声が聞こえてくる。

「佐々木、佐々木千穂、いるかー？」

唐突に自分の名を呼ぶ声が聞こえて、彼女はぐったりと疲れた顔を上げた。

見るとドアの所に、クラスの担任で漢文を担当する安藤先生が手招きしている。

「悪いけど、これ配っておいてくれ」

彼女は別にクラス委員でもなんでもないのだが、不思議と色々な先生からこういう細々としたことを頼まれる。

安藤教諭が彼女に手渡したのは、ホッチキスで綴じられた三枚つづりのプリントだった。

その表題は、「保護者様へ、「二年次三者面談について」。

高校二年に進級したばかりの四月。

また肌寒い風が吹き、春の気配は感じるけれども、冬服のセーターが手放せないようなそんな季節。

佐々木千穂の高校二年生の学校生活は、中学生の頃から変わらないありふれた日常で幕を開けた。

※

「義務の点数が低かったからって別にさきちーがそんなに落ち込む必要なくない？ あいつには特にテスト対策とかしてやったわけじゃないんでしょ？ まー、対策してもらったのに点数

微妙だった私が言うことでもないけどさ」

憂鬱そうな顔をした千穂を佳織は慰めているのだろうか。

だが、赤点二つを取らずかしげもなく豪語した義妹について千穂が思っているのは、全く別のことだった。

「……次の中間テストのこと考えると、あんまり他人事だと思っただけでなくて。大丈夫だとは信じていたんだけどね」

千穂の重い声に、佳織もはっとしたように千穂の顔を見た。

「ああ、そうだね……あ、ささちーケチャップ、ここ」

佳織が自分の口の端を指差し、千穂は今驚いたハンバーガーのケチャップが口の端についてしまったことに気づきバーバーナブキンで拭き取った。

学校から帰宅する途中にある、京王新線幡ヶ谷駅前のマダロナルド。

千穂と佳織は、部活や学校の帰り道によく利用する店だった。

高校生の買い食い程度のレベルでしか判断のできないが、他のファーストフードやマダロナルドと大差無いはずの商品が、この店では美味しく感じると千穂は思っていた。

「これで定期テストだったら、江村君あと一つで補習になっただけで部活動停止になっちゃうじゃない。そうしたら江村君だけじゃなくて、部のみんなも困るもん」

「それはそうだね。二年は私達だけだし、これから後輩入ってくるのに、唯一の二年男子がア

レじゃ、後輩に示しがつかないわな」

千穂の要請に、佳織がボテトを響りながら同意する。

千穂達が通う笹橋北高校は、周辺の都立高校の中では比較的上位の偏差値をマークしており、過去に一人だけ現役東大生を出したこともある。

それだけに学生の自分はまず勉強、というカラーが非常に強く、一回の定期テストで赤点を二つ以上取ってしまうと、全国大会出場などの特殊な事情でもない限り、部活動に参加することとを一定期間禁じられてしまうのだ。

千穂、佳織、義弥の所属する弓道部は、昨年彼女達三人が入部したおかげでどうにか廃部を免れたという程、部員の数が少なかった。

専用の弓道場がある高校は全国にも多くはなく、設備の面だけで見ればかなり環境はいいはずなのだが、そもそも高校生競技人口が決して多くないのに加え、学生スポーツの中では道具を揃えるのにかなりお金がかかる部類である。

今のところ、千穂達三人以外には今年三年生に上がった先輩が男子一人、女子一人いるきりで、顧問の教諭も形ばかりで、自身に弓道の経験は無い。

指導は先輩やOB・OG、近隣の有段者が月に何度か来てくれるボランティアが頼りで、それではやはり上達の度合いにも限度がある。

これでもし今年の新一年生の男子が三人以上入部しなかった場合、男子は公式戦にエントリー

―することすらできなくなってしまう。

そんな状態だから、位幡北高校の運動部は強豪でもなんでもなく、全国大会出場どころか十人以上前の都大会準々決勝進出が部の最高戦績だ。

だからもし次の中間テストで赤点を三つ取ってしまったら、義務はあつという間に部活停止になってしまう。

そうなると千穂と佳織や新入部員の士気にも関わるし、大会が近いのに部活停止になったら十分に練習をすることもできない。

スポーツ漫画のように弓道に高校生活の全てを捧げるようなことにはならないだろうが、それでも一つの競技に打ち込むからにはきちんとした準備で試合に臨みたいと千穂は常々考えていた。

だからこそ、今回佳織の点数がはかばかしくなかったのは千穂には意外だった。

佳織は忙しきにかまけて自分の身の回りのことを疎かにするタイプではないはずだが……。

「悪いとは思ってるんだよ？　ただ、言い訳するわけじゃないけど、私がささちーの指導を話かしきれなかったのも、ちよっと部活と関係しててさ」

「え？」

佳織は口をへの字に曲げてテーブルに突っ伏した。

「私さー、春休みの間、バイトしてたの」

「え？ アルバイト？」

千穂は驚いた。

笹幡北高校は学生のアルバイトを禁じていないので、千穂も話だけなら、アルバイトをしているクラスメイトがいることは知っていた。

しかし他でもない佳織が、となると、千穂は興味をそそられる。

「え、どんなアルバイトしてたの？　なんでなんで？」

思わず身を乗り出して尋ねると、佳織は少し恥ずかしそうにはにかんだ。

「はら、私ささちーほど弓うまくないからさ、矢とかしよっちゅう曲げちゃうし、弦とかのお金もバカにならないじゃん」

「や、別にそんな、私だってそんなにうまくないよ」

千穂としては、課題でなく本気でそう考えていた。最近ようやく近的と呼ばれる競技用の距離的の矢が真っ直ぐ「当たる」程度で、意識して「中る」レベルにはとても達していない。と思っている。

二年生部員とはいえ義弥を含めた三人とも昨年始めた初心者であることに代わりはなく、実力の差はそんなに無い。

「いや、でもささちー、巻き薬で矢、ほとんど曲げなくなってるじゃん」

佳織は右手で巻き薬練習のモーションをジェスチャーしながら言った。

巻き藁を用いた稽古は的より簡単そうに見えて、さちんと中らないと安い矢は案外簡単に曲がつてしまう。

「それに部で用意してもらってる練習用の矢、微妙に矢尺が合わないんだ。だから自分に合う道具が欲しくてバイトしててさ……それでごめんね、教えてもらったこと、復習できなくて」「そっかー……何かごめんね、知らずに」

最初の驚きが引くと、今度は佳織に対してある種の憧憬を抱いてしまう千穂。

アルバイトを経験したことのない千穂には、それだけでなんだか佳織がちよっと大人に見えた。

「いいっていいって、私の都合だもん。さきちーは練習用でさちんと上達してんだから、やっぱ私と出来が違うんだって」

「そんなこと……」

冗談でなく、弓道を続けるにはお金がかかる。

道具を揃えるだけで学生レベルでも五万円は必要になると言われ、千穂も最初は二の足を踏んだ。

千穂の環境ではそんな大金は、親に出してもらわねばとても入部までに工面できるものではなかったからだ。

だが、警察官である千穂の父・千一は、娘が心身を鍛える武道部を志すことが嬉しかった

らしく、意を決して相談した千穂に、二つ返事で弓道部入部を承諾してくれて、弓道具店で一式を買い揃えてくれた。

それでも千穂は「安いのでいい」と言ったのだが、警察官であるが故に剣道の有段者である父は、

「最初に安すぎる物を使うとそれだけ後の成長が遅くなる」

と言って、スタンダードな価格帯の中でも最上級の道具を用意してくれたのだ。

千穂は父の心遣いに感謝して、全ての道具を大切に扱い、メンテナンスも欠かさなかった。それでも佳織の言う通り、弓弦や矢は基本的に消耗品で、メンテナンスのためのランニングコストもバカにならない。

壊れにくいジュラルミン製の矢、というのものもあるにはあるが、弓の張力や体格、矢自体の重さに対するバランス感覚は人それぞれのため、一概にお金がかからない弓具を揃えることは、なかなか難しいのだ。

「……でも、偉いなあかお」

「何が？」

「私、自分に合う道具のために働いてお金稼ごうなんて考えたこともなかった」

千穂が弓道部を離れたのは、言ってしまうえば単純に格好が良いと思ったからだだった。

中学生時代に所属していた合唱部が管轄北高校に無かった、というのも大きな理由の一つで

はあるが、それ以上に一年次の新入生部活動誘の期間に見た、当時の三年生の部長の立射の基
本姿勢「会」を見てシビれてしまったのだ。

演武を行った先輩の持っていた弓は、千穂達が使っているカーボンファイバー製ではなく、
素材の持つ白さが弓の芯から滲み出るような、美しい竹弓だった。

「あんま褒めないで。結局もうやめちゃったんだから」

ちょっとだけ昔を思い出していた千穂に、佳織は気まずそうに言う。

「短期とか日払いとかだったの？」

アルバイトにどのような勤務体系があるのか詳しく知らない千穂はなんとなくろ覚えの單
語で尋ねるが、

「ううん。しんどくてやめたの。ファミレス」

佳織はオレンジジュースをすすりながら淡い顔をして答えた。

「ファミレス？」

一口にファミリーストランと言っても、鶴ヶ谷や篠塚の周辺には、大規模チェーンの他に
も無数の飲食店がある。

「根性無いか思われなくなかったけど、あれはマジで無理だった。お客怖いし」

「そうなの？」

「や、ほとんど物覚えられてない三回目くらいからもう戦力に数えられてて。ハンディってあ

るでしょ？ 注文取るときに使う機械。あれ凄くいっぱいキーがあつて、一つのボタンに四つくらいメニューが割り当てられてるのね。それが初目と三目目で春フェアが始まったからとかで丸々変わつてて、注文とか取るのめっちゃ時間がかつて」

「へえ……でも、最初の頃って研修中って名札つけるんじゃないの？」

千穂は随分前に行つたファミレスの記憶を引き出してそう言つた。

すると佳織は物凄く顔で首を横に振る。

「お客には関係無いんだってそんなの。ささちーだつてさっきそれ注文したとき、店員の名札とかいちいち見てないでしょ？」

「ううん、見たよ？ あの黒髪の男の人。なんて読むか分からないけど、真実の「真」に

「真」って苗字。Bクルーって書いてあつた」

千穂は自分の注文を取つた、テレビCMかと思うほど模範的な「マダロナルドの店員」を地で行く黒髪の男性店員を遠目に見る。

「……ささちーは特別。普通見ないから」

佳織はどうしてか千穂を呆れた感じで見る。

「とにかくさ、研修中なんだから私にバスタに何が入ってるかとかパフェのカロリーとか聞いたって分かるわけじゃない？ 見てないのよ」

「でもそういうのって、普通メニュー表とかに書いてあるよね」

千穂が何気ない調子でそう言うのと、突然佳織はテーブル越しに乗り出して、得たりという様子で千穂の鼻先に指を突きつけた。

「でしょ!? そう思うでしょ? 見ないの! メニュー表全然見ずに『この店何があるの』とかマジ意味分かんない」

「へえ……そうなんだ。でも、そういう人ってそんなにいるのかな? 私自分が買い物するときとかご飯食べるときとか見たことな……」

佳織の言うことに実感が持てない千穂がそう言うのと、佳織はより一層身乗り出してきた。「六時間ぶっ続けていてみなって? 毎日いるもん。それくらいならまだマシで、ドリンクバーが無料だと思ってるお客が勝手にいつでたから丁寧に注意したら逆ギレされたりとか、前食べたときと風が違うとか、そんなこと私に言っただうするんだってのよ」

佳織の勢いはとどまるところを知らず、千穂はただ相槌を打つことしかできなくなる。

「一番困ったのがさ、ランチのピークで満席でさ、待ってる人が結構いるときに入ってきたサラーマンに、私言っただの。ただいま満席でして、順番にお待ちいただいておりますって。したらさ、その人『待つのか? なんで?』とか言い出すんだよ? 意味分かんないか?」

「……それは凄いな」

俄には信じがたい話ではあるが、佳織は話を大げさに脚色する性格ではないので、そのサラリーマン氏は実在していたのだろう。

「でしょ？ 日本語通じてないから私もワケわかんなくて思わず黙っちゃってさ、したら超機嫌悪そうな声で『店長呼んで』だよ。仕方ないから店長呼びに言ったら超忙しい時間だから店長まで私にキレるし」

「ええ？」

「んで店長いなくなつてホールが私ともう一人の先輩だけになつてさ。私がいたトコ、デサートだけはキッチンじゃなくてホールスタッフが用意するのね。そしたらいきなり何も教わつてないのにマニユアルだけ渡されて私にバフエ作れとか言つてきて、できるわけないじゃん？ とこに何があるかも分らないのにさ」

佳織は止まらない。他にも教わつていないことをやらされて、当然のように失敗して怒られたり、底意地の悪い先輩がヒマなはずなのにサポートをしてくれなかったりと、とにかくアルバイト先に良い思い出が無いようだった。

それで耐え切れなくなつて辞めた、とのことだったが、千穂はふと澤かんだ疑問を佳織に尋ねた。

「それってお給料ちゃんと出るの？ 一か月経たずに辞めちゃったんでしょ？」

「……応出るっぽいよ？ でも研修時給中で、半月くらいで辞めたからそんな入らないけど。あー、もうマジ最悪だー！」

もう食べ終わってしまったマタロナルドのトレーをテーブルの脇に避けて、佳織は大げさに

ソファにのけぞる。

と、そのとき、

「お客様、お済みでしたらこちら、お預かりしてよろしいでしょうか」

二人のチャープルに声がかかる。

千穂も佳織も、何気なく顔を上げて息を呑む。

一人、他の店員とは違った制服を着た、美女、としか言いようのない人物が立っていた。背が高く、陶器（とけい）のような肌は艶（つや）めいて、よく通る低い声が魅力的な、ファッションモデルのような女性だった。

佳織との話の後だった千穂は思わず胸元の名札を見ると、「店長・本崎」と書いてある。ささき、だろうか、ささき、だろうか。

姿勢も美しい店長は、呆然（ぼうぜん）と鎮（しず）く佳織のトレーを丁寧に下げると、一礼して戻っていった。千穂のトレーにはポテトとドリンクがそこそこ残っているのです、まだしばらくは長居をしても良心は痛まないだろう。

「はー、廻（まわ）されーだったね」

佳織はまだ先ほどの店長の背中を追っている。

「あんな店長なら長続きしたかなー。私のバイト先の店長、店に客がいないと全然働かなかったからなー。そのくせ私達に、ヒマな時間も考えて仕事見つけろとか言うんだもん。自分も働

けよって」

店長がカウンターの向こうに姿を消してから、住織はようやく千穂の方に向き直る。

千穂は苦笑して答えた。

「でもさ、レストランとかコンビニの社員って、凄く業務がよく調くから、やっぱりアルバイトに分からない仕事とかしてるんじゃないのかな。アルバイトしたことない私が言うのもおかしいかもだけど」

「そうかねー。でもしよっちゅうマネージャーとかに怒られてたから、やっぱやる気無かったんじゃないかなって思うけど。ま、いーやもう！ 私は絶対ファミレスには就職しない！」

住織は高らかに宣言すると、やおら学校のサブバッグの中からプリントの束を取り出した。

「大体さ、進路とか今から言われたって分からなくない？」

それは千穂が安藤教諭から配布を頼まれた生徒、担任、保護者を交えた三者面談のお知らせのプリントと一緒に渡じられていたアンケートだった。

進路相談のアンケートというだけあって、高校を卒業したら大学や専門学校に進学するのか、それとも就職するのかを選び、その理由を書くことになっていて、それを今月末の三者面談の参考資料にするらしい。

「ささちーは絶対大学でしょ？」

「うーん……多分……」

佳織の問いに、千穂は曖昧に頷く。

千穂も二年生になったばかりで卒業後の進路を考えなければいけないのかと少し憂鬱になっているのだ。

「義務は絶対大学とか無理だから就職だろうけど、私はどうしようかな。フアミレスが無いってことだけは確実なんだけど。でも理由とか……。大学進学するにしても、何を学びたいのか分からないよね」

千穂も、佳織と全く同じ気持ちだった。

大学なんて、東大とか京大とか超有名大学以外は、父が正月に見ている駅伝で上位になるような名前しかばつと思ひ浮かぶものが無い。

かと言つてアルバイト経験すら無いのに就職なんて大学よりもっと分からない。

「あー、でもささちーおっぱいでかいし可愛いし、原宿とか歩いたら芸能スカウトとかあるんじゃない？ 芸能界とか書いちゃえぼ？」

突然、佳織がふざけた調子でそんなことを言ってきた。

「あのね……」

佳織に胸のことをからかわれるのは千穂にとって日常茶飯事だ。

女子の友人になにかとやつかまれる千穂のバストだが、本人は胸が大きくて得なことなど何一つ無いと本気で思っていた。

矢を射るときも射形が乱れると弦が当たると、下着だって母に買ってもらうのが申し訳なくなるほど高い上に全然可愛いのが無い。

肩こりはまだ経験したことがないが、気に入った服を見つけても、ブラウスでは肩や袖のサイズが合っても胸があるせいでボタンを閉められなかったり、ボタンとボタンの間が浮いて中が見えてしまつて結局諦めたりなどということがしょっちゅうだ。

「そんなのあるわけないよ。真面目に考えようよ。親にも見られちゃうんだから」

千穂は真顔で佳織の唇口をスルーすると、自分も靴の中から同じプリントの靴を取り出して眺めはじめた。

「親に見られんの忘れてたー!! 何書けばいいのかますます分かんない!」

佳織は頭を掻き回してしまふ。

アンケートの志望理由を書く欄はかなり大きく取られている。それを見た千穂は、作文の課題は指定字数の八割以上を埋める、という基本を思い出し、一緒に頭を抱えたくなった。

中学生のときにも感じた、進路、という単語の狭みどころの無さに千穂の気持ちちはもやもやしてくる。

千穂が筑幡北高校を受験したのは、単純に学力に合つて、家から近いというだけのことです。この高校で特別な何かを学ぼうと思つたわけではない。

実際に中学のときの進路指導アンケートでは男塾止直にそう書いて、担任の先生に、もっと

それらしい理由を書け、と言われてしまった。

佳織の言うことではないが、芸能界とかスポーツ選手とか書いて、親や先生に「バカみたいな夢を見るな」と言われた生徒もいたと記憶している。

その朝に巷間で、

「なりたい職業一位が公務員とか夢が無い」

みたいな言われ方をするのは、どうにも納得がいかなかった。

夢を見れば馬鹿にするくせに、と思う。

それに警察官という公務員である父親を持つ千穂にしてみれば、「公務員に夢が無い」という話は父親の職業を真剣に目指す人を馬鹿にしているようにも思えて、ますます大人の言う「進路」が何を意味するのか分からなくなるのだ。

「かと言って、私自身、将来何をしたいとか無いんだけどね」

「ん？ どしたの？」

「んん、なんでもない」

大人の世界の理不尽さに腹立たしい思いを抱くことはあるが、じゃあお前に何か立派な志があるのかと言われると困ってしまう。

実際、無いし、と千穂は思う。

大学を卒業すればいい会社に入れる、と誰もが言うが、これだけ毎日色々なニュースで不況

不況就職難を脱却のように聞かされれば、女子高生でもテストの点数がいいから会社に入れるわけではないことくらいは分かる。

ネットを見れば、訳知り顔で大学の勉強は社会の役には立たないなどと言っている人にも出くわす。

じゃあなぜ世の会社は高いレベルの大学卒を採用したがるのかと思うと、ますます進路ってなんなのだろうと訳が分からなくなる。

千穂はプリントをテーブルの隅に置いてドリンクの紙コップを取り、羽根を寄せた可愛くないだらう顔で中身をすすろうとした。

そのとき、プリントのすぐ下のトレーの広告紙の隅に目が留まった。

「……アルバイトクルー、募集」

マダロナルドのトレーベーパーに必ず印刷されている、バイトスタッフの募集広告だった。

「ささちー？」

「……かおはき、アルバイトして、学校に通ってるだけじゃ分からない社会のことを知ったんだよね？」

「そんなんじゃないよ。働くのがしんどくてめんどいってことくらいしか分からなかったというか……」

それは確かにそうだろうが、今まで両親に何不自由なく育てられきた千穂にしてみれば、自

分の知らない世界をわずかでも見てきた住織は、少しか自分より大人の世界に近い場所にいるように見えた。

「これ、私もアルバイトでもすれば、ちよつとは進路とか働くとか分かるようになるのかな……」

千穂がマグロナルドのアルバイト募集広告を指差すと住織は目を斜(よこ)みて大声を上げた。

「ええ!? やめとけて、やめといたほうがいいって。私の言ったこと聞いてた!?」

「いやでも……それだけじゃなくて、かおが言っていたいい道具を買うためとかさ……」

「そりや確かに親に毎回矢のお金出してもらうのは悪いとは思うけどさ、こればかりは仕方ないし、バイトとかささちーの成績だったらそれこそ大学入ってからでも遅くないじゃん」

「うーん、それはそうなんだけど……」

胸裏に浮かぶのは、卒業した先輩が持っていた白い竹の弓と竹の矢。

もちろん先輩は毎回そればかり使っていたわけではなかったけれども、働いてお金を稼げれば、あの美しい弓に近づけるかもしれない。

それで少しは働くということが分ければ一石二鳥ではないだろうか。

「ささちー頭いいんだし、お小遣(こづかい)いだって足りないわけじゃないでしょ? ささちー賢(めい)識(し)とかしないし」

住織は、かなり本気で止めに來ている。

「焦ってるわけじゃないけど……」

佳織や義弥が褒めてくれる学校の成績だって、学年五本指、というようなレベルでは到底ない。

何か新しいことをしたい、という焦りが心のどこかにあることは否定できなかった。と、そのとき、

「あっー」

考え事をしていたおかげで周囲が見えていなかった千穂は、思わず大声を上げてしまう。

二人の席のすぐそばを通りがかったサラリーマンの靴が、肩の紐が捻じれていたのか大きくテーブルの上に大きく張り出してきて、千穂が手に持っていたドリントの紙コップにぶつかったのだ。

痛みは無かったけれども、驚きと衝撃で紙コップから手を離してしまった。

長居のおかげで紙のカップがわずかに柔らかくなっていたのと高い所から落とされたせいであっさり蓋が取れてしまい、零れたコーラが一瞬でテーブルの隅のプリントをコーラ浸しにしてしまった。

「オウー」

サラリーマンの方も自分の失敗に気づいたようだが、ショックはそれで終わらなかった。

二人が顔を上げると、そこにいたのはどう見ても日本人ではなかったのだ。

髪を書えた格好のいい白人の男性で、二人に向かつてしきりに何かを言っているのだが、大切なプリントを汚してしまったせいで、千穂は全くそれに対応できなかった。

「ど、ど、どうしよう」

「さ、ささちー大丈夫？ あ、えっと……」

佳織が心配してくれるが、その外人の言葉が分からないのは佳織も同じ。

「うわ、プリントが……どうしよう、ってか、どうする？」

「――」

千穂も佳織も、そして白人男性も大変なことになっているのが分かっているのだが、お互いに意思の疎通ができては、どうしようもない。

男性は困った末に千穂にハンカチを差し出してきたが、服が汚れたならともかく、紙がコーラに浸ってしまったてはハンカチではどうにもならない。

何をどうしたらいいのか、どうするべきなのか、目の前の事態をどういう順番で処理していくべきなのか分からず呆然としてしまった千穂達を救ったのは、

「お客様、どうかされましたか？」

そんな、若い男の声だった。

聞き覚えのある声に千穂が顔を上げると、先ほど千穂が注文をしたレジの黒髪の男性店員が駆け寄ってきた。佳織と白人男性の間から顔をのぞかせ、テーブルの上で油を作っているコー

ラを見て目を見開き、千穂を氣遣^{きよ}ってくる。

「大丈夫ですか？ 服が汚れたりは……」

「あ、あの、大丈夫……」

「や、ささちー大丈夫じゃないって、プリントどうするのさ」

そこでしょうやく佳織^{よし}が、コーラの池から千穂のプリントを拾い上げた。

「で、でも仕方ないよ、こうなっちゃったらタオルとか借りても……」

水分を吸ってすっかり汚れてタタってしまった紙を絶望的な気分で見えていたときだった。

――！――

白人男性が、また何かを言い出す。だが、英語だということとは分かってても、会話などできるはずもなく何を言っているかさっぱり分からない。謝っているのならもうどうにもならないから、いいですと言おうとしたときだった。

「こちらの方が、お詫^{わがや}びをしたいと仰^{おほ}っていますが……」

『真風』という読み方の分からない名札を付けた店員が、千穂に向かって突然そんなことを言い出した。

「え……？」

――！――

「私の不注意で申し訳ない。何かお詫^{わがや}びをさせてくださいと仰^{おほ}っています。その書類は、学校

関係のものですか?」

「そうです。学校の進路相談のプリントで」

驚きで声の出ない千穂の代わりに佳織が答えると、店員は少し驚いた顔で千穂と佳織の顔を交互に見てから、

「That is her student document which is suitable for counselling」

突然流暢な英語で白人男性に話しはじめた。

「Oh……really?」

それを聞いた白人男性は、大仰な仕草で顔を覆う。

「失礼ですが、お連れ様のそちらの書類、内容は同じものではありませんか?」

「え? あ、そ、そうですけど、なんで?」

佳織の疑問に、店員は申し訳なさそうに答える。

「失礼とは思いましたが、お客様の声がレジの方まで届いております……聞こえてしまった、というのが本音ですが」

「う、うるさくしてすいません」

千穂はその言葉になぜだか妙に恥ずかしくなって、思わずお詫びしてしまう。

店員は柔和な笑顔で首を横に振ると、

「いかがでしょうか? 拝見したところ紙は普通のコピー用紙のようです。お連れ様の書類が未

記入状態なら、それをお借りして、すぐ近くのコンビニでコピーするというのは……」

「ああ」

「ああ……」

千穂も佳織も、思わず口を開けて頷く。考えてみれば簡単なことなのだが、そんなことすら思いつかないほど二人とも予想外の事態に慌てていたのだ。

「Sir, her friend has a blank document. Would you copy this by a pay copier?」

店員が何かを言うと、白人男性は指手を上げて頷き、また何事かを言う。

「また汚しては大変なので、お友達にコンビニまでついてきていただきたいそうです。僕も一緒に絡みますので、お手数ですがご足労をお願いできますでしょうか」

「あ、はい、いいですよ」

佳織は大分落ち着いてきたようで、店員に頷くとプリントを持って席を立つ。

「コピー代はそのおじさんが出してくれるんですよね？」

「なんなら百枚でもコピーすると割っています」

店員の最後の通訳内容は、いかにも外人らしいジョークだと千穂にも分かった。

「すぐ行ってくるから、ちょっと待っていて」

「店長、お客様の御用で、外に出ています」

佳織は千穂に、店員はカウンターの中にいた先ほどの女性店員に声をかけて、三人連れ たつ

てお店を出ていった。

あの読み方の分らない「真実」という店員のおかげで、当初のバニツクが嘘のように話がスムーズに進んだ。なんとかプリントが戻ってきそうだ。それで胸を撫で下ろした千穂だが、事態はそれだけで終わらなかった。

「お客様、失礼いたします」

あの美人店長が千穂の所まで来て声をかけてきて、綺麗な角度で一礼したのだ。

「お召し物は汚れてはいませんか？」

「あ、は、はい、服は大丈夫です」

「安心いたしました。とはいえ、お食事をお楽しみのところ大変失礼をいたしました。よろしければドリンクとポテトを新しいものとお取り替え致しますが、いかがでしょうか？」

「え、そ、そんな」

千穂は今度こそ驚いた。

なぜなら、店側が謝るようなことは何も起こっていない。

むしろあの「真実」氏がいてくれたおかげで、白人男性がお詫びしてくれていることが分かった上、プリントも無事戻ってきそうなのだから、こちらがお礼を言わなければならないと思っていたのだ。

その上コーラとポテトを新しいものに取り替えてもらってしまっでは、あまりに悪い。

そう思ったままを告げた千穂だが、店長の女性は柔和な笑顔で首を横に振る。

「私共の仕事はお客様が店内で気持ち良く食事をしていただく環境を作ることです。ですから店内でのお客様同士のトラブルを可能な限り防ぐのは私共の仕事であり責任です。真奥……先ほどのクルーがお客様の問題を解決するのは当然のことです」

あの男性店員の名は「まおう」とさんと読むんだ。千穂は思わず三人が出ていった店の入り口を振り返る。

「むしろお友達の方にご面倒をおかけして、心苦しく思っております。もし今日はもうお帰りになられるのであれば、次回お越しの際に本日のレシートをお持ちいただければ、同等の商品と交換していただくこともできますが、いかがいたしましょうか」

淀みのない、真摯で真っ直ぐな言葉。

このときの千穂はもう、起こったトラブルよりも、状況を的確に判断し流暢な英語で場を治めた真奥という店員と、うわべだけでない、本当に自分のことを思ってお詫びをしてくれていると分かる店長の人柄に感動してしまっていた。

佳織の元アルバイト先を悪く言うつもりはないが、この二人が働いているこのお店の空気は、少なくとも佳織が経験した、仲間であるはずの職場の人達から不愉快な思いをさせられるようなことはないような気がした。

何より、マダロナルドの店員の仕事はハンバーガーを作っただけだと思っていた千穂に

は、「環境を作ることが仕事」という店長の言葉がとても新鮮に響いた。

「レシート……」

千穂は先ほど無意識に財布にしまったレシートを取り出して印刷された内容を見る。

そして、そこにある文面を発見した。

「そうです。そちらをお持ちいただければいつでも……」

店長は千穂のレシートを指し示して説明をしようとしたが、気がつくとも千穂は全く別のことを尋ねていた。

レシートの一番下に表示されている、電話番号と、クルー募集の文字。

「あの」

「はい、なんででしょう？」

このとき、店長に向けたこの言葉が、千穂のその後の、大げさに言ってしまった運命を、大きく変える一言になった。

「これって、このお店の電話番号ですよね？」

※

「マッダでバイトするう?」

「だからかお！ 声が大きいつて！」

「え、佐々木、バイトすんの？」

翌日登校した千穂は、佳織と義弥に幡ヶ谷駅前のマグロナルドのアルバイト募集広告に応募したことを話した。

すると当然のように二人共大仰に驚いて身を乗り出してきた。

「え、だって昨日あんなことあったのに？」

「あれはお店は関係ないよ。あのおじさんだって何回も謝ってくれたし」

「えし、私知らないよ？ ちゃんと言ったよ？ 当たり前悪い目とか精神病むからね？」

「シヨージと佐々木は出来が違うだろうがよ。それよりもし佐々木が採用されたら食いに行こうぜ」

「うっわ義弥、あんたがそれ言う？ 言っちゃう？ 出来が違うとかどの口が言う？」

千穂は、自分を挟んで義弥に掴みかかろうとする佳織を押さえようとする、

「でも、なんでいきなりバイトとかしようと思ったんだ？」

義弥がそう尋ねてきた。

千穂は、義弥を威嚇する佳織を宥めながら答える。

「昨日の進路のプリントあったでしょ？ 今のままじゃ正直進路相談なんかで私、何か実のある話ができると思えなかったの。それでもし自分で働いてお金を稼いだら、少しは会社とか仕

事とか、分かるような気がして」

「無いと思うけどな」

アルバイトで苦い経験をしている佳織は洗^しい顔。千穂はそれに苦笑で返す。

「あとは、かおと同じ動機。やっぱりお金は欲しいもん。弓道具もそうだし、他にも色々」

「だよな。俺も金欲し」

「義弥、あんたがバイトなんか始めたら、赤字二つじや済まないでしょ」

「……ま、そりやそうかもしれないけどさ」

佳織の辛辣^{しんせき}な一言を、普段だったら軽く流すはずの義弥が、このときだけは妙^{たふ}に真面目^{まじめ}な顔だったのが一瞬^{しゅん}気になった。

「別に赤字が二つだろうが二十個だろうが、それで俺を怒るのなんかお前らだけだしな。正直道路のことですこまで真面目になれる佐々木が羨^{うらやま}ましいよ」

「……江村君？」

「私達が怒るのが分かってんなら、少しは真面目に勉強しろって」

千穂は、義弥が少しだけ寂しそうな顔をしたのが気になったが、佳織はいつもの調子で義弥を窘^{こづ}めている。

「別にお前らが俺の三者面談来るわけじゃねーしな。あー、俺の親、本当に三者面談来るのかな？」

「え？ どういうこと？」

進路指導に力を入れている笹幡北高では、ある程度日数に幅を持たせてはいるものの、三者面談への保護者の参加は半ば強制だ。

「や、うちの親、俺に興味ねーからさ」

「え？」

「は？」

早口に言った義孝の言葉の意味を掴みかねた二人は思わず尋ね返すが、

「それより佐々木、もし採用されたらさ、俺とショーギーと、クラスの奴何人かで押しかけっからよろしくな」

「は？ 何言ってるの江村君！」

「いや、友達が働いてるところとかなかなか見らんねーじゃん？ ショーギーはバイト先選に教えてくれなかったしよ」

「義孝がそういうことしちゃうだと思っただから教えなかったの。ただでさえストレス溜まるのに、義孝に働いてるとこ見られるとか有り得ないし」

「え、ちよ、で、でもまだ採用されるって決まったわけじゃないし」

千穂は思わずしどろもどろになってしまう。

考えてみれば、あのマダロナルドには、千穂達以外にも笹幡北高校の生徒が寄り道している。

普段の学校と違う姿を友達に見られる、という状況は、理由は分らないが、なんだか妙に恥はづかずかしい気がしてきた。

「あーあ、義妹なんかに話したのが運の尽つきだよささちー」

「い、いいもん見られたって！ 私は採用されたらさちんと仕事するんだから！」

「よっしや決まった。じゃ、採用されたら教えるよなー」

なんだか妙なことになるってしまった。

千穂は迂闊うかつな言動を後悔したが、それでもアルバイトするという決心を変える気はないのだから。

昨日増宅してすぐに連絡すると、電話口に出た木崎店長は少しだけ驚いた様子だった。

そして昨日の今日で、すぐに面接の約束を取り付けた。

両親からの許可は、

「今の学校の成績を維持するなら」

という条件で既にもらってある。

千穂は、電話する前から文房具屋で買い求め、夜中まで悩んで見本を何度も見ながら書いた履歴書の入ったバッグに、思わず手を当てていた。

先にその人柄に触れていたからだろうか。

夕方、面接してくれた店長に対して、必要以上に緊張することはなかった。

お客として来たらまず入ることのないスタッフルームの中での一対一の面接。

店長の木崎真弓は、お客に接するのとは変わらない敬語で千穂に対して改めて自己紹介をしてくれた。

そして、

「少しの間、履歴書を拝見します」

と、千穂が提出した履歴書に目を通しはじめる。

内容に間違いやおかしなところが無いだろうかと、このとき初めて千穂は、緊張して鼓動が早くなるのを感じた。

「……なるほど」

十分ほど時間をかけた木崎店長は、一つ傾くと履歴書をデスクの上に置く。

「佐々木さん」

「は、はいっ？」



「志望動機のところは、アルバイトを通じて社会経験を積みたい、と書いておりましたが」

「あ、は、はい。何か問題が」

「いえ、問題ということではなく」

本崎店長は千穂の目を真っ直ぐ見て、予想しなかった質問を投げかけてきた。

「何か、社会経験を積む必要に迫られているのですか？」

「えっ……？ ひ、必要？」

千穂は混乱した。

動機欄に書くくらいだから、社会経験を積むことそのものが目的だったのだ。

混乱が顔に出ているのか、本崎店長は少し微笑みながら続けた。

「いえ、篠塚北は周辺の都立高の中では学力の高い方ですし、部活も運動部でいらっしゃる。

どうしてわざわざ勉強や学校生活以外に自分の時間を拘束して、苦勞の多いアルバイトをして

まで社会経験を積む必要があったのかと思ひまして」

「えっと……」

「ここには私と先々木さんしかいません。もしよろしければ、伺いたいのですが」

「……」

本崎店長は、古い事務椅子を軋ませて千穂に向き直ると、少しだけ顔を近づけてきた。

その目を見て、千穂は、ほんの少しだけ、質問の意図が分かった気がした。

「進路……」

「はい」

「進路に、悩んでいるんです」

「進路ですか。進学するとか就職するとか」

「はい。友達が、アルバイトをした話を聞いて、私が学校で勉強しているだけじゃ見る事ができないことを沢山話してくれたんです。中学生から今まで学校の勉強してても、結局進路っていうものがなんなのか、考えれば考えるほど分からなくなつて、そしたら昨日、店長さんが」

「私が？」

「『環境を作る』ことが仕事』って言つてくださつて、それで私、今までマダロナルドはハンバーガーを売るお店、としか思つてなかったんですけど、お仕事するって、普段見えているよりずっと何かが、広いことをするってことなんだなつて思つて、うまく、言えないですけど」

千穂は、今自分が感じている以上に多分全然きちんと話せていないだろうことを自覚していた。

それでも木崎店長は、千穂を急かすことなくただ頷いている。

「それで、働くことってなんだろうって思つたときに、店長さんに、レシートを持ってくれば同じくらいのもので交換するって言ってもらつて、私がハンバーガーを買うのに払つたお金が、商品以外のところでも返つてきてるって思つて、で、お金つて思つたときに」

頭に血が上っていたのだと思う。

学校のこと、進路のこと、友達のこと、部活のこと、家族のこと、色々なことが頭を巡って、何が大切なことなのか分からなくなる。

「自分で働いてお金を稼ぐってことが分かれればそれがどういう形か分かりませんが、社会経験になるんじゃないかなって。だから、とりあえず、その」

千穂は落ち着きなくそわそわと手足を動かしながら、大声で言った。

「働いて、お金を稼ぎたいんです」

「……なるほど」

そのとき、木崎店長がなせかにやりと笑った気がした。

「これは雑談ですが、稼いだお金の使い道をどうするか、お考えですか？」

「っ、使い道ですか？ えーと、お金が溜まったらいいい弓が欲しい、と思います。後は矢を」

「矢？ 私は弓道には疎いのですが、あの矢は使い捨てなのですか？」

「いえ、そういう訳じゃないんですけど、練習で折れたり曲がったりするともう使えなくなっちゃうんで、何度も買い足す必要があるんです。ただでさえお金がかかる競技なのに、その度に両親にお小遣いをもらうのも申し訳ないですし、それに矢も自分に合う合わないがあつて、自分でお金を稼いでいれば、いい道具も気兼ねなく選べると思って……」

その後しばらく、木崎店長が弓道についてあれこれ質問して千穂がそれに答えるという面接

というより雑談のような時間が続き、四十分ほどで面接の時間が終わった。

「では佐々木さん、今日はお越しくださってありがとうございます。結果は二、三日のうちに電話させていただきます」

「こちらこそ、ありがとうございました。失礼します」

立ち上がり、一礼してからスタッフルームを出ようとして、足が少し震えていることに気づいた。

それでもなんとかドアを開けて外に出ると、

「あ、どうも」

そこには、昨日お世話になった真美という店員がいて、千穂に目礼してくれた。

「驚きました。昨日の今日でアルバイトに応募してくるなんて」

屈託のない笑顔。歓迎してくれているのだろうか。

「はい、どうも……」

でも、面接が終わったことで緊張の糸が切れた千穂は、ほとんど通り一遍の挨拶しかできなかった。

「採用されるといいですね。またお越しください」

帰り際そう声をかけてくれて、千穂はなんとか頭を下げることができた。

店を出てしばらくふらふらした足取りで歩き、店が見えなくなる頃、千穂は頭を抱えて歩道

にしゃがみ込んでしまった。

「絶対ダメだあり……」

自分でも、お金を稼ぎたい、は無いだろうと思った。

店から出たここまでの時間で、どう考えても言う必要の無いことばかり言っ、言うべきことを言えなかったという後悔が滲く。

何よりお金や欲しいものをあげっぴろげにしてしまったことが悔やまれた。

絶対に悪い印象を持たれたと思う。

なんとか持ち前の礼儀正しきで押し切ろうと思ったが、やはり社会人相手には自分も所詮『今時の若者』の範疇を抜け出していないと思い知らされた。

「はあ……しばらく、寄り道できないな」

面接を落とされた店にまた客として行くような度胸は自分には無い。

佳織には明日にでも、違う寄り道先を提案しようか。

そんなネガティブなことばかり頭に渦巻かせながら、千穂はふらつく足取りで暗くなった帰り道をとぼとぼと歩いていった。

アルバイト志望の女子高生が帰ったマダロナルド幡ヶ谷駅前店の店内で、店長の木崎はどこか上機嫌だった。

「おいまーくん」

タルーの真奥に向かって声をかける。

「なんすか？」

「さっきの子、君に任す」

「早っ！ 採用ですか？」

「ああ、履歴書がごくありきたりだったから期待していなかっただけに、意外性があったって気に入った」

木崎の顔は終始笑顔だった。

「履歴書のことは、もう勘弁してくださいよ」

すると、なぜか真奥は洗った顔をやる。だが木崎は言葉を緩めない。

「諦めろ。志望動機に『うまい飯が食いたい』なんて書かれた履歴書を、私は生涯忘れんぞ」

「はは……でも、履歴書が普通だったってことは、面接が良かったってことですか？」

スタッフルームから出てきたあの女子高生は、真奥の目にはごく普通の少女に映ったが……。

「ああ、久しぶりにシフトに長く居ついてくれそうな学生だ。あまり厳しく指導するな」

「すげー！ 木崎さんから厳しくするなって、初めて聞いたかもしれないですよ俺」

これは予想以上の高評価だ。

「元々真面目そうな子だ。それにあの受け答えができるなら、特に厳しくする意味も無い」

「手放しですね」

「まあな。自分の望むところを綺麗事でごまかさないのが気に入った。というわけだから、明日からまた頼むぞ」

上機嫌な上司の背中を見ながら、真美は人知れず唸る。

「望むところか……世界征服とか書いたらフザけてると思われて絶対採用されないよな……」
その、どこか不穏な空気を伴うつぶやきを聞くのは、使い込まれたレジスターだけだった。

※

「で、どーなの、バイト二日目」

「ん……足が死にそう……うーあー」

千穂は自室のベッドの上で、佳織との電話中にもかかわらず思わず唸ってしまふ。

部活でそこそこ鍛えられていると思っていた足がパンパンに張っている。足先もふくらはぎも太ももも腫も、今まで経験したことのないダルさで、お風呂に浸かってすっかり揉んだはずなのに、全く疲れが取れた気がしない。

「立ちっぱだもんね。休憩とか無いの？」

「無いよ。働く時間そのものが短い」

「あーそっか、八時間以上働かないと休憩って無いんだっけ」

「うん、その辺の説明は初日にしてもらったけど……」

高校生は夜十時までしか働いてはいけなくて法律で決まっているらしく、相談の結果、平日は最大でも学校や部活が終わってから夜十時までの四時間。

土曜日曜は四〜六時間となった。

言いながら千穂は、アルバイト初日のことを思い出した。

まさかあんな受け答えをして、採用してもらえとは思わなかった。

あらかじめ爪をきちんと切ってくるよう言われたので、いつも以上に丁寧に手入れしてから指定された時間に、面接のときよりもずっと緊張しながら店に行くと、木崎店長から労働契約書と自分のサイズの制服を手渡された。

ゆったりしたデザインで、胸の部分が無暗に張ることもなくて一安心。

着替えてからスタンフルームにあった鏡で自分の姿を見たとき、いつもお客として見ていたマダロナルドの制服を自分が着ているのが、とても不思議な気がした。

「さて、ではこれから一緒に店の中を回って、設備がどうなっているのか、それぞれの場所でのどんな仕事があるのかを簡単に説明していきます」

本崎がそう言って、千穂は青紙を伸ばす。

「この店はそれほど大きくはないけれども、覚えることは沢山あります。だから……」

ここで佳織の体験談が頭をよぎった。一回で覚えられなかったら、後で怒られたりするのだろうか。一瞬不安になった。でも、

「それでも一度で覚えられる量ではないので、今はなんとなくこんな業務がある、程度の認識で構いません。必要ならメモを取ってもらっても構いません。佐々木さんの最初の仕事は、とにかく色々なことを覚えることです」

「は、はい……」

「では、ホールに出る際には必ず手洗いをさせていただきます、やり方を教えるのでまずは手洗いの水道から……」

そこから実際に店内を回って、機械の名前、場所の名前、間取り、それぞれの場所でのどんな仕事があるのか、物の置き場所などを順々に説明された。

手元のメモは走り書きの汚い字であつたという間にいっぱいになった。

何度も立ち寄ったはずの店の中には、新しい言葉、新しい習慣、見たことのない機械、聞いたことのない場所が溢れていた。

店の中の説明だけで一時間半、その後、基本的な挨拶などの練習をしたりして、初日の三時間はあるという間に過ぎた。

そして最後に、

「おい、まーくん」

木崎が、突然一人のクルーを手招きする（スタッフのことをクルーと呼ぶのも千穂には新鮮だった）。

見ると驚いたことに、やってきたのは千穂を助けてくれたあの真奥という男性クルーだった。

「あ、こないだの」

真奥は千穂のことを覚えていたらしく、明るい笑顔で帽子を取って会釈してくれた。

「きよふこ、あ、き、今日からこちらで働かせていただくことになりました！ 佐々木千穂と言います！ よろしくお願いします！」

初っ端、囁んだ。

恥ずかしさで顔が赤くなってしまうが、真奥は気にした様子もなく、

「真奥真夫です。佐々木さん、これからよろしくお願いします」

至極丁寧に挨拶を返してくれた。

英語対応や物腰からずっと年上なのかと思っていたが、こうして面と向かうと、存外に若いと千穂は感じた。

多分、大学生くらいではないだろうか。

「明日は私がいないので、彼に佐々木さんの面倒を見てもらうことになります」

本崎は千穂にとって先輩となる真奥の肩に手を置きながら、

「彼はもうこの店のことならなんでも知っているので、どんどん質問攻めにしてやって下さい」
後半はにやにやしながら言う。

「ブレッシャーでかいなあ」

真奥は困ったように笑って帽子を被り直した。

「間違ったことを教えていたら、ただではお勘ぞう」

どこまで本気が分らないが、さらに指導者役にブレッシャーをかける本崎。

だが真奥は真奥で、苦笑しつつも自信をのぞかせた顔で言った。

「大丈夫です。五十万人指揮すること考えれば、なんてことはありません」

「え？」

千穂は首を傾げた。五十万って？

すると本崎が、肩を練めて言う。

「まーくんは時々大言壮語する癖さえなくなれば、言うことはないのでがな」

今のは大言壮語というのだろうか。千穂はなぜか違う気がした。

「はは……でも今後、佐々木さんが長くこの店で働こうと思うなら、ちよつとでも分からない

ことは必ず俺でも、木崎さんでも、他の誰かにでも聞いてね。一回で覚えられなかったら二回、二回で覚えられなかったら三回、必ず質問してください。覚えられないからって怒るようなクルーはこの店にはいないから」

「は、はい……」

「万が一そのことで誰かに怒られたら、私に言ってください。そいつには……」

木崎の顔が、突然鬼の笑いになった。

「地獄を見せますから」

「わ！」

その恐ろしい微笑み（ニヤヤシ）について声を上げてしまう。

「今の木崎さんの言葉を分かり易く言うと、うる覚えで間違ったりお客さんに迷惑をかけるくらいなら、多少手間取ってでも分かる人に質問した方が、最終的にダメージは少なくなるから、本当になんでも何度でも、先輩には質問しなさいってこと」

真奥は木崎の笑顔（ニヤヤシ）に懐く（懐）千穂に苦笑しながらそう通訳する。

「この店の連中は、みんなそうやって仕事を覚えてきたから、皆聞いたことにはきちんと答えてくれるはずだよ」

「……分かりました。頑張ります」

木崎や真奥のクルーとしての仕事は、自分がお客の立場で肌身で感じていた。

その二人がこう言うからには、他のクルーの人達もきっと物凄く仕事ができるんだろう。二人が言ってくれたので焦る気持ちは無いが、それでもできるだけ早く、足を引っ張らなくなるよう、頑張りたいと千穂は思った。

「うっわー……何それ？ 天国？」

初日の話をする、佳織が真剣に羨ましそうな声を上げた。

「私なんか質問したら誰かに教わったでしょとか言われたのに」

「あはは……」

「で、初日がそれなら今日はどうだったの？」

「んーっと……」

初日は挨拶以外はほとんど勉強。

二回目の今日は、初めて仕事らしい仕事をさせてもらった。

「まだ商品には触らせてもらえないけど、今日はほとんど掃除してた」

「掃除？」

「うん、殺菌したダスターでトレイを全部磨いて、あとは卓配置を覚えるためにテーブルの拭

きあげとか、あとストローとか紙ナプキンとか持ち帰り用の袋とか、そういうのを倉庫から出してストックの棚を一杯にしておくの。ついでにそのストックの棚の掃除とか……」

「じゃゴミ捨てとかもか」

「ゴミ捨てはまだやらせてもらえないみたい」

「へ？」

「ゴミの分別、物凄く厳しいらしくて捨てられてるものは本当にすっかり分別しなきゃいけないの、あと、あのマッダのゴミ箱って入口近くにあるでしょ？ 入ってきたお客さんの案内とか、質問対応とかまたできないから、それはもうしばらく先みたい」

「……所変わればだね」

「でも……四時間立ちっぱなしって、やっぱり疲れるね。あ、あとかおが言ってた通り、一回だけ物凄く難しい質問された。結構大きく研修中って書かれたバッジ付けてたのに」

「早速食らったか。んで、それどうしたの？」

「うん、本当に忙しい時間以外は、その真裏先輩がつきつきりで教えてくれたから、その先輩か全部やっちゃった」

「ささちー、私と代われそこ」

佳織の口調はかなり本気だった。

「でもま、良さそうな感じじゃん。義姉じゃないけど、いずれ私もマッダのお姉さんになった

ささちーの仕事ぶりを拝見させてもらいに行こうかな」

「……お手柔らかにね」

その後、とりとめのないことをしばらく話してから電話を切った千穂は、佳織に話した「嬉しい質問」を思い出す。

それは、幡ヶ谷駅前店にバースデーケーキは置いてあるのかと、初老の男性に聞かれたときのことだった。

ハンバーガーチェーンのマドロナルドでケーキなど聞いたことがない。

教わったことではないが、それくらいの想像がついた千穂は思わずそう答えるようにして、

「申し訳ございません、当店ではバースデーパーティのご予約を承れませんので、バースデーケーキはお取り扱いしておりません」

横にいた真奥が、突然そう言い目を丸くした。

マドロナルドとバースデーパーティにバースデーケーキという言葉の組み合わせが千穂の仲で結びつかず、横には信じられなかった。

目を瞬かせる千穂を傍らに、真奥は続ける。

「二十三区内では、目黒区と杉並区に一店舗ずつ、パーティのご予約を承れる店がございます。

杉並の店舗は京王線沿線で比較的近くにありますので、店舗の電話番号をお持ちいたします」

真奥はそう言うときスタッフフルムへ駆け戻り、お客としても今まで千穂が見たことのないチ

ラシをその男性に手渡した。

お札を言つて帰る初老の男性を啞然として見送る千穂に、真央は、

「まあ、減多にあることじゃないけどね」

と言つて、お客に手渡したチラシと同じものを見せてくれた。

「予約制のコースデーパーティーってシステムがあるんだ。店舗が狭い都心より、郊外店舗のほうが多いんだけど」

チラシには小学校に上がるか上がらないかぐらいの子供と、店舗のタラーが一緒になってパーティーをしている写真が掲載されている。

「子供にとって、目に触れやすい所で働く大人は、やっぱり憧れになるらしくて、この制服の帽子とか結構喜ぶらしいんだ。まあ減多にある質問じやないから、そんなに気にする必要はないよ」

「……」

千穂はチラシを読んだまま、心の中で自分の軽率さを恥じた。

初老の男性がそんなことを聞いてくるなら、恐らく孫のためにマダロナルドでパーティーを開いてあげたいと思つていたのだろう。

千穂が迂闊に間違つたことを答えていたら、パーティーが開かれることは無くなつてしまったかもしれない。

「……だから、分からないことは質問しなきゃいけないんですよ」

「ん？」

「私、今まで自分が見たことなかったからって勝手に無いなんて思い込んで……」

「あー、まあ、俺も実際に自分で見たことはないけど……」

「すいません、次は気をつけます」

「そっか」

真央は小さく頷く。

「でも、そうやって自分で反省できるなら、逆にそれ以上落ち込まないようにな。心から反省したら、次は絶対に同じ失敗はしない」

「……はい」

「でも、だからってそうすぐに、完璧にできるようになるとも思わない方がいいよ」

「え？」

「だってさ、研修中から佐々木さんになんでも完璧にやられちゃったら、俺達立場無いじゃん。俺も本崎さんも他の皆も、皆誰かしらに迷惑かけながら仕事覚えてったんだから、最初は間違えて、それを反省するのも仕事の内。最終的に成長してればそれでいいんだよ」

あっさりと、それでも千穂を氣遣って言うてくれる言葉に、少しだけ気持ちが軽くなった。それでも真央は、千穂に努力を怠っていいと言ったわけではない。

「はい、でもお給料をもらったときに恥ずかしくないように、頼りはしても甘えないように頑

張ります」

そう自戒も込めて返すと、真奥は少し意外そうに眉を上げて、それから言った。

「木崎さんが、佐々木さんは長続きするって言ってた理由が、なんとなく分かった気がする」

「え？」

千穂は首を傾げた。

よく分からないけど、木崎店長が自分を評価してくれているのならそれは嬉しい。

そうやって、成果がほんの少しずつ、目や耳や体で理解できるようになる。

これが、働く、ということなのだろうか。

考え事をしながら、千穂の意識は徐々に徐々に眠りの方へと導かれ、

「……歯、磨かなきゃ」

携帯電話を手から取り落としそうになりながら、千穂は軋む体に鞭打ってベッドから起き上

がり、洗面所へと向かった。

※

千穂がアルバイトを始めて二週間ほど過ぎた。毎日働いているわけではないので、実際の出勤日数はようやく七回ほどだがそれでも自分では、最初の山は越えられたとも思う。

確かに疲れるし、楽しいことばかりではないが、それでも次回の出勤のことを考えて憂鬱（ウツ）になるようなことはない。

「でもなんか浮かない顔してんじやん」

そんな感想の割に千穂の顔が暗いのを気にした佳織（ヨシ）がそんなことを言った。

「うん……店長も先輩もいい人だし、でも今の悩みはそこが原因というか」

「どういうことよ？」

「うん……太っちゃうかも」

「は？」

初日を除く六回の出勤で、いずれの日も千穂は、マダロナルドのレギュラーメニューを夕食にすることを命じられていた。

マダロナルドのメニューは好きだし嫌い（イライラ）扱いでタダで食べさせてもらえるのはいいのだが、毎回だとさすがにカロリーが気になってくる。

「食べさせてもらえるのはありがたいけど、毎回はきつついね。なんでまたそんなこと」

「自分の扱ってる商品の味を知らずにお客さんに勧める（オウ）ことなんかできないってことらしいの。あんなにしょっちゅう行つてたのに、結構食べたことないの多くて……」

「あー……まあ高いのとか、朝メニューとかは私も食べたことないなあ」

佳織も理由は分かってくれたようで、大きく頷く（オウ）。

「でももちろんずっとじゃなくて、研修期間が終われば七掛け^{セブンパーセント}? とかでお金払うようになるって言ってたよ?」

自分にそのつもりがなくてもバイト先自慢になってはいけないので、取ってつけたようにそんなことを言う千穂。

七掛けとは、販売しているメニューを従業員が定価の三割引きで購入できるという意味だ。

「でもいいなあ。大当たりじゃん。店長も先輩も優しくして仕事できて、ご飯食べさせてもらえるんしょ? あー、そこなら私も長続きしたのかなー」

佳織は心底羨まし^{うらやま}そうに言ってから、

「それで? どう、バイトしてみて、進路の問題は少しは光が見えた?」

思い出したように悩ましい話題を振ってきた。

「……そっちはまだ……」

そういえば、当初は進路相談のアンケートに悩んで、それを解決する一つの手段としてアルバイトを始めたんだった。

振り返ると、出勤の度にいちいち進路のことを考えて働いている暇など無かった。

充実はしていたが、アルバイトを始めた根本的な動機、つまり将来の進路をどうするかという点は、何も分らないままだ。

例のアンケートの提出期限も間近に迫^{せま}っており、三者面談^{さんしやめんだん}が開催される月末も間もなくだ。

「なあなあ佐々木」

すると、義弥が話に加わってきた。

「結局時給いくらのの？」

「時給？ えっと、今は研修中で、私は高校生だから八百円で、研修期間終わったら五十円増しだったかな」

その後は勤務実績次第ということだが、木崎店長曰く、直属の先輩である真奥は採用二か月つまり研修を終えてたったひとりで時給を百円も引き上げた伝説を持っているらしい。

言われるまでもなく真奥の仕事ぶりは肌身感じて知っているし、逆に自分がそこに到達するのはずっと先のことだろうとも思っている。

「てことは一日六時間働けば五千円近くもらえるのか、すげえな」

「働けば、ね。義弥、あんたは下らないこと考えてないでささちー以上に進路アンケート悩んでなさいよ。あんたんとこ、昔から親厳しいでしょ？」

千穂と二人の付き合いは高校に入ってからだが、佳織と義弥は小学校時代からの知り合いらしく、時々千穂の知らない昔のことを話題に出す。

佳織が義弥に辛稼なのも昔からだというのだが、それでもこうして仲良くしていただけるのだからこれもいつものことなのでお互い特に気にはしていないのだろうと千穂は思っていた。

だが、このときは少しだけ勝手が違った。

「厳しい……とは違えんだけどな。俺、今はとんど見捨てられてっから。だから親が三者面談来ないかもしれねえってのもあながちウソじゃなくてさ」

「え？」

「義弟、あんた何言ってるの？」

「ショージーも知ってんだろ？　うちの兄貴達のこと」

「あー」

佳織は突然涙で顔で顔を覆く。

「江村君、お兄さんいたんだ？」

二年目にして初めて知った事実。千穂は友達の前で兄弟という存在に純粋な興味を湧いたが、なぜか義弟は凄く嫌そうな顔をした。

「佐々木にはあんま知られたくなかったんだけどな」

「え？　何それ」

「兄貴達のこと知られたら、佐々木俺のことバカにすんじやねーかなーってごぼっ」

その瞬間、義弟の顔に、佳織の中身がぎゅっしり詰まったペンケースがクリーンヒットした。千穂の耳元を掠めたそれは、結構な勢いで飛んでいったように思う。

「そんな根性だからバカにされるんだよ！　ささちーそんな奴じゃないし！」

「……チャックが歯に当たった……」

「今すぐ洗ってアルコール殺菌してきて！」

「シコージョー！ お前なあ！」

「ちよ、ちよ！ 二人とも落ち着いて」

それから二人が千穂の頭越しにいつもの言い合いをするのを五分ほど聞くはめになる。

「義弥のとき、お兄ちゃん二人いるんだけどさ、これが凄いな」

話題がようやく義弥の兄弟の話に戻るが、義弥が話したがないので佳織が勝手に話しはじめた。

「上のお兄ちゃんが裁判官で、二番目のお兄ちゃんが医者だったよね？」

「え？」

思っていた以上に本当に凄いのので、千穂は思わず大きな声を上げてしまった。

だが義弥は淡い顔で首を横に振る。

「端折んなよ。上の兄貴は裁判官志望だけどまだ司法修習生だし、下の兄貴は今年医師免許の試験受けるからまだ医者じゃねえ」

「で、兄ちゃん達が優秀すぎて、一番下の笹崎北の赤点先生は、立場無いわけだ」

「ハッキリ言うなよ……」

本当にハッキリ言う佳織に、義弥は心底嫌そうに返す。

「一時は俺も兄貴達に負けないよう頑張れとか言われてたんだけどさ、最近じゃ諦められたの

か、何も言われなくなってきた、こないだの率点も、ふーん、の一言で済まされちゃったさ。勉強以外のトコで期待されるほど何か得意なわけじゃねーし、最近じゃとっとと家出することばっかり考えてる」

「江村君……」

「シコージも佐々木もバイトしてんだから、俺も何かバイトして、金貯めて家出ようかな」
 そう簡単に言って義弥は話題を切り上げた。

それ以上兄弟の話をしたくなさそうだったので千穂もそれ以上追及はしなかったが、どうしてか、今の義弥はとても危なっかしく見えた。

「……だからあんたが今のままバイト始めたら、留年飛び越して退学だってば」

佳織もそんな空気を感じたのか、どこか真剣な顔でそう言うが、

「バイトして働いてればなんとでもなんだろ？ 学校の勉強なんか最近じゃ大学受験にも役立たねえってよく言うじゃん。進路アンケート、俺就職にしようかな」

義弥の返しはいつもの調子。それがどこまで本気でそう思っているのか、千穂には分からないかった。

「今日はなんだか暗い顔をしているな？」

「あ、店長……」

レジの前に立っている千穂に、木崎が声をかけてきた。

「何か分らないことが？」

「あ、いえ、そういうことでは……いえ、そういうことも……」

「？」

頭の中で、今日学校で話した進路のことが渦巻いている。

義妹も佳織も、そして自分も、何か先にあるものを見ようと、進路というものが何かを見極めようとして、結局何も分からずにいる。

「……学校の友達と、進路ってなんだろうって話になって……やっぱりまだよく分からなくて、学校で面談があるんです。そろそろ何か考えないといけなくて、それでつい……」

「ああ、そのことか」

木崎は難しい顔で頷いた。

「すいません、きちんと仕事に集中し……」

「大人の意見と無責任な意見があるが、どっちから聞きたい？」

「え？」

千穂は驚いた。

仕事に集中しろと怒られるかと思つたのに、真面目に取り合つてくれたばかりか、不思議なことを言うからだ。

「……じゃあ、大人の意見から」

「よし、大人にとって学生の進路はな、『大したことじゃないから悩むだけ無駄』だ」

「は？」

滅茶苦茶なことを言われた。

それでは千穂が見てきた、進路について勝手気ままに言う大人たちとまるで変わらない。だが木崎の表情には、その先があった。

「なんでだと思ふ？ そんな話は大人たちの人生ではとつくの昔に済んだことだからさ」

「ど、どういふ……」

混乱する千穂に、木崎は続ける。

「『そのときにどうしていれば、より成功できていたか』は大人になった今なら分かるから、今まさにその分岐点にいる君達が何故そんなに進路に悩むか、それをとつくの昔に通り過ぎた大人は分からないんだ。そして大半の大人は自分達が愚く、未熟で、自分に正直だった頃を恥

じて、忘れてゐる。だから商學と教師とあとは予備校講師以外の、君の姿を見ていない大人の意見など、無視するに限る」

「よ、予備校講師？」

「彼らは生徒の進路を安定させることが生業だ、だからお互いのために、心から生徒の身になつて物事を考えてくれる」

「な、なるほど……」

「そして、無責任な方の意見だが、進路の悩みというのは大抵『自分が何をしたいのか、何を目標せば、何を学ばいいのか分からない』ことに集約される。どんな仕事がいいのか分からない。大学に行つて何を学ばいいのか分からない」

「そ、そうです、だから……」

「究極的に客観的な意見を述べるなら、授業料の安い国立大学に行つて法律か医学を学んで裁判官や医者を目指せばいい。今は弁護士でも食いつぶされる世の中らしいからな、公務員なら安泰だ」

「で、でも……」

図らずも身近に実在する例を出されて狼狽（うろたへ）えるが、木崎はまた不敵な笑みを浮かべた。

「でもそんなこと言われたつてピンとこない。だろう？」

「は、はい……」

「それなら、そんな先のこともなんか考えなきゃいい。来年のことを言えば鬼が笑う。大人になつたって一年先のことも分からないのに、君達のような子供にそんな大味な選択を迫る今の大人社会の尻の穴の小ささはまこと嘆かわしいな」

そして木崎は、はつきりと言い切った。

「進路というのば、明日のために今日、何をするかを考えることだよ。一年先のことは分からなくても、明日自分が何をしたいかくらいは分かるだろう？」

「明日と今日……って」

「比喩的な話ではないぞ？ カレンダー上で、今日とその次の日のことだ。進路は未来、未来は今日と明日の積み重ねの先にある。大抵の人間は、調にあるものをスッ飛ばして一年も二年も先のことを考えられるほど賢くない。ならば分相応に、今日のすぐそばの明日から順に手を伸ばせ。そうすればじきに一年後に届くようになる」

「明日に、手を……」

「と、まあ」

と、唐突に木崎の手が千穂の顔の上に置かれて、悩み顔の千穂は顔を上げた。

「大人らしく無責任に煙に巻いたところで、まずは目の前の仕事に集中しよう。今言つた通り、明日に向かうには今日が大事だ」

「あ……はい」

「お金を扱うには一にも二にも落ち着きた。五千円と一万円はきちんと区別しよう」

「わ、分かりました」

言われて千穂は、頭のどこかにもやもやしたものを残しつつも我に返る。

今日は仕事に集中できず、お客から預かった五千円札を二度も一万円としてカウントしちゃうなってしまった。

お釣りのお札をお返しするときに他のクルーがチェックするルールが無ければ、お釣りを渡し間違えてしまうところだった。

「すいませんでした、今は仕事に集中します」

先ほどと違い、今度はなぜか心の底からそう言うことができた。

心の蔭（かげ）が晴れたわけではないのに、気分はさっきよりずっと軽い。

「結構。それでこそ私も偉そうなことを言った甲斐（かい）があったというものだ。私はこの後事業所に行くのでいなくなるが、引き続き分からないことは他のクルーの指導を仰ぐように」

「はい」

「頑張れちーちゃん」

「はいー」

ひらひらと手を振ってスタッフルームへと戻っていった木崎（きさき）によく分からない勘（かん）まされ方を
して、ドアが完全に閉まってからふと、千穂は気づいた。

「……「ちーちゃん」？」

その夜、勤務を上げる時間になった千穂は、スタッフルームに私服姿の真奥まおくがいるのを見て驚いた。

「あれ？ 佐々木ささきさんも上がりか」

「お疲れ様です、真奥まおくさんですか？」

「うん、今日は朝からいたから、いつもよりちょっと早くな」

二十四時間営業ではない轄々谷けつがや駅商店の閉店時刻は午前零時じゅうじ。

真奥は普段千穂が帰った後も閉店まで残っているが、この日は早かった出勤時刻に合わせて退勤時刻も早まっているらしい。

だが千穂は、そんなことよりも気になることがあった。

「……あ、あの、真奥まおくさん？」

「ん？」

「そ、その格好かっこうで帰るんですか？」

「そうだけどう」

あっさりそう返されて、千穂は絶句する。

春とはいえ、まだまだ寒いこの時期に、薄い長袖シャツの上にパーカーを羽織っているだけのとんでもない薄着だ。

「さ、寒くないんですか？」

「寒いよ？」

絶句、二回目。

「やー、洗濯物が乾かなくてさ」

そういう問題ではないと思うのだが、真実は続ける。

「近所のコインランドリーが軒並み値上げしてさ、仕方ないから手洗いしてんだけど、冬物だろ？ 脱水できないだけであんなに乾くのが遅くなるとは思わなくて」

初めて聞く、先輩のプライベートな話題……というにはあまりに生活感が滲み出すぎている気がするが、あけすけにそんなことを話すのも真実の人物だと干穂もここ数日で理解していた。「この気候だと二日間くらい干しておかないと乾かないんだよね。で、仕方なく」

それと今の薄着は別問題な気がするが。

あまり突っ込んで私生活について聞くのも行儀が悪い気がして、

「そ、そうですね。これからどんどん暖かくなってくるし、男の人なら体丈夫ですもんね」
そう言っただけで自分も着替えようとして、

「え？ これから暖かくなるの？」

そう青中に投げかけられて、千穂は思わず振り返る。

「え……だって、もう四月で……春も真ん中じゃないですか」

「あ、そうなんだ。やっぱそういうことなのか。やっぱり冬の次は春なんだ。そこは変わらな
いんだな」

「ま、真奥さん？」

言わずもがなのことをまるで新しい知識であるかのように納得する真奥は、千穂の視線に気
づき、

「……………もちろん、知ってたぞ」

「……………ですよね」

突っ込みではいけない気がして、千穂は着替えを持って女子更衣室に入る。

「そ、それじゃお疲れ様でした」

「お、おう、お疲れ」

さもなくば挨拶を交わして、真奥はスタッフルームを出ていった。

だが、千穂が着替えを終えて残るクルーに挨拶をして店を出ようとしたとき、なぜか真奥が
店の外で立ち尽くしているのを発見してしまう。

「真奥さん？ どうしたんですか？」

「あー……」

「あ！ 雨……」

真奥の返事を聞くまでもなく分かった。雨が降っているのだ。

そして真奥の様子を見るに、恐らく傘を持っていないのだろう。

「やー、しくじった。こんな日に限って置き傘無いんだもんなあ……」

「え、でも今朝の天気予報で今夜は確実に雨が降るって……」

千穂は靴の中から折り畳み傘を取り出しながら言うが、

「あ、うちテレビねーんだ」

これまた予想外の返事だった。

「えっ……？」

「ま、これじや走って帰るしかねえな。洗濯物乾いてるといいけど……」

真奥はそう言うのと、パーカーの薄いフードを頭に被って、覚悟を決めたように深呼吸する。

「んじや佐々木さんも気をつけ……」

「あ、あのー 真奥さんのおうちって、どっちですか？」

走り出そうとする真奥に、気がつけばそう声をかけていた。

「え？ あ、えっと、笹塚駅の方……」

「わ、私もそっちなんです！ よかったら、傘、入っていきませんか？」

「やー、悪いなほんと、助かったよ」

「あ、その、は、はい、どういたしまして」

真奥の屈託のない礼の言葉に対して、千穂の返しは蚊の鳴くような声だった。思わず言ってしまったが、考えてみれば男性との相合傘などしたことがない。

救いと言えば、弓道具を持ち歩くことが多い千穂の折り畳み傘が、普通のものより大きいことで、必要以上に真奥と接触せずに済むということだ。

「あ、あの、真奥さんそっちの肩……」

だが、今傘を持っているのは背の高い真奥。

そして真奥は千穂に気を使ってか、千穂が濡れないように傘をさすので結果的に千穂と反対側の肩が結局濡れてしまっている。

「大丈夫大丈夫。全身濡れること考えたらなんてことない」

だが真奥の声はどこまでも明るい。

「しかしなあ……これから雨って多くなるもんなの？」

「え？ ど、どうでしょう……多分、多いんじゃないかと」

「そっかー……参るな。ますます洗濯物乾かなくなるな」

「でも暖かくはなりますし。いつそのこと洗濯機、安いの買ったらどうですか？」

「え？」

そのときの真実の表情は、驚愕を全面に押し出したものだった。

「無理無理、あんなデカイもの二つも置く場所無いし、大体どう考えたって高いだろ？」

「え、あ、そ、そうです……ね？」

一瞬、人の経済事情に踏み込みすぎたかと思つたが、何か違和感を感じた。

デカイもの、二つ？

「ランドリーのスペースにあるからそんなに大きく見えないかもしれないけど、洗濯脱水機と乾燥機まるごとうちに持ってきたら、アパートの廊下寒がっちまうよ」

「あ、あ、あの、真実さん？　そ、そんな業務用の大きいのじゃなくて、家庭用の話……」

「え？」

「え？」

「……家庭用？」

「は、はい……」

まさか真実は、世の洗濯機の全てはコインランドリーにあるあの大型の立方体だと思つてゐるのだろうか。

「家庭用の、小さいのだったらお店のゴミ箱よりちょっと大きいぐらいのが、全自動で売ってますよ？　安いのがいいなら、二槽式とか……」

「……マジで？」

「マジ、です」

千穂こそマジかと聞き返したいところだが、真奥は本気で衝撃を受けているようだ。

「アパートなら、廊下とかに水道ありませんか？ そこに繋^{つな}げて……」

真奥の不思議な発言の中に、彼の住まいの情報が混じっていたのでそこを突くと、

「ある！ あれ洗濯機用だったのか？」

他になんだというのだろうか。

「なんだかよくわからないから、その水道使って桶に水張って洗濯物手洗いしてた！」

「……洗濯には、使ってたんですね」

「そっかー……洗濯機って、買ったのか……洗濯ギルドとかの独占商売なのかと思ってた」

しきりにうんうん頷^{うなづ}く真奥。

一体、これはどういうことなんだろう。お店の中の真奥とはまるで別の人間と話しているかのようだ。

「な、なあ、もう一つ聞いてもいいか？」

だが、本気で新しい知識を得たかのように目をキラキラさせる真奥がなんだか妙に可愛らしく見える。

「は、はい、なんですか？」

「雨が多い上に暖かくなるんだよな。てことは日陰とかに置いておいても、野菜とか腐りやすくなるけど、佐々木さんちはどう……」

だが、先ほどより更に斜め上を行く質問に、千穂は目を斜いてしまう。

「ひ、日陰？　っていうか、冷蔵庫に入れておけば……」

とそこまで言って、千穂は、二秒先の未来で真実が何を言うか、手に取るように分かってしまった。

「あ、うち冷蔵庫無い」

「買いましょうよ！　洗濯機はともかく、冷蔵庫無いのはさすがにマズいですよ！　食べ物思くしたら、体調しちやいますよ？」

「……や、やっぱりそう思う？」

「ここ何年か、春の暖かいのがほんのわずかで、そのあとすぐ真夏日になっちゃうようなことが続いているじゃないですか！　そしたら足の速い野菜なんかすぐダメになっちゃいますよ!？」

「そ、そうなのか？　野菜って走るのか？」

「物の例えですっ！　っていうかそうなのかって、去年も一昨年もそうだったじゃないですか。夏になったら生のもなんか外置いておいたらすぐ悪くなっちゃいますよ？」

「わ、分かった分かった！　俺も冷蔵庫は欲しいと思ってたから、買うって買うって……で」

「え？」

「……その、冷蔵庫や洗濯機って、どこ行けば安く売ってるもんだらうか」

「……」

どうも真奥は、本当に季節の移り変わりや家電量販店など、ごく常識的な事柄を本気で知らないらしい。

店ではあんなに仕事ができるのに……。

思わぬギャップの発見に、千穂は喜んでいいやら困惑していいやら……。

「真奥さん、もしかして帰国子女なんですか？ 英語べらべらですし……ずっと海外で暮らしてたとか」

ふと、そう尋ねてみる。

語学には堪能でも、あまりに日本の生活についてズレた発言の多い真奥だが、最近まで海外生活が長かったというなら納得できなくもない。

が、

「うーん、そういうのとは違うんだ。帰ってきてるわけでもないし。英語は単純に俺の「仕事」に必要なと思ったから覚えただけ」

残念ながら否定の言葉。

あっさり英語を「覚えた」と言う真奥に驚きつつ、

「……家電なら、新宿西口のヨドガワバシカメラが安いし色々あると思います。あとは、方南町（まがらぎ町）の方のドッキ・リ・ホーテとか……自転車がいっぱいお店の前に並んでる所です」

千穂は話を元に戻した。

あまり突っ込みすぎて不快に思われても困るし、突っ込んだところで分からないことが多くなるだけのような気がしたからだ。

真奥はそんな千穂を気にせず、目を見開いて頷いた。

「あ、どっちも知ってる。デカイ店だから、高級品ばかりなんだと思ってた」

「ドッキ・リ・ホーテは基本安いもののほうが多いですよ。それこそ自転車なんて、選はなければ何千円かで買えちゃうくらい」

「へえ！ 何千円か……佐々木さん、色々知ってるなあ」

どうやら真奥は、本気で感心しているようだ。

結構常識的なことばかりだと思ふのだが、千穂がそう言うより早く、

「さすが、本崎さんが早くもあだ名で呼びだしただけあるな」

「え？」

「「ちーちゃん」て、呼ばれるようになったんだろ？」

千穂の心臓が、一際大きく跳ねた。

「は、はい、知ってたんですか？」

「俺だけじゃなくて、みんな知ってるよ。明日から多分、全員からそう呼ばれるようになると思うよ。木崎さんにあだ名で呼ばれ出したら、実質的に研修合格と思っていいたいと思う。社内規定で一月立たないと研修時給は抜けれないけど、こんなに早く呼ばれるようになったなら多分研修明けの時給は、最初に言われたのよりちょっとだけ高くなってると思う」

「え？　そ、そうなんですか？」

あだ名で呼ばれることと研修がどう関係あるのかまるで分からない千穂は驚き目を圓くが、「理由は俺達には分からないけど、木崎さんがあだ名で呼び出した新人は、一人前の戦力として尊重すべしって、それがうちの店の暗黙の了解」

千穂の脳裏に、ふと住職の体験談がよぎる。

まさか研修期間とは名ばかりで、これから全ての仕事を一人でできないと怒られるようになるのだろうか。

そんな不安な心中を読み取ったわけではないだろうが、真奥は緩けて言った。

「あ、だからっていきなり放り出すようなことはしないからそこは安心してな。ちゃんと独り立ちできるまでは俺がついてるから」

「あ、ありがとうございます」

安心したと同時に、ナチュラルに、「俺がついてる」などと言われるとなんだか気恥ずかしくなってしまう。

「ただ、佐々木さんには、仕事をする上で一人前に扱うべき何かがあるって、木崎さんが認めたってことだけは間違いない。プレッシャーかもしれないけど、折れずに頑張れよ」

「は、はい……」

なんとなく真奥の顔を見られなくなってしまう、しばしの沈黙。

そうこうしている間に二人はいつの間にか、笹塚駅前の交差点まで迫り着いていた。

「俺、こっちなんだけど佐々木さんは？」

「あ、私は反対側で……でも、送りますよ？」

ここまで来て真奥と別れてしまつては、結局真奥は雨に濡れることになってしまう。

「大丈夫大丈夫、うちの方まで寄り道させて、帰りになんかあったら悪いからな」

「でも……」

千穂は食い下がるが、真奥は笑うと、すぐそばの郵便ポストを見る。

「ほら、俺も傘ゲットしたから。本当に、ここまで送ってくれてありがとな。助かった」

真奥の手には、ぼろぼろのビニール傘が握られていた。

先端は錆びていて、広げるまでもなく骨がゆがんでいるのが分かる。

恐らく誰かが郵便ポストにひっかけたのを忘れたか捨て置いたかしたものだろう。

長時間放置されていたらしく中には雨水が溜まってしまっているが、千穂に折り畳み傘を返した真奥は、それを広げて掲げると、

「上等上等」

ご満悦まんえつで頷うなづいた。

「じゃ、本当にありがとうな、気をつけて帰れよ。あ、あとそれから……」

「はい？」

「うん、改まって呼ぶのも変な感じがするが」

「はい……なんですか？」

真奥は少しまり悪そうにしながら、咳払いせき払いして言った。

「明日からまた頑張れよ、『ちーちゃん』」

「……っ!?」

「そんじゃな、次のシフトでまた」

「あ、は、はい、あの、お疲れ様でした」

完全な不意打ちだった。

千穂に手を振って離れてゆく背を呆然ぼうぜんと見つめながら、千穂は思わず自分の頬ほに手を当てた。男の人に「ちーちゃん」と呼ばれたのはいつ以来だろうか。

木崎に呼ばれるまで、幼い頃自分がそう呼ばれていたことすら忘れていたのだ。

そして自分を「ちーちゃん」と呼ぶ人は、皆、千穂よりずっと遥とほしくて、ずっと大人で、

「……っ!」

千穂は先ほどまで、一つ傘の下で真奥とかすかに触れ合っていた肩が急に熱を持った気がして、思わず息を呑む。

幼い頃、淡い憧れを抱いていた従兄弟は、もうとっくに結婚して子供もいる。

物心ついたときにはもう物凄く大人に見えて、今の真奥みたいに千穂の知らない世界のことを沢山教えてくれた。

その従兄弟と、真奥が、どうしてか重なる。

頼りになって、自分の知らないことを沢山知ってて、凄く大人で、でもどこか抜けてて……。

「あれ？ あ、あれ？」

なんだか顔まで熱くなってきて、千穂はしばし真奥が去った方から目が離せないでいたのだ。

※

「……全然似てない」

家に帰ってからアルバムをひっくり返してみると、結婚した従兄弟と真奥は欠片も似ていなかった。

こう言っただけで従兄弟には申し訳ないが、真奥の方がずっと……。

「な、何考えてるのー て、痛っー」

千穂は勢い良くアルバムを閉じようとして重いページに指を挟んでしまい、しばらく痛みに悶絶した。

突然アルバムを見たいと言い出した千穂を不思議がる母にアルバムを返すと、ちよつと色が変わってしまった爪を懐めしげに見ながら自分の部屋に戻る。

ベッドにだらしなく飛び込むと、うつ伏せで杖に顔を埋めてため息をつき、無言のまま足をゆらゆら。

「……なんなんだろう」

だんだんゆらゆらの勢いが強くなる。

「なんなんだろうなんなんだろうなんなんだろう」

ベッドのスプリングが軋みはじめて、

「あだっ!!」

揺らしまくっていた足を思い切り壁にぶつけてしまつて飛び起き、つま先を押さえてしばし涙目。

「な、何してんだろ私……ん？」

自分の意味不明な行動に自分で疑問を出したそのとき、携帯のバイブが鳴る音が聞こえた。

「メールだ。なんだろう」

したたか打ちつけたつま先をかばいながら部屋の机の上に置いてある携帯を手取る。

「あれ、江村君？」

メールの内容はごくごくシンプルだった。

「明日ショージーとマッダに飯食いに行くわ」

「え、ちょっ……」

千穂は反射的に、返信をしてしまう。

「まだ、慣れてないから来ないで……っ」と

本崎や真央は自分の何かを評価してくれているらしいが、正直何を評価されているのか全く分からない。

将来的に友達や家族がバイト先にお客として来る可能性は考えていたが、よりにもよって明日とはタイミングが悪すぎる。

絶対に余計なことを考えて、失敗するに決まっている。

「あれ？ かお？」

そんなことを思っていたら、今度は佳織からメールが来た。

「『義母からささちーのバイト先行くなってメール来たよ。言わなきゃ明日シフトにいるってバレなかったのに、何してんの』……あっ」

千穂は自分の迂闊さを呪う。

明日は勤めはじめて最初の日曜出勤。六時間以上店にいたことは今までなかった。

これではいくら来ると言ったところで、絶対に聞いてくれないだろう。

「ど、どうしよう……友達が来たらどうしたら……」

友達であることには違いないが、他のお客の手前、仕事中はお客様として接しなければいけない気がする。

でも、ドラマとかだと店員の知り合いが来ると少しかスタッフがフランクになったりとかもするし……。

「で、でもあーゆーのは個人経営のバーとかこう、チェーンじゃないところで、マグロナルドみたいなところだとやっぱダメ、かな？」

母や父が来るなら、むしろ話は簡単かもしれない。

恥ずかしさはあるが、母が店長である本崎に娘のことで挨拶することは自然な流れだ。

だが、学校の友人となるとどうだろう。

職場に親しい人間が客としてやってくる。

チェーン店であるマグロナルドでのその光景が、千穂にはどうしても思い浮かばなかった。

「そ、そうだ！ 真奥さんに聞いて……」

その瞬間、千穂の脳裏に真奥の顔が閃き、反射的に携帯電話を手にとって、

「あ……知らない。連絡先」

研修期間中、はぼつきつきりで指導してくれた真奥だが、携帯電話の番号やアドレスを交換したことはないし、従って真奥に連絡する手段は無いし、そもそも、

「な、なんで真奥さんに聞こうと思っただろう……他にも人いるのに……」

なぜか、連絡先が分からないと気づくまで真奥以外の可能性を全く考えなかった。

「お店は……さすがにちよつと悪いよね」

店の電話番号は携帯電話に登録しているが、

「明日友達が来るんですけどどう対応したらいいですか」

とはあまりに質問内容として稚拙な気がした。

「べ、別にまだ来ると決まったわけじゃないし、明日のシフトに出てる誰かに対応の仕方をこつそり聞けば……聞け……ば」

千穂は、手帳に挟んで置いたシフト表を何気なく確認して、紙が二枚重ねになっていることを思い出した。

「で、電話番号……」

それは、従業員の連絡網だった。

なんらかの理由で緊急にシフトに入れない事情が出た場合には、本崎店長に知らせるのはもちろん、自分で誰かに交代を要請する必要がある。出てくる。

あとは建前上、事故や災害の際に緊急連絡網として使うことになっているのだが、初日にも

らったもので、まだ千穂の番号はこの一覧の中には入っていない。

その中で無意識に探してしまった真奥の欄には、携帯電話の番号が記載されていた。

そういえば、真奥は普段どんな暮らしをしているのだろうか。

テレビや洗濯機、冷蔵庫すら無いということは、かなり切り詰めた生活を送っていることは間違いない。

だがシフト表を見ると、真奥はほぼ毎日昼夜みっちり入っているから学生ではない。

学生ではなく、極限まで切り詰めた生活を送っているとすると、ミュージシャンとか役者とか、そういう夢を追っていたりするのだろうか。

「ち、違う違うそんなこと知りたいんじゃないって！ 友達が来たとき少しはおしゃべりしているのかとかお店の空気のなこと……」

仕事ぶりや普段の言動を見ると、あんまり裏表がない堅実な性格らしいから大学や専門学校の進学資金を貯めてるとか……。

「だからそうじゃないって！」

アパートの一人暮らしで生活を切り詰めている風だが、生活の乱れなどは全く感じない。

髪とか靴とか私服だとか、正直言ってそんなにお洒落じゃないけど身だしなみは整っているし、制服もいつもきちんと洗濯されている。もしかして、世話を焼いてくれる人が身近にいたりするのだろうか。

「……」

その想像は、なんでだろう。何か嫌だ。

でも、なんで嫌なのかはよく分からない。

でも、普通に考えて有り得ない話じゃない。

でも、真奥さんに恋人がいたとしても自分にはなんの関係も……。

「ないないないない！　ぜーったいない！」

「千穂！　何騒いでるのー！」

階下からの母の声で、千穂は赤面したまま我に戻る。

そうだ、母にそれとなく聞いてみよう。いくらなんでもいきなり電話はハードルが高すぎるし、つまらないことで電話して不真面目だと思われたくない。

「思われたく……ないよね」

千穂はシフト表と手帳をしまうと、部屋の電気を消して、悩み事を相談するべく階下に向かう。

だが、部屋が真っ暗になった瞬間からもう、奥の隣では、真奥の隣にいる、空想上の誰かのことがずっと渦巻いていた。

真奥が全力で仕事をするのを陰から支える主婦みたいに甲斐甲斐しい人だろうか。それとも意外に、お金使いが荒い怠け者に引つかかっていたりするのだろうか？

それとも普段の真奥のイメージと違う、和服とか毎日着るような古風な人とか？

それとも働く真奥に似合いの、しっかり仕事を持った社会人のお姉さん……。

「か、関係ないよね。関係ない関係ない！」

なんだか妙に色々具体的なイメージしてしまい、千穂はぶんぶん顔を振ってそれらのイメージを追い出した。

「何が関係ないの？」

思わず声に出していた独り言を、いつの間にか階段の下にいた母に思い切り聞かれてしまう。
「な、なんでもないよ。それよりちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

千穂は適当にごまかしながら、本当に母に聞こうと思って話を話しながら、そのままリビングへと移動する。

「聞きたいことはいいけど、そういえばあなた、進路相談のなんとかで悩んでなかった？ あれ、結局どうしたの？」

リビングのソファに座ろうとして、千穂は母からのその質問に、

「……あっ」

思わず間拔けな声を上げる。

完全に忘れていた。週明けの月曜が、提出の締め切りだ。

一晩、盗んで結局進路相談のプリントに名前とクラス以外のことを書き込めなかった千穂。頭を掻きながら出勤するが、そうすると差し迫って問題なのは、今日、義母が本当に店に来るかどうかだ。

昨晚のメールの後、

「あいつがバカやんないように一応プレーキにはなってやる」

と佳織から連絡が来たけれど、それはそれとして、やっぱり学校の友達に働いている姿を見られるのはなんとなく照れくさい。

佳織がアルバイトのことを辞めるまで教えてくれなかった理由が、いざ友達が来ることになってようやく分かった。

理屈ではない。純粋に、普段と違う立場で接しなければならなかったため、掘わりが悪いのだ。

昨夜、母に職場に友人が来た際の最善の対応を相談したが、

「お仕事に支障が無ければ少しくらいはおしゃべりしてもいいんじゃないの？」

とあまり解決にはならない返事。

「でも店長さんや先輩の人達に眠られないようにね」

とも釘を刺された。

未だに理由は分からないが、木崎に自分の何かを認められてしまったこの間の今日で、迂闊なことをして評価を下げるようなことはしたくない。

それで結局、

「あ、あの、もしかしたら今日友達が来るかもしれないんですけど……」

分からないことは勝手に判断せずなんでも聞け、という指導を守り、真奥に相談してみた。

「友達？ 学校の？」

「は、はい。それで、友達が来たときって……」

言いながら、物凄く間抜けな質問をしているような気がした。

それくらい空気を読んで対応しても、今までの様子ならなんら問題ないんじゃないかということを実感しながら思ったりもした。

そしてその想像を裏付けるように、真奥は柔らかな微笑みで頷く。

「別に堅苦しく考える必要ないよ。よっぽど忙しいときとか、変に羽目外すとか無ければ、ちよつとくらい隔っこで話するくらいは全然大丈夫。そういうことだろ？」

「あ、そ、そうです」

なぜだか真奥の顔を、今日はなかなか真っ直ぐ見られず、返事も囁んでしまう。

「親しい奴に働いてる姿見られるの、なんか勘わり悪いよな。かといって他のお客さんと一緒

に他人行儀に扱うのも何かやだし」

何かを思い出すように真奥は苦笑する。

その姿を見て千穂は安心する。

やっぱりみんな、同じことを考えるんだ。

「考えてみりや臣下に向かつて敬語で接客するとか昔は考えもしなかったしなあ。あんとさや後で氣まずかった」

この何事にも動じなさそうな真奥ですらそう思うのだから、自分が動揺するのも仕方ないのかもしれない。

そう思つてふと、千穂は何か違和感を覚えた。

今の真奥の言葉の中に、耳慣れない単語が混じつていなかっただろうか。

シンカ？　なんだろう、人の名字だろうか。

真奥は千穂のささやかな疑惑に気づかず、一つ頷いて千穂を見た。

「そこらへんは、空気を読んで適切に、だな」

「あ、えーっと、はい、分かりました。ありがとうございます。あと、すいません、何かどうでもいいこと聞いちゃって」

だが千穂自身その違和感をかすかにしか感じなかったのと、真奥に真っ直ぐ見られたことによる影響で、なぜか生まれた氣恥すかしさに流されてべこりとお辞儀をする、さざ波のよう

な違和感はあるし洗い流されてしまった。

「いーっていいーって。俺は最初のうち、お客さんが残ってた空のペットボトルとか捨てていいのかわで誰かに聞いてたもん。むしろ友達とどう接していいか悩むちーちゃんは、オンとオフの意識がしっかりしてることだよ」

「ひ、ひゃい！」

「へ？」

「あ、は、はい！ ありがとうございます！」

「お、おう？ なんかちーちゃん元気いいな」

思い切り囁んでしまった。その上また「ちーちゃん」と呼ばれて驚いて、恥ずかしくてごまかそうとして、つい大声になってしまふ。

昨夜は少し言い淀んでいたのに、今日になって真奥はごくごく普通に「ちーちゃん」を連発してくるのだ。

他の先輩達に呼ばれるのはそれほど驚かないのに、真奥相手だとどうにもうまくいかない。

「何時頃来るとかあるの？」

「え？ な、何がですか？」

「友達」

「あ……あ、あつ、その、まだ分からないんです。そもそも本当に来るのかどうか……」

「そっか」。でも、落ち着かないなそりや。俺も親しい奴が初めて店来るって言い出したときには、意味もなく緊張したなあ。でもずっとそうやってテンパってるとミスが多くなるから、そこは気をつけなよ?」

千穂が「テンパって」いるのは決して学校の友人のことだけが原因ではないのだが、では他の理由はと考えると、

「あ、あ、あの、三時の十番チェックして来ますう!」

「お、おう? 頼む」

いたたまれなくなってしまう千穂は、有り得ないほど強引に話を切り上げると、真実を境界から外してトイレに向かう。

「……苦手な友達なのかな」

そんな千穂の後姿を見ながら真実首を傾げた。

十番とはトイレを意味する、食事中的お客に手洗いを意識させないための店内隠語の一つだ。マダロナルドは一時間に一回、トイレの清掃点検をしなければならない。

千穂はトイレに向かって教えられた通りにチェックをし、洗面台脇の点検者サイン用紙に自分の「名」を書き込む。

「……わわっ!」

なんの気なしに書いた十五時の欄のすぐ上、十四時のチェックの欄には、男の人らしい角は

った大きな字で「真奥」と書かれていた。

「真奥、千穂……ああ？ ま、間違えた！ ま、間違えた！ たわけじゃないけどっ！」

本当に、自分の名前の方だけを欄の下真ん中に書いてしまった。

慌ててぐしゃぐしゃとそれを消し、横の余ったスペースに窮屈に「佐々木」と書き直す。

「……うう、なんだか余計に恥ずかしい気が」

一体自分は、真奥の何を意識しているのだろう。

自分でもさっぱりわからないが、どうも真奥のことを考えると平静でいられなくなる。

こんな調子では、ますます佳織や義母が来たときのことか心配になってしまう。

特に疲れてないのにぐったりしながらトイレから出た千穂は、

「あ、佐々木いた」

「うわわわっ！」

すぐ目の前に私服姿の義母がいて、大声を上げて飛び上がってしまった。

「おー、ささちー」

義母の後ろには佳織がいて、二人共まだ手ぶらである。

「レジにいないから見えない所で仕事してたらどうしようって思ってたところなんだ」

「そ、そうなんだ、あー そ、その、えーと」

まったく心の準備ができていなかった千穂は、恥も外聞もなく、レジの中にいる真奥に助け

を求めるように目を動かしてしまふ。

すると先ほどの大声ですでにこちらの様子に気づいていたらしい真奥は、千穂達三人を一瞬だけ交互に見てから、一つだけ頷いて顔をしゃくった。

正直、それが何をしていたという含意なのかは分からなかった。

アイコンタクトで全部分かるほど、自分と真奥は連携が取れているわけではない。

それでも、真奥ならこういう場面で何をするかを考えて、千穂はできる限り姿勢を正して二人に向かつて小さくお辞儀をした。

「いらつしやいませ！ ご注文お決まりでしたらカウンターへどうぞ！」

「……おおき」

「おー、やるー」

顔を上げてからこらえきれずにまた真奥を見ると、真奥は顔きもせず、かといって首を横に振るでなく、ただ笑っていた。

これで良かったのだろうか。

とにかく二人を、真奥と二人で受け持っているレジまで案内する。

すると、

「いらつしやいませ、先日はどうも」

「……あ！ もしかしてあのときの？」

真奥が、佳織に向かつて挨拶をした。

「私のこと、覚えてたんですか？」

「佐々木さんが友達と言っていたので、多分そうだろうなと思っていました。先日はご迷惑をおかけして、申し訳ございませんでした」

「え？ 何？ 前に何かあったの？」

千穂が進路アンケートをコラ漫しにしてしまった事件を知らない義妹は、マダロナルドの店員と友人のやりとりを目を白黒させている。

「そうだ、佐々木さん」

「は、はい？」

「折角お友達がいらしたんだから、オーダーからセッティングまで全部一人でやってみようか」

「え、一人でですか？」

千穂は驚いてしまった。

セッティングとは、注文を受けたメニューをトレーの上に全て揃えてお客様に渡すことを言うのだが、千穂はまだオーダーを取ることにとお金のやりとりしか許されていなかった。

シフトの人数にもよるのだが、ピーク時を除けば、ドリンクやサイドメニューは全てレジ側で出すことになっている。

ただ注文を受けてお金を返せばいいこれまでと違い、限られた時間内でドリンク、ボテト、場合によってはサラダやデザートまで、全てを自分でお客様にお出ししなければならぬ。

一通りのメニューの出し方は教わったが、果たして全て上手にできるだろうか。

ほんの数瞬、悩んだ隙に、真奥はどういうわけかレジを出て佳織に何か話している。すると佳織は、頷いてから財布の中から何かを取り出した。

「これ、この前のレシートなんだけど、同じのと交換してくれるって言ってたから」

「えっ？」

それは、自分も客の一人だったときに木崎に言われていた、サービスレシートだった。

考えてみればあのコーラ浸し事件の日、佳織も『お客様同士のトラブル』に巻き込まれていたわけで、店側から何かしらのフォローをされていて不思議ではない。

「あ、俺そういえばカーボンあるんだ」

「は、はいっ！」

義妹の方は申し合わせたわけではないだろうが、読み取り式電子マネー機能が付いている携帯電話を取り出して、カーボン画面をこちらに見せてくる。

「頑張れ」

真奥はそう言うのと、一歩離れた所で千穂を見守る姿勢に入った。

千穂は、一瞬目を閉じて意識を集中すると、息を吸って吐いた。

試されている。応えなきゃ。

「……こちらは、このレシートと同じ内容のものでよろしいですか？」

「うん、いいよ」

「かしこまりました。こちら、無料にさせていただきます」

千穂は佳織のレシートに記載されているデザートとコーラのセットを入力し特殊メニューキーをタッチ。その中の操作で佳織のレシートに記載されているレシート番号を入力し、無料サービス対象になっていることを確認。価格を無料に設定し、注文を確定させる。

「これさ、クーポン使って、ポテトをナゲットとかに変えられるの？」

義妹はクーポン利用でセットメニューを注文してきた。

携帯電話読み取りのキーを入力すると、

「そちらの機械に携帯をかざしてください」

携帯電話をかざされた端末が青く光った。

「……お客様、こちらのクーポンは、フェアメニュー限定クーポンですのでサイズの変更以外

はお受けできません、申し訳ございません」

「じゃあこのままで。俺も飲み物コーラね」

「かしこまりました」

全ての注文を確定させ、

「お会計、六五〇円頂戴いたします」

「あ、デカイのしかないけどいい？」

茶色のお札を出された千穂は、きちんとその額面を確認する。

「一万円お預かりいたします。一万円入りまーす！」

高額紙幣をまず他のクルーに確認提示して入金、そしてお釣りの紙幣の枚数をまた確認提示。「お客様、申し訳ございません。お返しが細かくなってしまうかもしれませんがよろしいでしょうか？」ランチタイムのピークを過ぎていたせいで五千円札がレジに無かったため、お返しが全部千円札になってしまっていた。

それを義母にきちんと見えるように一枚ずつ数えてからまず手渡し、

「九千と、三百五十円、お返しいたします。トレーはご一緒でよろしいでしょうか？」

「いいまー」

「かしこまりました。右にずれて、少々お待ちください」

会計を確定させた時点で、レジの内側のモニターにウェイトタイムを知らせる画面が表示される。

その表示が赤くなる前に、全てのメニューをお客様の前に出さなければならない。

季節は四月。まだ店内には、ほんのわずかに暖房が入っている。溶けやすいデザートは最後だ。

千穂は佳織達の後続にお客様がいないことを確認すると、厨房を覗き込んだ。

義弥の注文したタマゴグラタンバーガーのグラタンパイが、フライヤーの中に投下されたのを見る。

あれは二十秒で揚がり、そこからパンズにゆで卵とキャベツと専用ソースが一緒に挟まれる。まず出来上がりが室温に左右されにくいポテトからかかろうとして、

「――」

千穂は目に入ったものを見て、即座に方針を転換。コーラを二つ用意してから、デザートを冷凍庫から取り出し霜を拭う。

そのとき丁度タマグラバーガーがコンベアから滑り出てきた。

千穂はウェイトモニターの隅の「シートウェイト」と書かれたキーを押してから、バーガーと飲み物とデザート、そして数字が書かれたプラスチックのパネルをトレイに置いて二人の前に差し出した。

「申し訳ございません。ただいまポテトが調理中でございまして、揚げたてをお持ちいたしませんので、こちらの番号札を持ってお席でお待ちいただけますか？」

「お、やった、タイミンが良かったな」

義弥は、ポテトが運れることをむしろ喜んでくれた。

「恐れ入ります。どうぞごゆっくりお召し上がりください」

「おう」

「どうもねささち」

意外にも、二人はすんなりと席へと去っていった。

途中何度も振り返られたが、少なくとも二人に悪い印象を残したという感じではない。

二人がやや遠い窓際の席に着いたのを見て、真奥が千穂のそばに戻ってきた。

「ちーちゃん」

「ど、どうでしたか？」

何よりも、真奥の評価が一番気になる。

実際の仕事は、ほとんど真奥から教わったのだ。これで落ち度があつては真奥に申し訳がな

い

だが一瞬の杞憂を吹き飛ばすように、真奥はにっこりと笑って譲いてくれた。

「凄いな、一度教えたこと、本当に一度で覚えちまつてるんだから。何も問題なかった」

「……っやつたっ！」

その瞬間、なんとも言えない喜びが胸の中に湧いて、思わずガッツポーズしてしまう。

「無料レシートのキーとかポテトのこととかで詰まるかと思っただけ、落ち着いてソツなくなりましたし、こりやもう饒ついてなくてもいいんじゃないか？」

「え、えっ？　そ、それはやです！」



ところが続いた言葉に、千穂は反射的にそう返していた。

「え？」

「あ、え？ あ、その、こ、困るってことです。私まだそこまでじゃ……」

「いや、だからここで放り出すようなことはしないよ。でも、こんなに物覚えいいなら、これから本崎さん、もっと突っ込んだこと教えていいって言ってくれるかもしれないぜ……」つと、はら、ポテト」

「あっ」

そのとき、ポテトが新しく揚げがったことを知らせる電子音が鳴り、フライヤーから黄金色のポテトを満載したかこが浮き上がってくる。

「それじゃあ後で、ポテトの塩加減教えるな。今はウェイトがあるから俺がやっちゃうけど……はいこれ」

真奥は、義妹のオーダーであるウェイト状態のMサイズポテトを手渡してくれた。

「……っ」

「瞬指先が触れ合って千穂は息を呑むが、真奥は特に気にした様子もなくついといった感じでトレーと紙ナプキンを差し出してくる。

「お客さんもそんなにいないし、ちょっと話してきたらいいよ」

「え、い、いいんですか？」

「長くなりすぎなければいいよ。行ってきな」

「はい、ありがとうございます！」

千穂はべこりと顔を上げて、佳織と義妹の待つテーブルへと向かった。

「お待ちせしました、こちらポテトMサイズです！」

「おー」

ポテトを置いて札を引き上げると、千穂は営業スマイルからいつもの顔に戻って話しかける。
なんとも、こそばゆい。

「……とまあ、こんな感じで働いています」

「あれ？ いいの？」

佳織がカウンターの真奥を気にするような素振りと言うが、

「うん、少しお話しておいでって」

「ふーん、結構寛容なんだね」

佳織は感心したように頷いてから、ふと千穂の顔から体、足元までをゆっくりと眺めはじめ
る。

「似合ってるねー」

「え？ そ、そうかな」

「ああ、なんか、すげえ大人っぽい」

義妹も佳織に同調するように頷くので、

「そ、そんなことないよ！」

つい照れくさくなって千穂はテーブルから回収した番号札をばたばたと振ってしまふ。

「こら義妹、足ばっか見てるんじゃないの！」

「ばっかショージーそんなじやねえよ！ 格好もそうだけど、さっきの接客？ すげえサマになってたじゃん」

「ああ、そうだね。少なくとも私の元バイト先の通中より、よっぽど良かったと思うよ」

「そ、そう？ ありがとう」

見られるだけでも照れくさいと思っていたが、手放して褒められてもそれはそれで恥ずかしい。

「こういうのを見ると、やっぱりバイトしたくなるな。なんかショージーから聞くかざりいい所っぽいし」

どこまで本気が分らないけど、義妹がまたそんなことを言い出して佳織が渋い顔になる。

「また始まったよ」

「なんだよ。俺結構マジなのに」

「あんたがマジになったって、さきちーの半分にもならないって。少なくとも私はここでバイトして、長続きする自信は無いよ」

「え？」

佳織の意外な言葉に、千穂も義理も首を傾げた。佳織は前に千穂の話を聞いて、ここなら長続きするかも、みたいなことを言っていたのに。

「佐々木さんー ちよつといい！」

すると突然、レジの方から真奥の呼ぶ声がした。少し長居しすぎたのだろうか。

「ごめん、行ってくるね」

「お、おう」

「頑張れー」

二人の声を背に、千穂はカウンターに駆け戻ると、

「佐々木さん、お客様がご挨拶したいって」

「え？」

お客様が私に？

どう思うとだろうと思ってそのお客の顔を見上げると、

「あっー」

千穂は思わず息を呑んだ。

そこに立っていたのは、大柄で恰幅の良い白人男性。

まだ一人のお客だった千穂のコーラを弾き飛ばし、結果的に千穂がこの店にアルバイトに来

る原因になった人物だった。

「あ、どうも、こんにちは！ その節は……」

思い切り日本語で話しかけてしまおうが、

「『こちらの従業員になっていたとは驚きました。先日のお書類は大丈夫でしたか？』って」

真奥が横で同時通訳をしてくれて、なんとか会話が成立する。

「実はまだ提出できてないんですけど、でも、学校の外で働くことで、少しは卒業後に何をしたいのが見えてくるかなって思ってます」

「『私も学生時代に学ぶべきことが分からず人生に迷いました。あなたと違い学生時代のうちにそれを解決しようとしなかったので後になって苦労しましたが、なんとか今では、誇りを持って働くことができます』」

「どんなお仕事をされてるんですか？」

「えっと、『ヘルシンキで日本の筆や刷毛を卸す商売をしています。日本の筆や刷毛に敵う品質のものは世界に存在しないので』。へえ！」

通訳しながら真奥も驚いている。

「ヘルシンキ。フィンランドの方なんですか」

千穂がそう尋ねると、躍しように頷く。

「明日ヘルシンキに帰ることになったけど、ちーちゃんがその後大丈夫だったか気がかりで、

もしかしてと思って店に来たんだってさ」

「でもあのおかげで、素敵なアルバイト先に勤めることになりました。まだ将来のことは分かりませんが、日本にいらしたときには、また寄っていつてください。そのときにいい報告ができるように頑張ります」

「是非^{ぜひ}そうします、頑張ってください。学生時代に学んだことは、必ず将来何かの形で役に立ちます」ってさ」

「はいっ！」

千穂は力いっぱい頷いてから、

「あ、真奥さん」

「ん？」

「……次にいらっしゃったときには、頑張って自分の言葉でお話できるようにしておきますって、伝えてもらっていいですか？」

※

「……」

「ね？ あんな先輩いたら、やってられないよ？ 普通に潰^{つぶ}れるって。自分が役立たずすぎて。」

どうしても退学したいなら止めないけど、少なくともあんたは今ここでアルバイトなんかできる訳じゃないよ」

「……」

「義理？」

「なあ、ショージー」

「ん？」

「……フィンランドってどこだっけ」

「っ……あんたね、ヘルシンキが分らないのはともかく、フィンランドの場所くらい知っときなさいよ。スカンジナビア半島！ 北欧！ そんなことも分らないのに、ささちーと同じレベルで饒こうとか片腹痛いよ」

「そういう遠いところから日本の筆って買ってくるもんなのか？」

「あの先輩が間違った通訳してなければ、あるんでしょ？ 多分間違っていないだろうけど」

「なんのために？」

「私を知るか！ 気になるなら本人に聞いてくりやいいじゃん」

「どうやって？」

「あの真奥さんをお願いするか、あんたが赤点取った学校英語で特攻したら？」

「……」

漸

夕方六時。

千穂の勤務が上がる時間まで、二人の友人は待っていてくれた。

二人に退席してもらわなければならぬほど混雑しなかったことも幸いした。

真実と仕織と義弥のおかげで、一人でオーダーを完遂する自信はついたが、自分自身が覚えなければいけないことはこれからも沢山ある。

いろいろ実りのある一日だったと一人手ごたえを感じていると、

「なあ、佐々木」

「ん？ 何？」

帰り道、義弥が神秘的な顔で尋ねてきた。

「あの英語話してた先輩さんって、大学生とか帰国子女とか？」

「違ふみたいだよ。私も前に聞いてみたんだけど、英語は仕事で必要だったから覚えたって言うた。実際、お店に結構多くの会社の外国人のお客さん来るから」

「バイトのためだけにそこまでするのか？」

それは、千穂も抱いた疑問だった。

もちろんそういう要素は間違はなくあるのだと思う。でも、

「江村君、フィンランドって、何語が話されてるか知ってる？」

「え？ 英語じゃねえの？」

千穂は首を横に振る。

「フィンランド語なんだった。英語とは違う言葉だけど、あのおじさん、学校卒業してから自分で勉強して英語とドイツ語、喋れる様になったんだって。そのとき参考にしたのは、学校の教科書だけだったらしいよ」

「……元から頭良かっただけじゃねえの？」

「大学、出てないんだって」

義弥は、黙り込んでしまう。

千穂はそんな義弥の横顔を見ながら、木崎の言葉を思い出していた。

進路とは、明日のために今日何をするかの積み重ね。

真実もあの白人男性も、明日必要だと思ったから、今日、英語を覚えた。

一年後、何をするかは分からなくても、明日も一年後も、絶対に今日と同じ日ではないのだから、そのとき持っているものは多い方がいいに決まっている。

世界を股にかけるような両国さんなら、明日は来なくても、来月にはまた日本に来るかもしれない。それまでに私は、英語で挨拶くらいはできるようになっておきたい。

今そう思っていることが、一年後、二年後に自分の財産になっているかどうかは、また別の話だけれど、でも。

「自分のために努力できないのに、人のために何かできるはずないもんね」

真実だけじゃない。木崎も他の先輩も、あのお店の人たちは皆そうだ。

人のために働こうと思うから、自分のために努力ができる。

自分のために働くから、人のために努力ができる。

「……どうということだ？」

義弥は不思議そうに千穂を振り返るが、

「教えてあげない！」

千穂は、自分が悩んで出した答えを教えてあげるほど親切ではないから、義弥には笑ってごまかすという意地悪をすることにした。

「私、今なら進路アンケート、書けそうな気がする」

「え？ ささちーまだ書いてなかったの？」

前を歩く佳織が、意外そうな顔で振り返ってきた。

「私は弓道が強い大学に行くって書いて出しちゃったよ。完全に嘘でもないし、今私が努力していることってそんならいしからないからさ。それで文句言われたら、そんなときまた考えるわ」

「……なんなんだよ、お前ら二人して」

そこからそれぞれ別れるまで、義弥はずっと消化不良な顔をしていた。

※

緊張の三者面談当日。

江村、佐々木、東海林の順で面談を受ける千穂達は、面談前に廊下に置かれた椅子にそれぞれ保護者同伴で座っていた。

あれほど来ない来ないと言っていた義弥の母も、当然来ている。

二人の兄の話や義弥本人の口ぶりから、冷たい教育ママかと思いきや、ぼっちゃりとして物腰の柔らかい優しそうな人だった。

先日千穂のアルバイト先に来て以来、義弥は極端に口数が少なくなってしまった。

おかげでここ最近、佳織も義弥を突つく口実が無くて落ち着かない様子だった。

「江村さん、どうぞ」

安藤教諭が江村母子を呼んで、教室の中に招き入れる。

義弥の母は千穂達に一礼するが、義弥はこちらを見ようともしせず中に入っていつてしまった。

「ささちー、ささちー」

扉が閉まるとすぐに、佳織が小さな声で千穂を手招きすると、教室のドアの隙間近くにしゃ

がみ込む。

「か、かお、ダメだよ」

「ちよつと住織？」

千穂と住織の母が、思い切り盗み聞き態勢の住織を同時に咎めようとするが、

「……本日はお忙しいところ、ありがとうございました」

聴き耳を立てるまでもなく、安藤教諭の声が漏れ聞こえてきて、全員拍子抜けしてしまう。

信輔、北高は校舎が古く、ドアをどんなにしっかりと締めても防音効果などほとんど無いのだ。

「……千穂、お母さんちよつとお手洗い行ってくるわ」

すると、苦笑しながら母が立ち上がった。

「……私も今の内に行っておこうかしら」

住織の母も、便乗するように立ち上がる。やはり大人としては、そのつもりがなくてもよその

の面談が聞こえてしまうのは決まりが悪いのだろう。

母二人が廊下の角に消えてしまうと、千穂と住織はお互いを見合う。

「……わ、私も」

千穂もそれに続こうと思ったのだが、

「ダメだよ、私達は待ってないよ」

と、住織に小声で、だが強引に椅子に戻されてしまった。

「それにき、最近義妹、なんかおかしいじゃん？ 何か心境の変化でもあるかと思つてき」

「もう……でも、聞こえるとは限らな……」

「で、江村、あんまり言いたくないことだが、大学の英文科志望つてのは、今のお前の成績だと結構キツいが、突然どうしたんだ？」

「……」

冗談のように良いタイミングで安藤教諭の声が聞こえてきて、千穂は吹き出しそうになる。それは佳織も同じだった。

義妹が英文科？

「……先生も知ってるかもしれないけど、うちの兄貴達、超優秀なんすよ」
驚きの冷めやらぬうちに、義妹の、少し拘えたような声が伝わってきた。

「でも、自分の成績が良くないこと承知で言うんすけど、俺、兄貴たちの後を追おうとはどうしても思えなかったんす。兄貴達ははっきり理由があつて裁判官とか医者とか目指したんだろうけど、じゃあ俺がなんの志もなく、今時のサクセスのお手本の職業目指したところでぜってえうまくいくはずないと思つて……」

「お手本を目指すのが悪いとは思わないが、それで？」

「……フィンランド」

義妹がたっぷり溜めてから言つた言葉に、千穂と佳織はまたも目を見開いた。

「ん？」

「先生、フィンランドから日本に筆を買いに来る人の人生って、どういう人生だと思えますか？」

「は？」

「それで生活できると思いますか？」

「ちよ、ちよっとよく分からんが」

安藤教諭が混乱するのも無理はない。

「思ったんすよ。医者とか公務員とか、金がいいとか安定してるとか言うけど、それって公務員になったから金もらえるんじやなくて、公務員として働いたから金もらえるんですよね？」

先生だって俺達に授業して給料もらってるんすよね？ ただ安定してるからってだけじやなくて、教師って職業に、先生なりにロマンや夢を見つけたから、今の仕事してるんすよね」

「ま、まあそうだが、うん」

「最近友達がバイトしてるの見て、思ったんす。職業の名前だけ目指すような考え方するんじやなくて、将来目標にできる職業を見つけたときに、迷わず目指せるようになるには何すりゃいいのかなって。で」

義弥はそこで少し、言葉を探しているようだった。

「……俺が見たおっさんは、学生時代から日本に筆買いにくるために勉強したんじやないと思うけど、もし将来俺が何かの弾みでそういうことをしなきゃならなくなったとき、今から

やつとかなきやなんねえこと何かになって思ったら、こないだ赤点取った英語じゃないかなって。でも、俺頭悪いし、何か分かり易い目標無いとぜってえサボるから、とりあえずレベル高いとこの英文料がいいかなって、そんな感じっす」

「……」

気がつくとも、千穂も佳織も、真剣な面持ちで義母の言葉に聞き入ってしまった。

「……それについてお母さんは……」

安藤教諭は、戸惑いつつも義母の母に話を振る。

「……この子の兄達も、私も主人も、この子の言うところの「お手本」のような人生を夢んでおります。主人は公務員ですし、私も結婚するまでは教員をしておりましたから」

「！」

千穂は驚いた。それもまた、知らないことだったからだ。

佳織の顔を見ると、やはり知らなかったらしくほとんども息を詰めるようにして中の話に聞き入っている。

「私達はそのような将来を強制したつもりはないのですが、義母自身、お手本のような大人に囲まれて窮屈な思いをしていたのだと思います。もしかしたら、兄達の進路も私達がそうするよう強制したように思っているのではないかと心配したこともありました」

「……そこまでは思わねえけど……」

「基本的に、本人が目標としていることがあるなら、親からは何も言わないつもりでおります。本人がそうすると決めたのなら、良かれ悪しかれ必然的に結果は出るものと思いますから、ご面倒をおかけしますが、先生にはよろしくご指導いただければと思います。……どうしてフィランドかは知らないけど、将来通訳にでもなるなら海外旅行のときにこき使わせてもらおうよ」

最後の一言は、息子に向けられた言葉だろう。そこには突き放すような感じは全くなく、千穂の母、里穂と同じ、子供のことをいつも考え案じている母親の声があった。

「赤点なんだから、期待すんなよ」

「そこはこれから勉強するんでしょ」

その後しばらく健談とも面談ともつかぬ話が続き、やがてがたがたと立ち上がる音が聞こえて、千穂も佳織も姿勢を正して何食わぬ表情を作る。

だがその瞬間に佳織が小さな声で、

「義妹のくせに……」

と小さく呟いたのを、千穂は聞き逃さなかった。

江村母子と安藤教諭が連れだつて教室から出てくる。

「江村さん、お疲れ様でした。じゃあ次は佐々木さん……あれ、佐々木、お母さんは？」

「あっ、今お手洗いに行つててすぐ……」

「すいませんすいません。お待たせしました」

千穂が廊下の先を指し示すと、里穂が潤ったように駆け寄ってくる。

「どうも、お待たせしました」

江村母子と入れ替わりで教室に入る千穂は、

「まだアルバイト、したい？」

すれ違いざまに聞いてみた。

義弥は何故千穂がそんなことを聞いたか分からないようだったが、口を変な感じに歪めてソロボを聞いた。

「お前らがうるさいから、とりあえず今は勉強しとく」

そう言つて駈ずかしそうにさつさと帰つていつてしまった。

妹織が、その背をなんとも言えない顔で追う。

義弥が変わつたのは、もちろん本人の意識もあるが、真実や、あのフィンランド人の男性、そして千穂の仕事を見てくれたからなのだろうと、自意識過剰ではなく思う。

悔しいのは、自分の考えた進路を義弥に先に言われてしまったことだろうか。進路アンケートには、千穂も大学の英文科を進路の候補として記入しているのだ。

理由も義弥とは同じ。

今積み重ねられるもの、積み重ねたいものがそれだったから。

世の中は、自分達のような学生が見ている、または見ようとしているものを更に越えて広い。今日の前に見えている世界と、来年見えている世界が同じとは限らない。

それならば、新しい世界に飛び込むために必要なものを、手に届くところから一つ一つ手に入れていかなければいけないのだろう。

それがきつと、最終的に自分が進むべき路なんだろうと思う。

進路は、ゴールじゃない。

あくまで途中のチェックポイントなんだ。

頭の中ではそうやって偉そうなことを考えながら、一方で聞こえてしまった義塾の受け答えと話が被らないようにするにはどういえばいいかを今からシミュレートしているみみっちい自分もいて、ちよっぴり情けなくなる。

「まあ佐々木の成績だったら特に文系と言わず色々な大学の選択肢があるが、とりあえず第一希望に英文科が入っている理由を聞こうか」

目指す理由は、努力する動機は、別に一つである必要は無い。

義塾ではないが、シンプルな理由は、何かを目指す立派な動機だ。

入学して間もない部活見学で見た、先輩のあの竹弓を構えた「会」を見たときのように。自分の未来を書き込む紙が結びつけた、数々の大人たちの「仕事」を見たときのように。

あの場所に辿り着きたい。

同じ世界を見てみたい。

「私、尊敬する、いつか追いつきたい先輩がいるんです」

あの人と同じ地平に立って、同じ世界を体験したい。

※

これはまだ、私が何も知らない女子高生だった頃の話。

明日の変化を覚悟していても、それが世界を一度させるような変化だとは思ひもしなかった頃の、佐々木千穂の話。

この面談のわずか二週間後、私は、あの人の真実を知った。

真実を知った私の世界は、今までとは全く違う形で広がりはじめ、当たり前前の女子高生だった私を、多くの命と世界の趨勢を賭けた戦いに放り込んだ。

これはその、ほんの少し前のお話……。

作者、あとがく — AND YOU —

今回のあとがきには若干のネタバレ要素があります。

あとがきから先行される方、ご注意ください。

「はたらく魔王さま!」の文庫一巻から六巻までに登場するアルバイトやお仕事について、和ヶ原自身が経験したことのある業種は実は一つもありません。

ですが本書に収録されている四つのお話は、和ヶ原の過去の経験が糧になり生み出されたお話です。

本書に収められた四つの物語の主役は、魔王サタンこと真奥貞夫や勇者エミリアこと森佐恵美らいつものメンバー以外に各編もう一人ずつ配置されております。

真奥達と、それぞれの日常を生きる彼らが織りなす物語の一幕に、是非ご注目ください。

「魔王、誠実な商売を改めて決意する」

本編二巻ラストの約三十秒後から始まる物語。

落ち着いて、まずは誰かに相談しましょうというお話。

今はテレビでも「実録！」みたいな感じで報道がされている通り、彼らの論理にはどう考えてもおかしい穴があるものです。

このお話は、たまたまスーツ姿で出かけたある日の午前中に、地元の駅近くの路上で突然ラ・フランス四個一セットを売り込みされた経験が元になっています。

私は別に会社員じゃありませんでしたが、彼らは出勤時間のスーツの男が果物買ってくれると思ったんでしょうかね……。

「魔王、捨て猫を拾う」

和ヶ原はデビュー直前に、実家で十六年の時間を共にしたセキセイインコを老衰で亡くしました。

セキセイで十六年という大往生（人間換算で約百三十歳）もさることながら、白内障や二度の脳梗塞を乗り越えた無双の強者だったのですが、そのときお世話になった獣医師の先生がとても親切な方でした。

感謝と、全てのペットが幸せな生涯を送れることを願って。

ところで実家の庭で同じ家系の野良猫が四年連続で子猫産んでて、かわいだけに無下に追い出すわけにもいかないし、でも親父が趣味でやってた蕁草栽培の原木で爪とぎしてダメにしちやうし、どうにかならんものでしょうかね。

「魔王と勇者、お布団を買いに」

アラス・ラムス、というキヤラクターが生まれる一因である従兄弟の娘が、一年でえらい勢いで大きくなっていることにショックを受けました。

また友人夫婦に生まれた赤ちゃんへの誕生日のお祝いを考えたときもお店の人に色々なアドバースをいただいたり、実際に触れ合ったりしたことで、乳幼児の成長の物凄いとしか言いようのないスケールの大きさを実感。

真奥と恵美も、あんまり悩んでると、時間の方が先行してしまつて次から次へと違う悩みが生まれることになるぞ！

「はたらく女子高生―New Days of Go―」

佐々木千穂と真奥貞夫の出会いを描いた「はたらく魔王さま！」一巻の時間に続く前日譚。本書書き下ろしの物語です。

心身の超人化が着々と進む千穂も、この頃は普通の女子高生と言って差し支えない普通の女の子でした。

普段の千穂は、岡田の人間が年上ばかりなので、常に敬語で話すキヤラになってます。

企画時点ではそんな千穂の、友達と周託のない日常会話を描いてみたかっただけだったので

すが、一体どうしてこうなった。

来年のことを言うとは鬼が笑うとは言いますが、笑っているうちが華とも申します。

そのうち色々な締め切りが鬼の形相で金棒振り回して追いかけてくるはめになりますので、決められるもんなら早いうちに決めた方が良いとは思っています。

和々原は昔から追いつけ回された挙句に叩き潰される源ですが。

さて、本書が読者の皆様のお手元に届くのが二〇一三年の二月十日以降。そして二か月後の四月から、アニメ『はたらく魔王さま!』放送開始。

更には同月十日、『はたらく魔王さま!』が発売となります。

「はたらく魔王さま!」を描きはじめて三年目に突入して、ますます広がる世界を是非楽しみにお待ちください。

そして広がってようが結局は、毎日三食食べながら楽しく過ごすために、彼らは今日も日常を大切にしながら一日一日を頑張って過ごしていきます。

また本書のような、ささやかな日常を濃密に描いたお話を描いてみたいと思います。

それではっ!

7巻発売おめでとうございます！

電撃大王版コミック作画の総編集生と申します。

2013年2月現在、鈴乃の渡場した辺りを

探かせていただいております。

ヴィラ・ローザ宮様に華やきが生まれて、

揃っていて楽しいです！笑

春の
同好会

松原生
④

SPECIAL GUEST 01

7巻発売 おめでとう お祝いします!!

スピンオフコミック『はたらく魔王さま! H&S!』を連載しています、三嶋くろねと申します!

エミリアとアラス・ラムスのコンビが可愛くて大好きです!

はたらく魔王さま!
H&S!
お祝いします!!
三嶋くろね



「はたらく魔王さま! 7」
巻末特別企画

履歴書集

履歴書



氏名	山崎 真弓
生年月日	平成 15 年 12 月 25 日 (満年齢) 現年 25
生年月日	2003 年 12 月 25 日 (満年齢) 現年 25
出生地	東京都渋谷区 西原, X-X-X
現在地	西原, X-X-X 204 号室
電話番号	03-XXXX-XXXX

年	月	学校・職歴
平成 15 年		東京都立管理中央高等学校 卒業
平成 16 年		明治大学経営学部入学
平成 17 年		明治大学経営学部 卒業
平成 18 年		株式会社マダロムに社員として入社 現職

資格	食品衛生関係者、防災管理員、福祉士二種、労働安全衛生二種、マダロム-6229、TSE15-307860		
得意分野	仕事、人材育成、料理、旅行		
希望職種	学生時代		
現在所属	現在現職		
結婚状況	未婚（約 25 分） 未婚（約 25 分）	結婚状況 なし	結婚状況 なし

『概念送受』修行 基礎編



1

肝心なのは、声に出さなくても意志が伝えられると心と体が理解すること!

自転車に補助輪ナシで乗れるようになるのと同じだ。心と体が「乗れる」ことを一度覚えるまでが一番難しいだろう? 乗れるようになってしまえば、後は色々な自転車に乗れるようになるってことだ。

2

伝えたい「意思」を「エネルギー」に載せて飛ばせば第一段階はクリア

人間なら聖法気、悪魔なら魔力に乗せるわ。でもこれは、道の真ん中で声を出さずに大声を上げるようなものね。これではまだ、伝えたい相手には伝わらないわ。



3

「意思」を伝えたい「相手」を絞り込む

携帯電話は、確実に相手の番号に声を届けてくれるから、絞り込みの感覚を掴むのにピッタリなんだそうです。サリエルさんの言うことだから少し不安ですけど……

4

一対一でやりとりできたら基礎は終了!

一対複数、複数対複数、超遠距離、術者でない者同士の通訳など、様々な応用ができる。が、これは千種殿だからできる基礎修行だ。本格的に学びたいなら、エンテイスラに行くことを勧める。



●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま!」
(電撃文庫)

「はたらく魔王さま!」2
(月)

「はたらく魔王さま!」3
(月)

「はたらく魔王さま!」4
(月)

「はたらく魔王さま!」5
(月)

「はたらく魔王さま!」6
(月)

本書に対するご意見、感想をお寄せください。



あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和×原聡司先生」係

「Q29 先生」係





電撃文庫

はたらく魔王さま! 7

和ヶ原聡司

発行 二〇一三年二月十日 初版発行

発行所 桜田正晃

株式会社アスキー・メディアワークス

〒一〇二八五八四東京都千代田区墨田一八十九

電話〇三三五二二六八三九九（編集）

http://www.asakusya.co.jp/

発行人 株式会社角川グループパブリッシング

〒一〇二一八一七七東京都千代田区墨田二一三二二

電話〇三三二二三八八六〇五（営業）

印刷所 東京印刷 OHTA・MANEKO

株式会社印刷

監事 株式会社ポニーテール・エンタテインメント

本書は角川グループパブリッシングの発行所である東京印刷株式会社にて印刷されたものである。印刷された本書の著作権は、著者の権利である。

電子版の権利は、著者の権利である。電子版の権利は、著者の権利である。電子版の権利は、著者の権利である。

本書は、角川グループパブリッシングの発行所である東京印刷株式会社にて印刷されたものである。印刷された本書の著作権は、著者の権利である。

本書は、角川グループパブリッシングの発行所である東京印刷株式会社にて印刷されたものである。印刷された本書の著作権は、著者の権利である。

本書は、角川グループパブリッシングの発行所である東京印刷株式会社にて印刷されたものである。印刷された本書の著作権は、著者の権利である。

本書は、角川グループパブリッシングの発行所である東京印刷株式会社にて印刷されたものである。印刷された本書の著作権は、著者の権利である。

© 2013 SATOSHI WAGAHARA

Printed in Japan

ISBN978-4-04-891406-2 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その道を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times/Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦



はたらく魔王さま！

2014	2015
------	------

はたらく魔王さま！ 2

2009	2010
------	------

はたらく魔王さま！ 3

10	11
----	----

はたらく魔王さま！ 4

54	55
----	----

はたらく魔王さま！ 5



電撃文庫

はたらく魔王さまー6

和久藤雄監修

イラスト／D219

ISBN9784040700004

マダロナルドに復帰した魔王は、心算一転、新たな資格を取ることに。そんな中、千穂が緊急決意を遂げたいと言い出て、持乃が修行的場に混入したのはなぜが原因だった。

わ-6-6 2423

はたらく魔王さまー7

和久藤雄監修

イラスト／D219

ISBN9784040700004

魔王と野良がアリス・ラムスのおお抱擁を買いに3人でお出かけ。千穂が魔王と初めて出会った頃のエピソードなど、魔王側は他2編を加えた特別編でお届け。

わ-6-7 2490

ウィザード&ウォリアー・ウィズ・マネー

三河ごーすと

イラスト／D219

ISBN9784040700004

宝う倒にならなければ、ただ軍われるたけなんだ……。マネーが支配する世界で、魔術師と騎士として戦う少年少女を描く、第1回電撃小説大賞（銀賞）受賞作。

わ-10-1 2274

ウィザード&ウォリアー・ウィズ・マネー2

三河ごーすと

イラスト／D219

ISBN9784040700004

はやくも続編が登場！ 第18回電撃小説大賞（銀賞）受賞作第2弾。完全結晶社会を舞台に繰り広げられる、口癖「+無限バトルのファンタジー」がウケアタシコシ。

わ-19-2 2340

ウィザード&ウォリアー・ウィズ・マネー3

三河ごーすと

イラスト／D219

ISBN9784040700004

魔王の前に訪れた「文芸復興派」新魔術のチャンス。は、国家との機密を条件とする魔術の取引だった。そのとき、魔王のために国境を下した決闘は――。

わ-19-3 2406



ミニッツ

アサギ野方筆

イラスト／ゆーげん

ISBN 978-4-04-079271-4

机上で一分だけ相手の心が読める能力「ミニッツ」を持つ、一年生と生徒会長になる野望を持つ彼は、劇中風・現実風の展開する心讀ゲーム「黒猫と天才ゲーム」に挑む。

お-14-1 2309

ミニッツ2

アサギ野方筆

イラスト／ゆーげん

ISBN 978-4-04-079272-1

「相手の心を読め」と「能力を持つ者の前に、常に勝負に勝つ」「神」のよきな少年が現れる。次なるゲームは「ワルファの十四集」。学園闘し合い、アーストリック、再び。

お-14-2 2369

ミニッツ3

アサギ野方筆

イラスト／ゆーげん

ISBN 978-4-04-079273-8

黒猫を見抜く能力「ミニッツ」を持つ神上達にも形式があった。それは、人類にとつて最も卑劣で残酷的な手段……。今度は過とのイチャイチャな学園バトル。

お-14-3 2419

ミニッツ4

アサギ野方筆

イラスト／ゆーげん

ISBN 978-4-04-079274-5

記述すべき第一回学園闘。優秀な企画に与えられる大量の生徒がイベントを扱い、神上達があるところには「オオ」の未知なる展開に……。――学園バトル突入。

お-14-4 2489

ラストセイバー

高月山筆

イラスト／板戸ロミ

ISBN 978-4-04-079275-2

西暦二一四〇年、最後の敵「天使」の出現にさきかれ、人類は絶滅の危機に瀕していた。そして今年に立ち上がる――臨く戦を手に。新決死スビーードバトル、開幕。

3-5-6 2440

ラストセイバーⅡ 恋殺の剣闘

秀月山軍
イラスト／板野るも

ISBN 978-4-04-091331-7

西暦二一四〇年で暮らすことになる名剣士達への入団を決定する旅の途中に、行方不明だったクラスメイトが現れ、新たな異端バトル、血闘の剣闘場――

あ-37-1 2483 5-5-7 2486

アリス・リローデッド

ハロー、ミスターマグナム

西原まつり
イラスト／藤原良雄

ISBN 978-4-04-091332-4

わたしの名前はミスター・マグナム。見た目の通り、華やかだ――。東海学園小説大賞（大賞）受賞の、未来を切り開くマジック・ガンアクションマンガ登場――

あ-37-1 2483

明日、ボクは死ぬ。キミは生き返る。

藤まる
イラスト／エのの

ISBN 978-4-04-091333-1

「君」に心奪われ替わる「ぼく」も「君」として生まれ変わる。交際日記の中でしかはききとことのできない二人の、人形軍団軍団の学園ストーリー―― 東海学園小説大賞（大賞）受賞作！

ふ-10-1 2484

エーコと「トオル」と朝活の時間。

朝活部部長
イラスト／MACCO

ISBN 978-4-04-091334-8

クラスから孤立した少女「エーコ」は、様々な人形軍団の「トオル」君と知り合い……。シニカルな学園ストーリー。 東19 朝活部小説大賞（大賞）受賞作！

や-7-1 2485

塔京ソウルウィザーズ

東海学園大賞
イラスト／小柳信史

ISBN 978-4-04-091335-5

東海学園小説大賞（大賞）受賞の、未来を切り開くマジック・ガンアクションマンガ登場――

あ-38-1 2486



電撃文庫

アクセル・ワールド1―黒雪姫の帰還―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-067517-9

『黒雪姫』と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられっ子の未来を変える。ウェブ上でカースマの人氣を誇る作家が、ついに最新大作〈天宮〉を登場――

か16-1 1718

アクセル・ワールド2―紅の暴風姫―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-067843-8

デブでいじめられっ子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のもとに、「お兄ちゃん」と呼ぶ異性知らずの少女が現れてや

か16-3 1775

アクセル・ワールド3―夕闇の騎乗者―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-068060-7

「ゲームオーバーです、有期先輩……いッスルバークロウ」黒雪姫不在の中、スクールカーストの頂点に上った新人生、歴例的な壁の力の前に、ハルユキは倒れ……

か16-5 1834

アクセル・ワールド4―蒼空への飛翔―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-068327-2

「ここから、もう一度進み抜けてみせる。僕はもう、ずたけ胸いて歩くのはやめたんだ」翼をもがれたシルバークロウ・ハルユキが、ついに復活する――

か16-7 1939

アクセル・ワールド5―星影の浮き橋―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-068593-1

とある日、ハルユキは新たなゲーム・ステージ出現の通知を受ける。〈宇宙〉ステージ。そこに降り舞いたハルユキは、歴史的なゲームイベントを体験する――

か16-9 1953



アクセル・ワールド6―浄火の神子―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-065566-1

〈安楽の地〉に送られていたハルユキは、黒闇城以外の六星から、〈浄化〉の命令を下される。その鍵を握るアバターは、意外な場所に関与されていて……

か16-11 2018

アクセル・ワールド7―災禍の鎧―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-065567-8

〈浄化〉に閉じ込められた〈シルバー・クラウド〉、脱出不可避と思われる中、ハルユキは不思議な現象を見る。それは〈災禍〉にまつわる二人の物語……

か16-13 2082

アクセル・ワールド8―運命の連星―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-065568-5

思わぬしき強化外装〈ヘイローキット〉に就かれ、親友同士で戦うことになったタクムとハルユキ。人の心霊が強く共鳴し合い、激突する……その勝負はか

か16-15 2135

アクセル・ワールド9―七千年の祈り―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-065569-2

再び〈タクム・デイズスター〉となったハルユキ。滅ぼすべき敵を求めて〈加速世界〉を侵略する。そして、その最前には〈神〉のアバターの姿が立ちふさがり……

か16-17 2262

アクセル・ワールド10―Elements―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-065570-9

ハルユキが新人生の扉扉に巻き込まれていたとき、黒闇城は衛星軌道からの攻撃で、不思議なアバターから対戦を仕掛けられていた……。書き下ろしを含む最終巻。

か16-18 2338

アクセル・ワールド11 —超硬の狼—

川原 雅

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-865951-0

打倒の加速テクニクで導き出された結論とは、シルバー・タロウの新アビリティ「強制睡眠」の獲得作戦だった。謎の黒猫（じべル）アバターも登場、いったいどうなるの？

か-16-20 2307

アクセル・ワールド12 —赤の紋章—

川原 雅

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-865952-7

神隠しとホムラ・大穴後マタロンの交戦アビリティの習得とマッシュンに挑むハルユキたちにもあるが、強敵アバター・サーベラスとの戦いは意外な結果を招く――

か-16-22 2376

アクセル・ワールド13 —水際の号火—

川原 雅

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-865953-4

（マタロンの）打倒を目指すハルユキたちの戦いの舞台は、リアルワールド／学園中文化会館へー 加速世界に混乱を広めんとする「マッシュン・ランサー」の機甲が送り――

か-16-25 2487

ソードアート・オンライン／アイエンクラッド

川原 雅

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-865954-1

クリアするまで脱出不可、ゲームオーバーは死。を意味する。この仮想空間は、ゲームであっても逃げではない。第15回電撃大賞（大賞）受賞者が輝く大作――

か-16-2 1746

ソードアート・オンライン／2ndシーズン／アスリッド

川原 雅

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-865955-0

アイエンクラッドでは新しい「ビーストアーマー」の少女・シリカが舞台に臨んだとき、彼女を助けたのは、素性も分かっていない（黒い剣士）キリキリだった。

か-16-4 1804

ソードアート・オンライン③ フェアリー
ダンス

三原 徹
イラスト／あおぞ

ISBN 978-4-04-862184-1 C

謎のデスゲームSAOをクリア、現実世界に戻ってきたキリト。しかし、攻略パートナーであり、永遠の誓いをたてた恋人アスナはいまだ帰還しておらず……。

9-16-6 1862

ソードアート・オンライン④ フェアリー
ダンス

三原 徹
イラスト／あおぞ

ISBN 978-4-04-862452-7

第4の「A.L.O.」内へ、アスナを救うためのログインしたキリトは、ついに〈守護神〉までたどり着く。しかし、彼の地盤を、敵と共にした少女・リーファが知ってしまった……。

9-16-8 1924

ソードアート・オンライン⑤ ファントム
バレット

三原 徹
イラスト／あおぞ

ISBN 978-4-04-862453-4

〈SAO〉事件から一年。文にキリトを待ち受けるのは、敵と盟約のVRMMOの「ファンタイル・オンライン」。突如発生した謎の殺人事件を調査が…… 新章突入――

9-16-10 1985

ソードアート・オンライン⑥ ファントム
バレット

三原 徹
イラスト／あおぞ

ISBN 978-4-04-862454-1

今までの「ログインしたキリトは、敵が支配するこのゲームで唯一〈天罰〉を蒙り、〈守護神〉を倒すまで。そして決闘、ついに〈守護神〉の正体を暴く……。

9-16-12 2046

ソードアート・オンライン⑦ マザーズ・
ロザリオ

三原 徹
イラスト／あおぞ

ISBN 978-4-04-862455-8

次世代型VRMMO「ウルグヘイム・オンライン」にアスナが潜入した。とあるアバターとの大喧嘩を思い出さず「マザーズ・ロザリオ」編、登場――

9-16-14 2107

ノードアート・オンライン 8 アーリー・アビッド・レイト

川原 礫

イラスト／ 888800

15歳から17歳までのキャラクターの成長が中心

今までので飽きた読者を新人の群衆を導く「黒い魔物」(A.L.O.) 出現の黒幕を探るクエストを導く「キリトバ」キリトが「A.L.O.」の目的に体当たりするエピソード「怪盗団の目撃者」

か-16-15 2170

ノードアート・オンライン 9 アリシゼーション・ビギニング

川原 礫

イラスト／ 888800

15歳から17歳までのキャラクターの成長が中心

男つけばキリトは、黒幕の記憶を無くし、謎の魔物世界に入り込んでいた……。『8 A.O.』史上最も支持を得たエピソード、壮大なる「アリシゼーション」編、開幕!!

か-16-19 2278

ノードアート・オンライン 10 アリシゼーション・ランニング

川原 礫

イラスト／ 888800

15歳から17歳までのキャラクターの成長が中心

謎のファンタジー世界に入り込んでしまったキリトは、そこで出会った少年ユージオと共に、危険「セントリア」に向かう。そして、二年が過ぎた――

か-16-21 2358

ノードアート・オンライン 11 アリシゼーション・ターニング

川原 礫

イラスト／ 888800

15歳から17歳までのキャラクターの成長が中心

その「魔物」は突然やってきた。キリトとユージオの仲間達少女二人が、未知な魔物の前に挑められた。運命は二人の姿を変えた。ユージオの記憶は、破壊に達し……

か-16-24 2450

ノードアート・オンライン 12 ロングラン

川原 礫

イラスト／ 888800

15歳から17歳までのキャラクターの成長が中心

キリトが魔物の騎士となつたエピソード「黒い魔物のアリア」(黒い魔物)「アインクラッド」(魔物を倒す)から始まる、ついに「ロングラン」シリーズ、ついに行方不明!!

か-16-23 2417



原作&アニメ&ゲームなど春香の魅力が詰まった
至高の一冊、絶賛発売中!

電撃文庫編集部 編

乃木坂春香 ガ全テ

グラビアパート

原作とアニメ版の両方のイラストをはじめ、PV（設定林美子×後藤麻衣×清水香里×堀田佳央×佐藤利恵）のグラビアインタビューなど、大満足のページ数で語るビジュアルコーナー。春香の魅力をたっぷりと堪能ください。

ストーリーパート

原作が後の全話を徹底解説! ストーリーの中に秘められた設定や丸秘エピソードなどもコラムで先紹介!

キャラクターパート

原作版とアニメ版の両方のビジュアルをふんだんに使用し、『乃木坂春香』の世界を彩る様々なキャラクターたちを徹底紹介! いまだ世に出たことの少ない設定図などもお目見えしちゃいます!

メディアミックスパート

TVアニメ第2期のレビューと第1期のストーリー紹介、ゲームやコミック、グッズ化などなど、春香のメディアミックスの全てを掲載!

スペシャルパート

①五十嵐麗香インタビュー

原作者の五十嵐麗香氏が、竟になる20の質問に答えてくれました! 原作設定と制作の秘話がここに――。

②美夏ちゃん編集員が行く、出張版!

コマちゃんこと後藤麻衣さんが大活躍した「電フェス2008」も、コマちゃん視点で完全レポート! メインステージや公開録音の模様だけでなく、会場内を見学した模様を収録!

③しゃあ様さ下ろし、ちょっとえっちな熊本

しゃあめと五十嵐麗香の両氏が書き下ろした、ちょっとえっちな美夏の熊本を本格的公開! ちびっこメイドのアリスも参戦して、大人に憧れる美夏が取った行動は――?



乃木坂春香ガ全テ

電撃文庫編集部 編
954頁 178ページ イラスト しゅめ
絶賛発売中

電撃の単行本



好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ!

エナミカツミ画集

『バツカーノ!』

収録 542ページ・ハードカバー・112ページ

人気イラストレーター・エナミカツミの、神羅の初画集がついに登場!
『バツカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでも多数掲載!
そしてエナミカツミの虎顔良情ダブル掲載するしも収録の永久保存版!



注目コンテンツはこちら!

BACCANO!

『バツカーノ!』シリーズのイラストを大
がリウム特別掲載。

ETCETERA

『ブレンダ!』をはじめ、電撃文庫の人
物タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS

ゲームやその他の文庫など、幅広い図
像の一部を収録。

名作劇場 バツカーノ!

『チェスワフほうやと(ピルの)
虎の仲間達』

豪華贈り物として贈る『バツカーノ!』
のスペシャル図録!

※定価は税込みです。



ヤスダスズヒト待望の初画集登場!!

イラストで綴る歪んだ愛の物語——



★ Shooting Star Bobop
Side:ORRR!! ★

ヤスダスズヒト画集

シューティングスター・ビバップ

Side:デュラララ!!



content

■「デュラララ!!」

大好評のシリーズを飾った豪華イラストを一冊掲載!! 歪んだ愛の物語を切り裂いた、歪海のフォトグラフィ——

■「結衣大橋シリーズ&世界の中心、鈴山さん」

尚ほ人気シリーズのイラストを紹介!! 戦う犬の物語も、ちょっと不思議な世界の実験メモリアル。

■「Others」

「怪獣新聞」などの商業文庫イラストをはじめ、丸の内コラムエッセイや雑誌表紙、さらにアニメ・雑誌など各媒体にて掲載した、語り尽くすのイラストを掲載!!

※ヤスダスズヒト 44歳11月10日

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上屋野治平（『ブギーポップは笑わない』）、高橋秀七郎（『戦国恋のシヤナ』）、
成田真悟（『バッカーズ！』）、支倉凍砂（『狼と香辛料』）、
有川 浩（『国産船戦争』）、川原 礫（『アクセル・ワールド』）など、
常に時代の一線を成るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」、
新時代を切り開く才能を毎年募集中心

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

※第20回より賞金を増額しております。

賞
（共通）

大賞……………正賞＋副賞300万円
金賞……………正賞＋副賞100万円
銀賞……………正賞＋副賞50万円

（小説賞のみ）

メディアワークス文庫賞
正賞＋副賞100万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞＋副賞30万円

編集部から選評をお送りします！

小説部門、イラスト部門は1次選考以上を通過した人全員に選評をお送りします。

イラスト大賞はWEB応募も受付中！

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

<http://asciimw.jp/award/taisyo/>

編集者のフポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載！